
ハイスクールD×D～道を貫き抜きし者～

後より出でて先に断つもの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D 道を貫き抜きし者

【Nコード】

N1928U

【作者名】

後より出でて先に断つもの

【あらすじ】

兵藤一誠の幼なじみ、本道進がおりなすハイスクールバトルアクション！とりあえずヒドい！！なにかって？なにもかもだ！！処女作ですであしからず。メチャクチャな批判はマジ勘弁してください。作者メツチャ打たれ弱いんで。それでもよいならみてやってください。

俺とあいつの日常編（前書き）

この度、ハイスクールD×D道を貫き抜きし者々を読もうとしていただき、誠にありがとうございます。さて、この二次小説は私もはじめてなので、かなり至らないところが多数あると思いますが、続けていく中で力をつけていきたいと思っております。そのためには皆様の感想が必要となります故、できるのであれば感想を書いていただきたく思います。注意事項としては感想で批判的なもしくは、中傷的な事を書かないでいただきたく思います。あくまで、よりうまくなるためのアドバイスとこの作品の感想をかいていただく場であることをご理解していただきたく思います。長々となりましたが、この作品を楽しく読めるようにがんばりたいと思います。

俺とあいつの日常編

『俺、彼女ができたんだッ！！』

そんな天地が前周りにして後ろ周りにしてハンドスプリングしてトリプルアクセルしてもあり得ないような話を聞かされることになった春いきなりそんな夢物語をいいだした少年、イツセーこと兵藤一誠。

普通の男子なら『ああ、よかったな。』ぐらいすむのだが、こいつの場合は違う。

なんてったってエロい。まあ、エロい奴はこの年ならだいたいそう
だろ。みんなエロ本の一冊や二冊くらいは常備してるだろ。しかし、
こいつはここで終わらない。なぜなら、学校・・・いや、近隣の学
校に通ってる奴なら大体が知ってるほど、コイツはエロい。むし
ろエロさしかない。エロの為に生きてる様なもんだ。ほんと・・・
・将来、一体何になるんだ？頼むから犯罪にだけは手を染めないで
くれよ・・・

あとは・・・そうだなあ・・・、結構熱い物をもってる。
・・・かな。

それが、俺、本道^{ほんどう}進^{すすむ}がみてきた。兵藤一誠という存在の簡単な理
解だ。

そんな奴であつたせいか、俺ははじめこいつのいつていることがま
ったく理解できなかった。

『うるっせえーぞ、イツセー！ギャルゲ出来ねえじゃねえかッ！！』

大体、んな世界が四回転半しようとして失敗して今から地球が太陽に突っ込むみたいな嘘いわなくていいんだよッ！！」

『事実だよ！！てか、俺が女の子と付き合っつのは世界滅亡並の嘘と同列なくらい信じられないことなのッ！？』

『うるっせえーな、うるっせえーなッ！！こちとら今からギャルゲして二次元の嫁たちに会いにいこうとしてるのを、お前に止められて殺意がわいてんだよッ！！しかも、理由が彼女ができたからあ！？んな有り得ない事言ってないでささっと帰ってシコってねろッ！！』

まったく、イライラする。俺ははやく嫁たちに会いたいんだ。『あまがみ』してもらいたいんだ。

『いやだからホントだつてッ！！ほらッ！！携帯見ろつてッ！！女の子の名前書いたるじゃんかッ！！』

そう言っつて顔の前に無理やり携帯を近づけてきた。

『ほら、見ろつて。ちゃんと女の子の名前があるだろ？』

そういつて見せてきたディスプレイにはくつきりと（天野夕真）と書いてあった。

『てんの・・・ゆうまさ？え？男？』

読めん・・・いやまじで・・・・・・・・・・

『あまの ゆうまッ！！だよッ！！ホント頭弱いね・・・』

そう言って俺に視線を向けてくるイッセー。

『悪かったなッ！！実際頭が悪くなった原因は親父のせいだッ！！』

ホント、あれはないわ・・・

なんでガキの頃からあんなに殴られなくちゃならん。拳法の練習でも限度があるだろ・・・・・・・・・・

『まあ・・・アレはヒドかったけど・・・・・・・・・・って、そんなことほっというて彼女だよ、彼女。』

ほっとくな。こちらら命がけだったんだぞ、こら。しかし、コレは・・・・・・・・・・マズいな。

『イッセー・・・・・・・・・・、ついに空想彼女を創るようになってしまったか・・・・・・・・・・』

『ああ、まあ、世界滅亡がほんとに今すぐ起きると言つのも信じ
てしまうと仮定において、おまえに彼女が出来たとしてよ。』

『ぐすっ……ひっく……うん。』

うぜえ……まじうぜえ……高校生のマジ泣きがこん
なうざいとわ……

『ほらなくなつて、キンチョールまくから。』

『うん……ってなんでキンチョールッ!?!』

『いや、あつたから?』

『疑問文になつてるよ!?!』

今度はやたらテンションが高くてうぜえ……
もっかい泣かしてや……らないでおこつ、なんかマジ話っぽいし。

『んで?世界がどうなる?』

『もういやだあああああああ——————————』
『…………』

くここからさらに一時間かかりましたく

『ほう、彼女がねえ……………』

『うん、いきなりだったぜ…………』

とまあ、話は聞いてみたが…………見たのだが…………

『それ、なんてクソゲ?』

『ギャルゲですらないの!?!』

『いやだつて…………有り得ないじゃん。おまえの噂は近隣の皆さんに多大なご迷惑を被ってるわけで、そんな噂の張本人にいきなり好きですっていうかあ?』

ぶっちゃけ新手の犯罪かと思った。

『うつ………まあ、そうだけど。』

『それに外見もこんな奴のドコが好きになったのやら………
……』

『………シクシク』

また泣き出しやがった………うぜえ………

『けど、少なくともその話がホントなら他の連中には見えてないお前の魅力を見抜いたのかもしれない？』

『へ？』

『だってそだろ？顔だめ、性格だめな奴を好きになる要素があるとしたら、それ以外ないだろ。未だにでていない……もしくは、出ても気づいていない魅力がお前にはあるんだろうよ。それに気づいて惚れちまったんじゃないか？』

『え？でも、そんなのあるか？俺なんかにさ？』

『さあな。だが、俺はおまえの事が気に入ってる。おまえには俺が気に入るような要素や魅力が絶対にある。そして、俺が気に入った

魅力と彼女が気に入った魅力が同じかはわからないが、人に気にとめられる程の魅力があるのは確かなことだと俺は思うぞ?」

『—————ッ』

あん?なんだよ、コイツ。また泣き出しそうな面してやがる。

『ったく。しかたねえな……。ほら、こつちこい。考えるぞ?』

『へ?な、なにを?』

『デートコース考えんだよ。おまえが俺の所にきていきなり用件言うのは大体は悩みがあるときだろうが。』

まったく、世話の焼ける奴だ・・・

『お・・・・・・・・・・・・・・・・おうッ!!!!!!!!!!』

結局、徹夜してデートコースやらなんやらを決めることになった。つた・・・・・・・・・・・・・・・・

まあ、今度ギャルゲかってもらっようにしたからいいんだがな・・・
・・・・・・・・

しかし・・・、あいつの彼女の名前・・・難しいな。
てんの ゆうしん』だってよ。・・・
あれ？男じゃね？

俺とあいつの日常編（後書き）

とまあ、終わりです。ぶっちゃけ原作ブレイクしてそうです。細かい設定などは後日張りますのど、次回は速くて今日中遅ければ来週になりますのであしからず。

俺とあいつの日常編〜愛しのキンチョールと朝の登校〜（前書き）

と言うわけで、更新です。今書いてて思ったんですが、まったく話がすすまない。いや、まあ。作者の技術がないからしかたないですけど・・・

けど、あと三話ぐらいでリアス嬢が出てくるところまでしたいです。

追伸、お気に入り登録、そしてポイント、ユニーク、PVをつけてくださったみなさん！！ありがとうございますッ！！まだまだ駄文ですが、これからがんばりたいです！！

それではどうぞ！！

そんな事を思いながら携帯で時刻を確認しら、時刻はなんと。

『8時21分か・・・・・・・・・・』

うん、素晴らしいほど早起きだ、ここまで早起きなら普通に一時間目の授業は間違いなく遅刻できる。だが、俺クラスの遅刻魔になるとこの程度ではだめだ。最低でも三時間目くらいから学校に行き、四時間目から授業を受けよう。そのためには睡眠が必要だな、うんでは、寝るか。いやあゝ、春先だがまだ朝は寒いなあゝ。寒いのは嫌いだから布団から出たくないぜ・・・・・・・・・・

いつとくがちゃんと学校にはいくぞ？たぶん。もう一眠りしたらいくぞ？ホントだぞ？さっきもいったが、寒いのは嫌いなんだ。苦手なんだ。ついでに朝は嫌いなんだ、太陽がケンカ売ってきてるようを感じるんだ。だからもう少し暖かくなって太陽が沈んだら活動するようになるよ、うん。じゃ、おやすみ・・・・・・・・・・

『・・・・・・・・・・ってなんでまた寝ようとしてんだよッ！！いい加減起きろよッ！！遅刻するじゃないかッ！！』

なんか、うるさい。誰だ？誰がいるんだ？・・・・・・・・・・クソ、起きるのが辛い。

『・・・・・・・・・・なんだ、イツセーか。こんな朝早くから騒ぐなよ。近所迷惑だろ。それ以上騒いだら尻に爆竹積めるぞ。』

『嫌すぎるよッ！！てか、時間ヤバイじゃなかッ！！なんでこの目覚まし１１時設定なのさ！？』

うるさいやつだ。コイツ、なんで私服でうちにいるんだ？それに、いま起きたみたいな顔してやがる。

『おい、イツセー。なんでここにいる？学校はどうした？さぼりか？まっただらしない奴め。』

『おまえにだけは言われたくないよッ！！昨日、ここで２人でデートコースやらなんやら考えてたじやなかッ！！忘れたのかよッ！？しかも、どこであんな知識覚えたんだよッ！？経験かッ！？やつぱ経験ッ！？この非童貞やろ・・・アパヒレハッ！？』

とりあえず殴った。うん、なんかウザイから殴った。しかし、昨日？ああ・・・あの話か。

『お前がキンチョールとデートする計画の話か！』

『違うよッ！！なんでキンチョールとデートするんだよッ！！怖いよッ！！怖すぎるよッ！！てか、進は俺をどんな奴にしたいのさッ！？』

『ゴミ箱』

『意味が分からないよおおー！！？？』

『うん。俺もわからん。』

『いった本人も理解不能ッ！？』

『るっせえーな・・・鼻にキンチョールぶっさすぞッ！？』

『逆ギレ！？え？悪いの俺の方なの！？』

『俺、キンチョールの事を愛する奴はちょっと・・・・・・・・・・てか、かなり嫌だ。』

『俺もいやだよッ！！』

『そ、そんな！私の事は遊びだったの！？』（進裏声）

『え？だ、誰ッ！？』

「ここからイツセーがマジでキレ始めた」

「とりあえず、俺は家に帰って着替えたりしてくるからその間に出来ることをちゃんとしとけよ？」

ようやく落ち着いたかと思ったらいきなり帰りだそうとしやがった。

「まあ、待てよイツ・・・」またないッ！！」・・・」

そう言っ出て行きやがった。全く、人の話は最後まで聞くってお母様に習わなかったのかよ・・・

しかし、さっきのやりとりで眠気も吹っ飛んじまったからどうしようかな。やることはあるが、それやるとまたとやかく言われそうだな。

「はあ・・・仕方ないなあ・・・」

そんな事をばやきながら、制服のハンガーに手をのばすことにした。

その後、一時間ぐらいたったあと俺の住んでるマンションの前でイ

ツセーを待ち、2人して登校するようになった。普段ならこんな朝早くから出たくなかったが今日は1人うるさいのがいるため、しかたなく、しかたなく！！一緒に登校している。そんな中、イツセーが・・・・・・・・・・

『女の子が全くないな・・・』

なんていつてきやがった。そら、そだろ。こんな時間帯じゃあ、いたとしても精々オバチャンくらいだよ。てか、女に会いたくないからこの時間帯で登校してるんだからな。

『そりゃあ、俺が女の子と会いたくないからな。この時間帯ならまず会わない。』

『でたよ・・・進の女の子嫌い・・・・・・・・どうしてそんなに嫌いなさ？エロビデとかは普通に見るのにさ。』

『バツカ。あれは二次元だから良いんだよ。平面なら緊張やらなんやらなくてすむしな。』

ホント、あれは恐ろしい存在だよ・・・女って・・・・・・・・・・とくにお母様が一番恐ろしい・・・・・・・・・・あの親父を一瞬で土下座させる人なんてあの人にはできないよ・・・・・・・・・・

『てか、彼女がいるならお前はもうビデオいらないよな。』

『えッ！？』

『だってそだろ？もうビデオに用はないじゃねえか。だったら頼んでた新作、貸さなくていいよな。いやあ、中々スゴくてな、貸したくなかったんだよなあ……いやあ、良かった、良かった』

『ちょ、ちょっと待てよッ！！それとこれとは話は別だッ！！なあ！！おい！！頼むよ、進ウウウウーッ！！』

こんな叫びも無視していくのだったさ。

俺とあいつの日常編ゝ愛しのキンチョールと朝の登校ゝ（後書き）

とまあ、キンチョールでした（笑）

いかがでしょうか？笑えましたか？寒い？文才がない？ええ・・・
その通りだと・・・

けど諦めずにあがいて見せます！！

次回の更新・・・、今日暇だから今日中にできる？かな？

俺とあいつの日常編〜ペーコンレタス疑惑と彼女との出会い〜（前書き）

はい。アンサラーです。なんとまあ、書いてたらこんな時間だよ。
今回は今までで一番長いかな？それでもページ数はたったの五枚・
・
・
・

携帯じゃ限界があるな・
・
・

それではどうぞ。

俺とあいつの日常編くベーコンレタス疑惑と彼女との出会い

とまあ、こんなアホな会話をしながら学校にむかったが・・・いかせん、時間帯がまだ二時間目が始まったぐらいだったため、途中でコンビニにより物色。お菓子やら昼飯を買うことにした。

しかし、コンビニの商品はスゴいな。なんと無印良。の商品があるじゃねえか。いやぁ好きなんだよなあ、このど飴シリーズ。最近ハレモンとジンジャーにハマってるんだよなあ！。

あ、ちなみにイツセーもいるんだが・・・・・・・・・・

『ムフー・・・ムフー・・・』

と鼻息荒くして、エロ本コーナーに行こうとしてるのを俺ががっちり左手で捕まえてる。私服ならまだしも制服でいくなよ！！

『離せ、離せ進ッ！！俺は、俺はッ！！あそこに行かないと行けないんだッ！！』

そう言っつて、振りほどこう必死になるイツセー。

『いや、行かさないから。むしろ逝かしてやろうか？』

ここでいかせたら俺も変な目で見られかねない。それは避けなくてはッ！！そのためなら最悪コイツを殺らなくてはいけけない。

『なんか、漢字ちがうくない？』

『いや、合ってる。ここで行かせて俺が恥ずかしい思いをしなくてすむくらな。』

『——なるほどな・・・そういうことが・・・
、そうまでしてッ！！自分の世間対が大切かぁッ！！』

『大切だぁッ！！』

『そうか・・・ならもう話す事はないよ・・・、無駄な時間を使わせたな、進』

そう言ってイツセーは拳を握り、俺に向かって構えてきやがった。
典型的なボクシングスタイルだ。

『かまわん、時間が無いのはお互い様だ。』

奴は俺を倒し目的（エロ本を読み）、俺は奴の目的（エロ本を読む）を破壊する。かけるものは周囲の商品、だがかまわない。なぜなら

『俺たちの戦いはッ！！外敵との戦いではなくッ！！世間対との戦いなのだーーーーッ！！』
そうして俺たちは激突した

『痛え・・・・・・・・』

完勝した。俺は世間対とプライドを守り抜いた。そのせいでコンビ
二から追い出されたが。

『そろそろ行くか。時間も丁度良いだろ。』

『ああ。わかったぜ。』

んじゃ、行きますかね。

とまあ、二時間目と三時間目の間に学校に入ってきた。クラスに
入ったが、誰とも会話せずに自分の席についた。いやあ、窓際の席
はいいなあ。ギャルゲの主人公みたいだぜ。

『よう。珍しいな、こんな時間来るなんてな。』

『そうだな、しかもイッサーと来るなんてさらに珍しいな。』

そついつて、やたら笑顔の丸坊主とメガネをかけたキザなやつがき

た。2人ともイツセーの友達……てか、同種になる。まあ、俺もなんだがな。ええっと、名前が………

『HAGE田中とメガネ。今日もウザイな。とりあえず人をやめてくれないか？人じゃなきゃ殺しても罪にならん。』

『相変わらず名前覚えなない奴だな……』

『いや、コイツの頭のスペックを考えると当……グボラッ!？』

とりあえず、メガネがウザイから殴った。俺だって好きで頭が悪いんじゃないやいッ!!

『?なんで元浜倒れてんの?』

と、そうこうしてたらイツセーも来やがった。………つたく、一角に男子四人も集まりやがって………うぜえ………

『さあな。大方、自分という存在の無意味さと邪魔さに気づいたんだろ?』

『お前のせいだよッ!-!』

なんか、キレてきやがった。ったく。コレだから本田は嫌いなんだ。

『まあ、落ち着けよ同士。それで本道、なんでイツセーときたんだ？いつもなら別々にくるのに、それにおまえならもう一時間くらいサボるのにさ？』

HAGE 鈴木が話しかけてきた。窓際だから太陽の光が反射してうぜえ。

しかし、どう答えたらいいのか・・・、なるべく面白いおかしく答えたいな。・・・・・・・・よし。

『いやな、昨日のよるいきなりうちのマンションに来てさ。色々なことしてたら朝になってた。』

瞬間。世界が静寂に包まれた

静寂につつまれた世界でイツセーがいち早く反応してきて、

『ちょっと待てッ！？なんか色々端折りすぎだろッ！！もっと色々説明しろよッ！！例えば『ああ、イツセーが泣きついてきたな。』そっただけッ！？確かに泣きついたけどッ！？最悪な方に補正をかけるなよッ！！』

イツセーがなんか必死だ。そらまあ、そうか。自分にベーコンにレタスなスキルがつくかもしれないからな。いやあ、愉快愉快。俺？俺はその方がいい。何でかって？その方が女と喋る機会が減るからな。

と、女たちのヒソヒソ話が耳に入ってきた。こうみえても俺は身体能力が異常でな。俺の一族自体がもとも異常な身体能力をして産まれてくるのだが、そこからさらに修行で異常に改造していく。つか、させられた。おもに親父に。

中でも親父が言うには、俺は歴代の本道一族でも1、2を争うほど身体能力が異常らしい。ふざけんなッ！！誰のせいでこうなったと思っただよッ！！謝れよッ！！俺の幼い頃の時間返せよッ！！

ちなみに、普段は抑えてはいるのだが、元々が高すぎるせいでそれでも同世代の奴からみたら異常だ。抑えに抑えても百メートルを十秒台で出せるくらいの身体能力だ。

——— つと。話がそれたな。それではその異常な聴力で聞いてみるでしょう。

『やっぱり、本道クンって・・・』

『うん。前々からそんな感じはしてたけど。』

『けど、相手はッ！？やっぱり兵藤！？兵藤×本道クンなの！？』

『イヤッ！！そんなカップリングいやよ！！やっぱり木場クン×本道クンが一番よッ！！美男子と中堅ッ！！これがベストよッ！！』

『けど、まさかリアルなBLがこんな近くにいたなんて……
・・、神様ありがとうッ!!』

なんて聞こえてきた。いやぁーしかし、反応がおもしろいねえ。

そうこうしてたらメガネが恐る恐る聞いてきやがった。

『……おい、イッセー……それは、本当か?』

『いやいや、かなり省かれた説明ですからねッ!? むしろ要点がな
に一つ伝わってませんからねッ!? おい、進ッ! お前からもなんか
いえッ!』

と、まあ。んな感じでふってきましたたよお話を。頼むから真実を話
してくれて目してましよ。はぁ……仕方ないなあ……
・

『何だよ、イッセー……。俺とお前の熱い夜はどこに消えちまっ
たんだよ……。2人で色々して疲れたから寝たんじゃ
ないか。』

そんな顔された、どん底に落としたくなるじゃないか。

『なんでそつち方面に突き落とすんですかコノヤロウウウウウウ
ーーーーッ!!!!!!!!!!』

イツセーの絶叫と女共の黄色い歓声が聞こえる。あ、2人ともドン
引きしてる。

『イ、イツセー。おまえ・・・』

『ま、まじかよ・・・・・・・・・・』

うん、2人ともいい反応するねえ！。

『ま、まてッ！！待ってくれッ！！確かに俺はコイツのウチに行っ
て泣いたり泊まったりなんかしたが、ベーコンでレタスな事なんて
してねえッ！！』

う~~~~ん。たのしいが、これ以上するのはマズいかな？

『ああ、確かにコイツはウチに来たが、相談事があったから来たん
だ。んで、その問題を解決するために考えてたら夜遅くなっちまっ
たからウチに泊まったんだよ。』

『え？ほ、ホントだよな？嘘じゃないよな？信じていいよな？』

メガネが恐る恐る聞いてきやがった。隣にいるHAGE・・・めんどいな。ハゲもどうなんだ？って顔してやがる。

『ホントだつて。さすがこれ以上やると冗談ですまなくなるからな。いい加減にネタばらしたよ。』

そついうとクラスからは脱力感と失望感が三人からは安堵のため息が出てきた。

『いやあ、焦った。まさか我らが同士、イッセーがベーコンでレタスなのかと思つたぜ。』

『そうそう。危つくメガネが割れるとこだつたぜ。』

『いや、俺悪くないから。悪いのは・・・『キンチョール』進様ではなく、すべて私悪いのですハイハイイイーーーーッ!!』

すごい早さで土下座したぞ？コイツ・・・・・・・・・・

そんな土下座しているイッセーにメガネが思い出したように聞きやがった。

『そうだ。それでその相談って一体何なんだよ？俺や松田には言えないようなことなのか？』

『水くさいじゃないか同士。俺たちの中にエロは合っても遠慮はないだろ？』

ハゲ、誰がうまいこといっていった。あと、その中に俺は入っているのだろうか・・・

土下座していたイッセーがその言葉で思い出したように顔をあげた。

『そうだったッ！！3人とも今日、午後からあいてるか？見せたいものがあるんだ。』

『なんだよ、イッセー見せたいもの？新しいエロDでも買ったのか？よし、今日見に行こうじゃないか。なあ、元浜』

『ああ、そうしよう。まったく、イッセーも水くさい奴だな。そうと決まれば、学校においてあるビデオを持って行こうじゃないか。手伝ってくれ、松田。』

そんな感じに浮かれてる2人をよそに、俺はイッセー聞いた。

『なあ、イツセーもしかして件の人にあわせるのか?』

『ああ、2人には悪いが、俺はもう別次元の世界にすることを証明しなくてはいけない。そう俺はツ!!勝ち組だからなツ!!エロエロな事が出来るからなツ!!』

『ああ、そ。ノロケかよ・・・、まあ俺も行くかな。てか、眠いから寝るな?放課後になつたら起こしてくれ。』

了解という言葉を待たずに俺は眠ることにした。しかし、あいつの・・・彼女の・・・名前・・・なんだっけ?・・・
・・・まあ、いつか。

ところ変わって放課後時刻は四時半。地元でも大きめの公園に野郎4人はきていた。

『なんだよ、イツセー。こんな所に連れてきて。パンチラもブラチラもないじゃないか。』

といってメガネをキザっぽくあげる山田。

『まあ、まてよ。そろそろ・・・あ、きたッ!!』

イッセーが向いていた方向にスレンダーで整った顔をした美少女が歩いてきた。

『おまたせ、イッセーくん。』

キレイな声をした女だ。うん、確かに。カワイい。するとイッセーが自慢げに。

『紹介するぜ、お前ら。天野夕真ちゃん、俺の彼女だ。』

そういつた瞬間2人がさわぎたしていたが、俺にはまったく聞こえなかった。なぜなら――

のど元にナイフを突きつけられているような恐怖にみまわれていたからだ。あれは、マズイ。あれは、いけない。アレは、俺以上の異常な存在だ。――逃ゲ口

逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口
逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口
逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口
逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口逃ゲ口

逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□
逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□
逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□逃ゲ□

そうして俺は確信した。これは一種の詐欺じゃないのか？と。

『厄介な事に・・・なったな・・・』

誰にも聞こえないようにそんな事を呟いた。

俺とあいつの日常編〜ペーコンレタス疑惑と彼女との出会い〜（後書き）

と、まあこんな感じでした。

松田と元浜ってこんな感じかな？あんまりのってないからわからない……

次回の更新は……最悪来週になるかも知れませんか？いや、受験生でして？すみません。なるべく早くします。

この作品を呼んでくださったり、お気に入り登録してくださったり、ありがとございますッ！！

俺とあいつの日常編／作戦名と愉快な先生／（前書き）

一週間無理とか言っときながらの更新です。いやぁー、なんか考える時間が取れまして。

え？何でかって？学校が文化祭の準備期間中だからサボって考えてるんですよ。

リア充爆発しろオオオオーーーーッ！！

それでは、どうぞ。

俺とあいつの日常編／作戦名と愉快的先生

イツセーが彼女を紹介して数日後、その間にあったことといえば、いつものハゲとメガネがなんかより一層ウザくなった。具体的に言えば、やたら絡んでくる。イツセーじゃなくて俺に絡んでくる。

なんか、2人とも信じてた物に裏切られた、みたいな面してやがる。知るかよ。こちらら、んなどうでもいいことに神経割いてる暇はねえッ！！

あの日見た、天野 夕真 という存在に感じた感情・・・、今まで生きてきて感じたことのないモノだった。・・・いや、今まで感じたことはあったが、あれほどまで強く感じた事のない感情、恐怖だ。

文字通り、アレと過ごした時間、生きた心地がしなかった。人の形をした・・・それでいて、決して人では感じることでできない禍々しいオーラ。いつ殺されるかわからない恐怖を俺は感じた。断定できる。アレは人であって人でないものだ、とな。

しかしここで、問題がある。そう、アレはイツセーの彼女だという事実だ。下手に俺が言った所でアイツは絶対に聞かないだろう。仮に聞き入れても、アレは恐らく追ってくる。自身の目的を完遂させるためにな。だったらどうするか？俺がイツセーを護るしかない。

幸い、アレも派手な行動はできないでいる。当然だ。派手に行動出来たなら、間違いなくはじめにイッセーをどうにかしてるだろ。なにが行動を派手にできないのかは知らないが、こちらとしては好都合だ。精々利用しよう。それに、それでもなければイッセーと付き合うなんていう回りくどいことはしない。

………すまん、イッセー。だが事実なんだ。受け入れてくれ。

まあ、取り合えずだ。アレの対処としては

『1、倒す』

『2、逃げる』

『3、誰かに倒してもらう』ぐらいだろう。

1はどうかわからん。実力はあるが、本気の殺し合いを経験したことがない俺じゃまず無理だろ。

2は一回ならまだなんとかなるが、二回目からは難しい。結局、3になるのだが、コレが一番の解決法だ。なぜかって？親父に言えばなんとかなるだろ。いやいや、マジだって。アレに勝てるのはマジでお母様しかいないって。

では、結論を決めよう。今の俺じゃあ、アレに勝てないが親父なら勝てる。だが、イッセーがアレの異常性に気づくまでは下手に手を出せない。アレも派手に行動する事はできない。よって恐らく、人気がない所で行動をおこす！がアレにとってのベストな結果だろう。

それに、あのイッサーだ。アレに「人気のないところにいきたい」なんていわれてみる。間違いなく欲情してついてくぞ。股間の反応速度は世界最高クラスだからな………

それを阻むためには俺が、奴を倒すか、逃げて親父に倒してもらうかの二択だ。どっちにしても倒さないと意味がない。倒したら倒したで面倒だが。先のことより今を優先しないといけない。

それにどちらを選択するのにもイッサーが納得するような理由が必要になる。

だから今回は、作戦名 失恋キューピット 恋に破れて命を救う、リア充の不幸はホアグロソテー味の納豆 を行う。

え？内容？アレが本性だした所を俺が乱入して逃げる。んで親父に頼んで倒してもらう。なあ？簡単だろ？んあ？だったら前半のヤツは何だったんだって？別に意味はない。ただの暇つぶしだ。飛ばしても問題ないはずだ。

「う」

すべて作戦名 失恋キューピット 恋に破れて命を救う リア充の不幸はホアグロソテー味の納豆 で全て伝わるだろ？

「道！」

何ッ！？わからないだとッ！？それに名前がダサいだとッ！？お前の感性は歪みまくってるッ！！某協会の某麻婆神父と同じレベルで歪んでるよッ！！

「―――本道！」

まったく、おまえたちには失望したよ……………顔を削って出直してきな。

そりゃあもうガリガリと、ハンドミキサーでやるといいぞ」

しかし、さっきから誰か俺の名前を呼んでないような、呼んでないような……………うん、呼んでないな。よし、寝よう。

「―――いい加減起きろッ！！本道進ッ！！！！！！」

バシンッ！！という擬音語が似合うような音を立てる、分厚い本のような物が頭に当たる。

「痛……………ッ！！！？？」

ガタンと机に体をぶつけながら、顔をあげた。そこには、現代文の担当教師が立っていた。右手には教科書がある。ああ、さっきの本

はそれか………って危なッ！？頭がち割れるわッ！！コイツ、生徒に遠慮とかないのか。

「痛いじゃないですかッ！！俺、なんか悪いことしましたかッ！？ただいつも通りにしてましたでしょッ！？」

「そのいつも通りが悪いんだッ！！なんだその授業態度はッ！！学校に11時半にきて、寝ては昼食を食べて、また寝ては家に帰るなどッ！！おまえはどれだけふざけてるんだッ！！」

「ムッ？失敬な。俺はマジですッ！！」

「どのへんがだッ！！どの辺がマジだと言えるんだッ！！どこにも言えるような要素は無いぞッ！！」

「学校に来ることがマジですッ！！」

「おまえのマジのレベルが低すぎるわああッ！！そんなのはデフォルトだァッ！！学生の基本装備なんだよッ！！」

「俺をただの学生と同じ括りにしておく事態が間違いですよ。」

「なんでそこで誇らしげなんだ貴様ッ！！お前はいたい学校になににきているッ！！一三字以上、十五文字以内で答えようッ！！」

なんだよ、いきなり問題出しやがって・・・だが、舐めるなよ？

「高校卒業という経歴を得るため」

「きっかり14文字じゃねえかああああああッ！！」

そついて先生がでてしまった・・・・・・・・・・

まったく、愉快的先生だ。しかし、クラスからの視線が痛いぜ。よし・・・・・・・・・・こういう時はッ！！

「
グウ」

寝るに限る。なんかクラスの連中がずり落ちるような音が聞こえたが、きにしないぜ。さて、寝よう。

しかし、思いだしたんだが。イツセーの彼女名前・・・何だったっけ？ 解らないから、ずっとアレって言うてたけど。・・・
まあいつか。

俺とあいつの日常編／作戦名と愉快的先生／（後書き）

とまあ、先生でした。たぶん、二度とでない。

しかし、この小説・・・、まったく話が進まない。一巻で僅か10ページぐらいで死ぬイッセーくんがまだ生きてる。ビックリだね。

それでも次回は遂に死にます。死なせます。ちなみに進は・・・。
・・・になつて・・・。
・・・になります。さあ、答えは何でしょう？後書きの最後に書きます。

そしてついに我らがスイッチ姫ッ！！リアス嬢登場ッ！！いやあ、やつとバトれる。テンションが上がってきたああッ！！ハイスクールバトルアクションと書いておいて、全くバトルのないただの寒いギャグのオンパレード・・・、作者の明日はどっちだッ！？

あと、ヒロインで思い出したんですが、この小説も恋愛をつけるべきですか？作者としてはやりたいですが、原作の風味を壊すのは避けたいので誰か1人と・・・。みたいな感じにしたいんですが・・・。
・・・どうしましょ？感想の所に感想と一緒に書いてくれると嬉しいです。あ、リアス嬢とアーシアはダメですよ？あの2人はイッセーくんになくってはならない存在ですから♪

次回の更新は明日に、早ければ午前四時頃、遅ければ明日の今頃にします。それでは、また。

問題の答え「進はベーコンレタスになってキンチョールになる」

俺とあいつの日常編〜本気と本気〜（前書き）

更新遅れてすみません。いやあ、今日も俺はなにもしないつもりでいたらなんと仕事回ってくる回ってくる（笑）疲れましたよ。

そして、小説何ですが。キリが悪い。リアスでてない。前と云ってることちがくてすみません。書いてたらどんどん付け足していったこんな感じになってしまった。けど次はです。本当にですからあッ！！

それではどうぞ

俺とあいつの日常編〜本気と本気〜

そんなこんなでやってきました、デートの日。イツセーが朝出てくるまで、奴の家の前に張り込む。時刻は午前6時頃。

常人ではありえない視力を持って遠距離から監視する。直線距離からして、大体一キロつてどこか。俺からしたらコレくらい普通の距離、細部まで見えてるのが普通なんだが、さすがにこれ以上になると護衛ができなくなるため無理。だが近いとアイツの家の近くに身を潜めるところがないため監視する事ができない。

本当に閑静な住宅街に普通にたつてる普通の家。それが兵藤一誠・
・正しくはイツセーの親父さんの家になるのか。そう、普通。アイツは俺が知る限り普通の人生を歩んでいるはずだ。

確かに万年発情期でその発情期間がとんでもなく永い（↑字は合ってるぞ）奴だが、それを除けばなにもなくな・・いやいやいや、至って普通のへんた・・・・・いやいやいや、普通の・・・・・普通・・・か？普通、だよな？うん、普通、だと信じ、よう・・・・・とにかくツ！！俺みたいに奇想天外な人生を歩んでないのは確かだ。

そう、どこにでもいるような？いないよな？いたら怖いが・・・・・
・・・。まあ、あんな異常なモノに狙われるような人生は送ってないだろ。

しかし、アイツは今狙われてる。そう、その異常な存在に。理由はわからん。知る気にもならん。知ろうとも思わん。だが、もしアレがイツセーを殺したなら、俺は間違いなくアレを殺す。どんな手を使っても、俺の手で確実に殺す。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・、イツセーを殺さないために俺がいるのに、なんでイツセーが死んだ後の事を考えているのやら。丸で死亡フラグだな。

さて、どうこう考えている内にイツセーが家から出てきた。どうやらデートのようだ。時刻は9時。待ち合わせは10時つてとこだな。俺もそろそろ降りて少しづつ距離をつめないとな。

ああ？今どこにいるんだつて？電信柱の一番上だよ。したからやたらと携帯のシャッター音が、聞こえる。あいつらのせいで隠密行動が出来ねえじゃねえか・・・・・・・・・・

アイツはアホか。新生のバカか。仮性。茎かッ！？なんで待ち合わせの三時間も前から現地に行くんだッ！？楽しいのかッ！？デートで相手待つのがそれほどアイツにとっては楽しいことなのかッ！？だったら帰れッ！！アレがきて、「いや、俺も今きたところだから」なんてほざきやがったぞアイツッ！？アホかッ！！お前にとつての三時間はいったいどれだけあつと言う間なんだッ！！待ってる

途中、メガネっ娘を百まで数えてたろッ！？なんか変な紙貰ってたろッ！？アイツの頭の中・・・今、キンチョールでいっぱいなのだろうか・・・本気で心配になってきたよ。命の危機と精神の危機、両方来てるんだなアイツ。

とそんな事を心配していたら、手を繋いで歩き出した。あ、イツセーが泣いてやがる。アレ、間違いなく脱水症状で死ぬくらい涙でてるんだが、ツッコんだら負けだな。

とまあ、デートだった。そらあもうデートだった。全国のリア充の基本的なデートだった。・・・殺していいか？なんで、デートを付け回さなくちゃいけないのかマジで考えたよ。アイツ、あのまま死んでも本望じゃないかなと本気で思う。あまりのイライラのせいでファミレスの店員をマジ泣きさせちゃった。あらぬクレームたてまっくって、放送禁止用語オンパレードにして。いや、最後の方、客も俺の敵に回って追い出そうとしてた。そんな事を同じファミレスでやっていても俺の存在をあいっ等はずかしくない。少し、傷ついた・・・

そんなこんなで要約終わりのようで、人気のない町外れの公園にきてやがる。ああ、行動を起こす気だなと一瞬でわかった。しかし、ホントに長かった。わかるか？リア充をひたすら観察する俺の気持ち。たぶん、わからんだろうな。わかったら友達になろう。スカ。

プのID教えてやるよ。

「さて……………」

スイッチを切り替える。いつでも駆け出し、一瞬でアレの間に割って入れるように。いつでも戦えるように。いつでも逃げられるように。集中力を高める。子供の頃からの癖だ。集中力を高めるとき、決まって服の着崩れを直す。体に密着した方が戦いやすい。そして、集中力がある程度高めたあと、自身の身体能力を上げていくのも行う。今回は未知の敵。倒さなくていい。一撃を加えて、即刻離脱する。それだけだ。

そうして、高めた身体能力がアイツらの会話を耳にした。

「ねえ、イツセーくん」

「なんだい、夕真ちゃん」

「私たちの記念すべき初デートって事で、一つ私のお願いを聞いてくれる？」

イツセーが固まる。大方、その言葉で欲情したんだろ。単純な奴だ。

「な、何かな、お、お願いって」

「死んでくれないかな」

（やはり、アレはイッセーの死がお望みのようだ。）
そんなことを思いながら俺は体をクラウチングスタートの体制を
するように動かし、構えた。

「・・・え？それって・・・あれ、ゴメン、もう一度言
ってくれない？なんか、俺の耳変だわ」

（聞き間違いじゃねえよ、イッセー。ソレは・・・）

「死んでくれないかな」

そういつて、アレの背から黒い翼が生えた。その瞬間、俺は自身の
足に力を込め、地面を抉るように蹴りつけた——ッ！！

「お前の死がお望みだ」

瞬間、体が銃弾のように撃ち出され、異常なスピードで距離を詰め
るッ！！狙うのは首筋ッ！！後ろから一撃で跳ね上げる——ッ！！

俺が放った手刀が空気を切り裂くような音をあげ標的の首に襲いかかる。そして――

『ガギリ』と。普通の人間の体からは決してでない。鉄鋼と鉄鋼がぶつけ合ったような音が出た。そして、放った手刀の威力を受けて、黒き翼をもつ異常者は数メートル先にある電柱に一直線でぶつかっていった。

(痛ッ・・・・・・・・・・)

手が痛い。鋼鉄のような体だ。下手したら右手が砕けていた。アレはまだ地面に伏している。今の内に逃げないとマズい。アレは勝てる気がしない。

と、そんな一瞬の出来事の結果を目の当たりにしたイツセーが声をあげた。

「え？え？アレ？夕真ちゃん？どこに行ったんだ？確かに今までここにいたのに？あれ？なんで進がこんな、ところに？」

パニックってるな。そろそか、彼女だと思ってた奴にいきなり羽とか生えたら誰でもそうなるわな。しかし、今それを説明する余裕がない。無理やり掴んででもつれて逃げる。

「説明は後だ。とりあえず逃げ——ッ！！！！！！？？？？」

瞬間、とてつもない殺気を背に感じた。

「ウソ……だろ？……」

ありえない、俺が持てる全力を載せた手刀を食らって、こんなに早く立ち上がるなんてッ！！

「いえ。危なかったですよ？あなたが本当に全力なら、今頃私の首は体とお別れしていたわ」

俺の困惑を察したかのように彼女が答える。その答えに疑問がでた。全力なら？……ということだ？俺は確かに全力で手刀を——

「全力の意味が違うわ。あなたが力を全力にするじゃなくて、殺す覚悟が全力じゃなかったのよ。殺気がまるで感じられない攻撃だったわよ？殺す気がない攻撃で、私たち堕天使を殺そうなんて可笑しな話ね。」

そういつて、冷笑を浮かべる。そうかい、あんたは堕天使なのかい。俺としては死神しか見えないがな。夢なら覚めて欲しいぜ。俺はまだ死にたくない……が、それは無理そうだな。

「おい、イツセー。俺はこの娘に用があるから、席をはずしてくれなか？込み入った話になりそうだな。親父とあう予定を入れているんだが。直接、予定が変わったと言ってきたくないか？」

どうやらここで死ぬらしい。だが、コイツは護らないと。俺の友達を護らないといけない。

「な、なに、言ってただよ、進？なんで、そんな事」

冗談だろ？つて顔をしながら声を震わして問いかけてきた。俺も冗談であつてほしかったんだがな。

「なんだよ。難しいこと頼んでないだろ？親父に伝言頼んでるだけだろ？それぐらいしてくれよ。」

「な、なんでそんな事しないといけないんだよッ！！わっかんねえよッ！！なんで夕真ちゃんに翼が生えてるんだよッ！！そんでなんで進が死にそうな顔してるんだよッ！！どうなってんだよッ！！誰か教えてくれよッ！！」

俺も教えてほしいが、どうやらそれは無理そうだ。目の前の死神が鎌を研ぎ終えたらしい。

「ふうくん・・・、君そんなにイッセーくんの事が大切なの？」

「ああ、大切だね。たった1人の友達だからな。それに、友達は助けろって体に刻み込まれてるからな。引くことはできないぜ？」

「何というか・・・気持ち悪いわね。見てて吐き気がするからとりあえず殺してあげるわ」そりゃあどうも。

「イッセー、俺が合図を出したらいけよ。親父への伝言頼んだぜ」

「ちょっとま——」

イッセーの言葉を遮るように死神が身をかがめ足に力を入れ、踏み込んできた。

——来るッ！！

「行けッ！！イッセーッ！！」

しかし、アレは俺に向かわずに——

「ッー!?しまっ——」

「けど、アナタに興味がわいたわ。アナタの本気の姿、見てみたいの。だから……………」

死神は俺を通り過ぎて、俺の親友の腹をその細い腕（鎌）で突き刺した（切り裂いた）

俺とあいつの日常編〜本気と本気〜（後書き）

うん。ようやく戦闘しはじめました。長かった。いやあ、長かった。しかし、区切りが悪い。けどこれから書く気にはもう今はなれない。書きたいが書きたくない。そんな感じ

次の更新は・・・明日？明後日ぐらいにやります。

中途半端ですみません。

俺とあいつの日常編〜鮮血とストロベリー〜（前書き）

遅れてすみませんッ！！学校が本当に忙しいですッ！！いやもうほんとッ！！

とまあ、更新です。いやあ今回初めての本格バトルです。やっとアクションでた。永かったなあ……。けど、厨二病全開だから書いてマジ恥ずかしくなりましたよ。

それでもいいならどうぞッ！！

俺とあいつの日常編／鮮血とストロベリー／

「あ……れ………?」

丸で、障子に穴を開けるように死神は俺の親友の腹を貫いた。

「ゆ、夕真……ちゃん………?」

イッセーが問いかける。少し前まで彼女だと思っていた存在に「なんで?」と。言葉ではなく、視線で問いかけていた。

「楽しかったわ。あなたと過ごしたわずかな日々。初々しい子供のままごとに付き合えた感じだったわ」

そういて、冷笑を浮かべながら容赦なく腕を引き抜いた。同時に赤い液体が大きな蛇口を捻って出てきた水のように溢れ出した。そして、ゆっくりと。少なくとも俺からみたら非常にゆっくりとした動きで赤い液体の水たまりにイッセーが前のめりで崩れていった。

瞬間、俺は悟った。イッセー 親友 が死んだと。もしくはもう死ぬと。溢れ出す鮮血がそれを証明している。もう、助からないと。

「さあ、あなたの大事な大事なお友達を殺してあげたわよ?アナタは次に……どうするのかしら?」

クスクスと、丸で新しいオモチャで遊ぶように俺に視線を向ける。
その目にはもうイッセーは移ってはいない。

「イッセー……………」

親友が死んだ。だというの、なぜかとても冷静だった。普通こういう時どうしたらいいのだろうか、わからない。自分が今どんな顔をしているのか、自分が今、どうしようとしているのかすらわからない、わからない、ワカラナイ。

頭ノ中デ、問

イカケル。

イッセーガ倒レテイル

もう助からない。

ナゼダ？

血がいつぱいにいるから。

ドウナルンダ？

死んでしまっ。

死ヌトハナンダ？

その人間が動かなくなり、目を覚まさなくなる。

ドウシテコウナッタ？

俺が護れなかったから。

何故マモレナカッタ？

俺が弱かったから。

ドウシテヨワイノダ？

俺が甘かったから。

何故甘カッタノダ？

アレの力を見誤って、俺が油断したから。

イヤ、違ウ。ソレジャナイ

え？

原因ハソレジャナイ。オマエノ人トシテノ甘サガ、コノ事態ヲ引き起コシタ。人ノヨウナ形ヲシタバケモノガ、人ノ心ヲモトウトスルカラダ。

原

因ハ、オマエダ。オマエガ親友ヲ殺シタ。

—— ツー！！そんなわけッ！！そんなわけあるかッ！！けっ

して違うッ！！アレがッ！！アレが殺したッ！！アレがイツセーを殺したんだッ！！

ソレハ結果ダ。タマタマアレガイッセーヲ殺シタニ過ギナイ。ソノキツカケヲ作ッタノハオマエダ。ソレニオマエハ氣ヅイテイタダロ？アレノ異常性ニ

ああ・・・気づいていた。だが、それは関係な—— ナイワケナイダロ？アレハオマエ以上ノ異常者ダ。人ジャアナイ。一番ハジメニ解ッテイタコトダ。オマエハソノ時点デ選択ヲ間違エテイル。——
異常者ト異常者ガ戦ッたら異常性が強い方が勝ツノハ当然ダロ？

——ッ！！！！؟؟？

ソウ。ソノ時点デ選択ヲ間違エテイル。アレト戦コトヲ選ンダ時点デ、イツセーガ死ヌノハ決定事項ダツタンダヨ。ナノニオマエハアレト戦ッタ。他ニ方法ガアル中、ソレヲ選択シタンダ。オマエノ甘サガイッセーヲ死ナセタ

・
そうか・・・そうだったのか。俺が、俺がイツセーを……………

アア、全部オマエノセイダ、本道進。オマエガ全ノ原因ヲ作ッタ。

ソシテ、オマエハ復讐シナクテハイケナイ

なに？

復讐ダ。イッセーヲ殺シタ自分ニ。イッセーヲ殺シタアイツニ。
復讐シナイトイケナイ。ソレガ、オマエガデキル事ダ

だが、イッセーは復讐なんて・・・

望マナイダロウ。ダガ、オマエハ納得デキルノカ？自分自身トア
ノ存在ニ、ナンノ償イモサセズイル事ヲ。納得デキルノカ？

できない。

ウン？

できないッ！！俺は、俺はッ！！アレを許すことができないッ！！
許せないッ！！俺という存在も許せないッ！！アレが生きているの
もッ！！俺が生きているのもッ！！俺は許せないッ！！

ダッタラ、ヤルコトハ決マッテイルダロ？

そんな期待に胸を踊らした子供のような声が耳に入ってきた。どうやら死神はご丁寧に残っているようだ。

「ああ・・・待たせたようだな。」自分が殺される事を、アレは待っていたようだ。

瞬間、自分の中にあるどす黒く醜い感情をすべて奴にぶつけた。そして――

「!!!!!!!!!!!!!!」

世界が震えた。

自分の中で初めて生まれた感情。この世で一番人間がもってはいけないものを、俺は今本当の意味で初めて手にした。

（ああ、コレがなにかを殺したいとする感情か）

黒い。本当にどす黒い何かが、噴水のように溢れ出てくる。コレが憎む事か。コレが、俺に足りなかったものか。

「……へえ、ここまで凄いだ。アハハ。この殺氣、普通の人間だったら間違ひなく失神してるよ。」

「はッ！！」

拳を放つ。この一撃で容易く人の骨など碎ける威力だ。さらに速さも常人ではまず反応できない速さでもある。それを一息で四つ放つ。しかし、

「よつと。」

かわされる。まるで蝶が舞うように軽やかにかわされていく。

「ふッ！！」

ならばといわんばかりに、蹴りを放つ。狙いは太もも。ノーモーションからの蹴りだが、足にあたれば動きを止められるだけの威力は十分にある。

「ほつと」

だが、またかわされる。俺が放つ攻撃を軽々とよけていく。俺の攻撃がすべて解るように、だ。

「君の攻撃。確かに殺気が乗って威力も速さもましたけど、その殺

とを祈りながら、必死になってよけるだろうか？はたまた、運に任せて除けにはいるか？間違っても、当たるのを全く気にせず、そのまま突っ込んでいく、なんて異常な事はしないだろう。

しかし、残念ながら。この主人公は普通じゃなくて異常だ。異常な存在は異常な行動を起こしてしまうのが異常者たる由縁だ。

「グガアアアアアアアア——ッ！！！！！！！！」

そして、地面を抉るようにして蹴り、その降り注いできた光の槍に迷うことなく突っ込んでいった。

当たり前だ。初めっから、お前の事を殺すこと以外、なにも考えちゃいないッ！！

「——ッ！！！！」

瞬間、左肩と右太腿、わき腹に激痛が走る。どうやら貫かれたようだ。傷口がとてつもない熱を持って痛みを発している。

「なっ——！！？あの中を突っ込んでッ！？」

だが、そんな事はどうでもいい。失神しかねない痛みを感情だけで

無理やり閉じこめる。俺にとってお前を殺すことがッ！！何より大切なんだよッ！！

そんな覚悟をもって突っ込んでいった。どうやらもう三本は外れたらしい。そして、奇跡的に無傷であつた右拳に自身の今ある全てをのせる——ッ！！

本道一心流四季極が一つ「秋葉」

四季極の一つ「秋葉」。捻りを限界まで加えることで、拳に貫通力と突破力を加える技の一つ。

「オオオオオオオオオオ——ッ！！！！！！！！！！」

雄叫びをあげながら放った一撃は敵の腹部を完全に捉えた——ッ！！

「——がはっ！！??」

バキリという音をたてながら拳が砕けていったが、かまわず振り抜く。

「吹っ飛びやがれえええ——ッ！！」

その言葉通りに、墮天使は後方へ衝撃で飛んでいく。さきほどっ
んでいった時との違いはただ一つ。「秋葉」の効果により駒のよう
に回転しながら飛んでいつている点だけが違う。

墮天使は数十メートル先のコンクリートの壁まで飛んでいき、壁に
めり込むことで回転を止めることに成功した。

殴った後、電信柱を通り越してしまったため、そのまま地面に着地
する。瞬間、腹部と左肩、太腿に激痛が走る。そういえば、さつき
槍が刺さっていたがどうなったのだろうかと思い傷口を確認した。

「あのやろっ、人様の体にでかい風穴あけやがって——！！」

傷口には直径10センチ前後の風穴が発生していた。うん、風通り
が非常に……「冗談はやめよう。」

「——痛ッ！！」

右腕の痛みにはたまらず声にでる。どうやら筋肉が断裂したようだ。
まちがいに「秋葉」が原因だろう。

「あ、やべ。」

油断したせいでバランスが崩れ、前のめりに倒れる。ふと横を見ると、イツセーが倒れているのがわかる。

「イツセー……」

血まみれの親友をみる。俺が、俺のせいで死なせてしまった。殺してしまった親友をみて、たまらず呟く。

「………?」

よく見ると、先ほどと少し違う。なにか……持っている? ああ、あれはデートまちのときに貰っていた変な紙か。なんであんな大事そうに。なにか、もっていたら願いがかなうのかなあ?

そんな事を思った次の瞬間、紙が青白く輝きだした。

「なっ——!!?」

あまりの衝撃に声をあげる。おいおい、今日はマジックのオンパレードか？今ならキンチョールが実は宇宙人だったなんて言われても素直に受け入れられる自信がでてきたんだが。

ピカツとより一層。光が強くなったからたまらず目を閉じる。そして、次に自分の目の中に入ってきた映像を生涯、俺は忘れることはないだろう。

紅い——ストロベリーブンドよりさらに鮮やかな紅の髪。そうまるで、自身の鮮血のような色をした髪をもった女性がそこに現れた。そして、つぶやいた。

「どちらかしら？私を呼んだのわ？」

この時、俺は知る由もなかった。この出会いで、伝説の赤竜帝と紅髪の滅殺姫と史上最強の異常者が世界を変えていく事になるとは露にも思っていなかった。

俺とあいつの日常編〜鮮血とストロベリー〜（後書き）

とまあ、リアス嬢でしたよ。やっとです。ちなみに主人公は名前を覚えてません。ウチの進くん、名前を覚えてないのに定評がありますから。

戦闘どうでした？まじでした？ひどかった？やめた方がいい？あと、堕天使気を失ってるだけです。いや死なすと話の展開がね。

キャラクター設定をあげてほしいと言われました。あげることは予定してますが、進が悪魔に転生してからにします。だいたいあと二話ぐらいですかね。

あと、ヒロインのアンケート？何ですが、今、ロスさんとオフィスに一票ずつ入ってるんですよ。……。まずくない？敵のトップとの恋愛はさすがに。なのでそれを回避するためにも意見をお願いします。

次回の更新は……。明日にはできたらなあゝ

俺とあいつの日常編〜契約と転生〜（前書き）

とまあ、更新です。いや〜やっと死にましたよ。2人とも長かった、本当に永かった。

それではどうぞ。

俺とあいつの日常編〜契約と転生〜

紅い髪をした女性。凜とした顔立ちで、自信に満ちあふれたオーラを漂わせながら、彼女はこういった。

「どちらかしら？私をよんだのわ？」

その言葉を聞いて俺は、

「さあな？とりあえず俺じゃないことは確かだ」

けだるさと脱力感にみまわれた。

（まためんどくさそうな奴が出てきたな・・・）

そんな事を思いながら、とりあえず無理矢理にでも立ち上がることにした。いかんせん今非常に眠たい。横になっていたら間違いなく寝る。

傷口や筋肉が悲鳴をあげるかのような激痛を無視して立ち上がることは成功したが、フラフラして安定しない。ヤバいな、血が出まくってる。意識をしつかり持たないと。

「そう、だったらこの子のようね。けど、ふつうに考えればそうよね。この子、紙を持ってるし」

そう言いながら倒れたイツセーを女は見た。そして、上品な笑みを浮かべながら呟く。

「死にそうね。傷は・・・へえ、おもしろいことになっているじゃないの。そう、あなたがねえ・・・・・・・・・・。本当、おもしろいわ」

クスクスと興味ありげな含み笑い。野郎の傷口みて何がおもしろいのやら。よくわからん。

すると、今度はこちらじつと見てくる紅髪の女性。いや、そんな植物を観察するように見てくるなよ。

「あなた、よくその傷で立ってきたわね？普通ならもう死んでるわよ？」

と驚き半分、好奇心半分ぐらいの声色で話しかけてきた。

「生憎、普通の体の作りをしてなくてね。人の数十倍は頑丈だよ。」

とりとめもなく返答する、が声を発するのにも激痛がつきまとう。

「少し、質問してもいいかしら？」

といって女は俺に許可を求めてきた。

「却下。俺はやらなきゃいけないことがある。話はその後にしてくれ」

そう、まだアレを殺していない。アレの回復力はどれくらいかはわからんが、なるべく早くトドメを指さなくてはいけない。

「もし、あなたのそのやる事と言うのが墮天使についてのことならあきらめた方がいいわ。もうこの近辺にはいないわよ？」

「なに？いないだと？」

「ええ。私が現れたことで引いたでしょ。少し前までなら気配がしたのだけれど、もう近くにはいないわ。命拾いしたわね？アナタ」

おかしいな。気配がまったく感じられなくなってるなんて。コレは、本格的にマズいかな？

「なんで引く理由がある？俺は満身創痍。もう動く事もままならない相手だというのに」

「さあ？私にはわからないわ」

「？あんた、アレの仲間じゃないのか？アレほどハッキリとは感じないが、少なくともあんたは人じゃないだろ？」

「ええ、人じゃないわよ？私は悪魔。正真正銘の悪魔よ。あなたの判断は正しいわ。でもね——」

次の瞬間、周りの温度が下がる。

「私を堕天使と同類にみないでちょうだい。むしろが走るわ」

こちらを睨んでくる青色の瞳。その中には、憤怒の色が見える。どうやら怒らしちまったようだ。

「んなことするかよ。俺は今のいままで、悪魔やら堕天使やら見たことがないんだよ。解るのは、人間かもしくは人間じゃないかまでだ。間違えて当然だろ。たが、怒らしちまったのは悪かったな。一回は見逃してくれ」

「・・・ええ、まあ。事情を知らなければ仕方ないことね。いいわ、許してあげる。けど、次はないわよ？」

「そらどうも。んじゃ、怒らしちまった詫びに質問に答えるよ。」

「あら、意外と紳土的ね、アナタ」

どっちにしろ。しばらく動けない。俺の回復力でも、この傷は深い。せめて、傷口が閉じるまでは、じっとしておこう。

「では、まず自己紹介から私は――」

といって名前を言う前に

「ああ、いいよ。どうせ覚えられない。俺のだけあんたが覚えてればいいだろ？俺は本道進。私立駒王学園二年だ」

少し、話が変わる、俺は人の名前を覚えれない。そらあもう覚えれない。覚えてるのは、家族とイツセー一家しか覚えてない。何でかって？

ガキの頃から、やたらと訓練やら修行やらを繰り返していたせいで脳細胞が吹っ飛びまくってな、今じゃ学校のテストも勉強しなければ赤点が約束されている。それぐらい悪い、いやもうビックリするぐらい悪い。そんな脳みそだから初対面の人間の名前なんかは覚えがたしがない。顔もすぐに忘れる。それが例えどんな存在であつてもだ。覚えさせる方法はただ二つ、二年間毎日声をかけ続けるか、俺が気に入るかだ。ちなみにイツセーは後者。それ以外は前者だ。

「それは、いささか失礼じゃなくて？女性の名前を聞かない、なんて」

「生憎と、とてつもなく出来の悪い頭をしてるでな。初対面の奴の名前を覚えた試しがないからいわなくてもいいんだよ」

「そう・・・それは、ご愁傷様」

「哀れまないでくれ、まじで。泣けてくるから。」

俺だっけ好きでこんな悪くなったんじゃないやいッ！！

「もう名前はいいから話を進めてくれ」

と、ため息をつきながら言う。

「……………まあ、いいわ。この状況、どうなっているの？」

「そこで倒れてる奴、イツセーっーんだけど、そいつが墮天使にやられてな。それを見てた俺がその墮天使とドンぱちやってその結果がこうなったわけだ」

要点だけいう、てか、要点しか言いたくない。喋るのが本当にツライ。くそ、傷口がなおらねえ。予想以上に深いな。

「要点しか話してないわね……、まあいいわ。それで？あなたは一体どういう存在なのかしら？」

つまり、おまえはどういう化け物だ？て聞いてるんだよな、これ。……………失礼な。

「人間だよ。正真正銘の人間様だ。怪我をすれば血が出るし、風邪をひけば熱もでる。ただ普通の人間より体が異常に頑丈で、凄まじいくらい強いだけだ。まいったかコノヤロウ。」

「魔術も神器もしらない人間が、墮天使とやりあって勝つ事ができるなんて……………。どこのコメディ映画かしら？」

頭が痛いと言わんばかりに手で頭を抑える悪魔。俺の存在をギャグとすんなッ！！

「んで？まだききたいことはあるのか？」

「いえ。大体の事情が解ったからもついいわ。答えてくれてありがとう」

「そうかいそれはなりよ——ゴホッゴホッ」

いきなり咳き込んだので手で口元を覆う。みると血が付いている。おかしい、いくらこの傷が深くても、傷の箇所は肩と太ももと横腹、どこも急所でない。急所でなければ、俺の回復力なら短時間で傷口が塞がらなくても、血が止まりはじめるくらいの時間はたったはずだ。だが、止まるどころか傷がますます悪化している。

そんな俺の困惑を見透かしたように悪魔は囁く。

「堕天使の攻撃は人間や悪魔にとっては猛毒よ？いくら急所が外れていてもいくら回復力が高くても、人間のスペックでは限度があるわ。だから確認したのよ、アナタどんな存在だ、て」

「ちょっと待て。じゃ、俺は——？」

「このままなら確実に死ぬはね。もって・・・あと五分くらいかしら」

五分？五分だと？俺が？あと五分で死ぬ？この俺が？死ぬ？

「・・・ふざけるな・・・・・・ふざけるなッ！！俺はッ！！俺はまだ死ねないッ！！死ぬわけにはいかないッ！！アレを殺さない限りッ！！俺を殺さない限りッ！！俺の復讐をなさない限りッ！！俺はまだ死ぬわけにはいけないッ！！」

「それを私に言われてもどうしようもないわ。ただ解っていることは一つだけ、あなたがあと五分でつきるということだけよ」

突然の余命宣告。それも五分。体からはどんどん力が抜けていき、もうたっているのも辛い。それに体が万全でも今からアレを探してもみつきりはしまい。八方塞がり。もう道がない。俺は・・・死ぬのか？復讐もできず、なにもなさぬまま。あと五分で死ぬのか？死ぬしか、ないのか・・・

そう思った途端、怠惰が心に満ちあふれる。と、そんな中悪魔が声をかけてくる。

「本道進。あなた、まだ死にたくない？」

「ああ・・・まだ、まだ死ねない・・・！！俺は、アレを・・・アレを殺すまでは死ねないッ！！」

「そう。目的があるのね？———だったら私と契約しなさい」

「？契約だと？」

「そう、契約よ。私があなたに新しい命をあげるわ。そのかわりあなたは命ある限り、私に忠誠を誓いなさい」

要するに、下僕になれと言いたいらしい。文字通り悪魔との取引だな。だが、今の俺には神よりかは悪魔の方がちょうどいいくらいだ。

「2つ・・・条件がある」

「なにかしら？」

「一つは、俺が俺の命を断ってからその命をくれ」

「なぜかしら？」

「俺の復讐には俺という存在も復讐の対象になっている。だから俺が俺を殺した後、その命を俺にくれ」

「・・・・・・・・・・」

沈黙。時間にして十秒程度短い沈黙が生まれた。

「わかったわ。それで二つ目は？」

どうやら了承してくれたようだ。案外、人の事を考えているのかも
しれない。

「二つ目はそこにいるイツセーにも命をやってほしい」

イツセーはまだいきいてほしい。それが俺の願いだ。ダメ元だが、
一応言っておくがたぶん無理――

「ええ、いいわ。あげるわよ？あの子にも」

—— かもしれないと思ったけどすんなりいつちやいました
よーッ!?!???

「—— つていいのかよッ!?!」

叫ばずにはいられない。傷口が痛い。叫ばずにはいられない。

「ええ、元々あの子にもあげるつもりだったし」

「・・・理由を聞いてもいいか?」

「あの子には、とてつもないものが眠っている、とだけ言うておく
わ」

そっついながら薄く笑みを浮かべる悪魔。もうどうにでもなれ・・・

「それで? 条件はそれだけかしら?」

「ああ、それだけだ」

「じゃあ、早くあなたは死になさい。私はその間にあの子を助けてくるわ」

といって機微返そうとする前に聞かないといけないことがある。

「あんた、名前はなんて言うんだよ？」

俺の言葉をきいて少し面食らった顔をした悪魔。何だよ、そんなおかしいかよ。

「人の名前は覚ええない主義じゃなかったかしら？」

「いやまあそうなんだが……。その……。こ、これからッ!! 世話になる? 世話をする?……。あーもうッ!! 主になる人に対して……。その……。おい、とか、おまえ、とかはやっぱダメかなあーと、思ったから……。／＼」

なにこれ、いつててめっちゃハズいんだけどッ!!

「あのあれだッ!! あんたの名前なら覚えてやってもいいかなあッて／＼だあ／＼もうッ!! いいから名前教えるッ!! 早くッ!!」

「クフフ、アナタ。それ素でやってるのかしら？」

クスクスと笑いをこらえるような笑いをあげている悪魔。死にたい・
マジ死にたい・恥ずかしくて死ねる・

「アハハ、いいわ。リアスよ。リアス・グレモリー。それがアナタの、本道進のご主人様の名前よ」

リアス・グレモリー……よし、覚えた。しっかりと確
実に覚えた。

「そうか、じゃあ後は頼むわ、ご主人様」

「ええ、頼まれたわ。本道進」

そう言つて、イツセーの方にある歩いていく。ふと、周りをみるとあたりはもう真つ暗で、満月が出ている。俺はその月を見ながら死ぬことにしよう。

「しかし、今日は本当に月がキレイだ」

その言葉が俺の人間としての最後の言葉になった。

俺とあいつの日常編〜契約と転生〜（後書き）

とまあ、ツンデレな主人公でした。ツンデレ・・・か？ツンデレなのか？わからない・・・みんなはツンデレだと思うかい？野郎のツンデレ・・・・・・・・・・どうよこれ。

リアスの口調、変じゃないかな？大ジョブかな？

ヒロインアンケート？の投票数は・・・・・・・・・・

オフィス：一票

ロスヴァイセ：一票

黒歌：一票

うん、主要キャラにはゼロ。ちなみにこのアンケートもどき、期限はまだ決めてないので。

次回の更新・・・明日か明後日には。ではでは

俺とあいつの日常編〜終わりと変化〜（前書き）

題名からしてようやく日常編の終了です。長かったなあ・・・

しかし文が荒そうだよ。どうしよう。

それではどうぞ。

とまあ、この二つについては最近になってようやく慣れるようになった。ただでさえ、朝が弱いからこんな事になっちまったからどうなるかと思っただが、案外ななんとかなった。そうこの二つについては、もう一つだけ、俺にとって下手すれば俺の魂が削られちまう問題が起きた。

それは、夜になるとさらに身体能力が異常になることだ。うまれたときから異常な身体能力を異常に改造して異常なほどあげた体がより一層異常になっちまった。4異常だぞ、4異常。いままでは3異常だったのが、あれいらい4異常になっただよッ！！ただでさえ3異常の時から日常生活が難しかったのに4異常になってからはもうホントに生活ができない。

箸は折れる、ドアノブは握りつぶす、鍵は曲がる、リモコンは握りつぶす、・・・・・・E.T.C。ここまではまだいい。いや、よくないがいい。なんとか対策がうてるからな。だが、それよりも大変なのがゲーム機をぶっ壊しちまうことだよッ！！アレだぞッ！！ボタンを押しただけで押した部分が凹むんだぞ？連打なんかしてみるッ！！リアル北斗の件だよッ！！死活問題だよッ！！一週間でゲーム機が何台壊れたと思ってやがるッ！！？

13台だよッ！！13台ッ！！最近、毎日ゲーム機を買いにいつて、まとめ買いしてるんだからなッ！！？店員の視線とかマジで死にたくなるような視線くるからなッ！！？わかるかッ！！？なにッ！！？だったらゲームをしなければいいだどッ！！？

このあほんだらがああ——ッ！！！！！それでも俺はッ！！したいギャルゲがあるんだああ——ッ！！毎日がかさずしたいんだよッ！！二次元の嫁が待ってるんだよッ！！わからないのかッ！！リアルなんていうクソゲーからログアウトして、二次元にログインしたいんだよッ！！なのにッ！！そのために必要なパスポートが壊れまくっちゃったんだよッ！！

———すまない。どうやら、取り乱してしまったようだ。こちら色々もあるんだ。察してくれ。

とまあ、こんな感じで問題やら不備やらなんやらで死にたくなる数日を過ごしてる。うん、マジ死にたい。もう一回死ぬのはゴメンだが死にたい。

あと、補足。イッセーはあの日の事を何も覚えてないようだ。いや、覚えているがそれを夢のような事だと認識している。それにアレの存在が、元々居なかったように消されてもいた。だが、イッセーは軽くだが覚えているようだ。現にアレの事について聞いてきた。その時は、うまく誤魔化したが、いずれ思い出すだろ。俺のご主人様がなにも行動しない以上、何もしないのが一番だろ。

とまあ、んな事を考えていたら学校についた。時刻は11時34分。今から教室にいけば、丁度授業が終わって入りやすいだろう。それじゃ、一週間ぶりにいきますか。

チャイムがなり終わり、先生が去った後教室に入る。軽く周りから視線がきたがすぐに拡散した。もはや俺が遅刻するのはこのクラスの常識みたいなものだな。

「……………」誰とも会話せずに自席につく。クソ、太陽の光がウゼエ。誰だよッ！！窓際の席最高ッ！！なんていった奴。俺に土下座しろよ。

「おはよ、本道。今日は学校に来たんだな？」

「ゲームはなくていいのか？貯まってたゲームはなくなったのか？」

と、馴れ馴れしく話しかけてきたハゲとメガネ。ウゼエ。なにがうざいって？こいつらの存在が。

「おう、ハゲにメガネ。とりあえず俺に土下座しろよ。理由は俺の機嫌が悪いからだ」

「相変わらずムチャクチャな……」

「というか、いい加減名前を覚えてくれ本道」

イヤだよ、おまえらの名前は意地でも覚えなないよ。

「あ、進。今日きたんだ？」

と、件のイッセーが喋りかけてきた。が、よく見ると少しけだるそう。どうやらイッセーも大変なようだ。

「あ、イッセー。なんかおもしろいことしろよ。飛び降りるとかして」

「なんでおまえの退屈しのぎのためにそんな命張らないといけないんだよッ！！」

「チッ・・・・・・・・・・役立たずが」↑ 大声

「陰口を大声でいうなよッ！！てか、もはや陰口ですらないッ！！」

「イッセーッ！！早く・・・早くいくなッ！！」

「え？な、な、なに？どうしたの？」

「ここは俺達が抑えるッ！！だからおまえはッ！！」

「え？なにッ！？なにこの状況ッ！？全然ついてないんだけどッ！？てか、クラスの連中もノリ良すぎッ！？みんなしてドアの方
向向いてるッ！？」

ほう、案外ノリがいいな。こいつら。

「おまえはッ！！飛び降りるんだッ！！」

「いやいやだから死ぬってッ！！」

「」「」「飛び降りるんだッ！！」「」「」

「まさかのクラス全員ッ！？えッ！？俺が飛び降りるのがおまえらの望みのッ！？」

「」「」「はやく飛び降りるんだッ！！！！」「」「」

「そんなにッ！？そんなに早く俺飛び降りないといけないのッ！？
てか、クラス全員が俺の敵なのかッ！？」

「「「「「「「はやく飛び降りるんだッ！！！！！！」」」」」」」

「ちよつとまてええええ——ッ！！隣のクラスからも聞こえたてきたぞッ！？そうまでしてとばしたいのかよッ！！」

「イツセーッ！！おまえが・・・おまえがッ！！おまえが飛ばなきやッ！！誰が飛ぶんだよッ！！」

「間違いなく俺じゃないからッ！！」

「イツセー行くだッ！！いまいかなきゃ・・・いつ逝くだッ！！」

「少なくともこんな状況じゃないことは確かだよッ！！」

「「「「「「「チッ・・・・・・・・・・チキンが」」」」」」」↑大声

「だから陰口を大声で言っなよッ！！」

「「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ッ！！！！！？？？？」

その後、イッセーは三時間泣き続けた。

「なあ本道。今日これから空いてないか？」

授業が終わり、いざ帰ろうとしたらハゲがはなしけてきた。

「ああ？別に家帰ってギャルゲするだけだけど？」

「つまり、暇なんだ？」

「暇じゃねえよ。俺の四大欲求の一つをみたす大切な事だよ」

俺クラスのギャルゲーマーならもはやギャルゲすることは呼吸と同じくらい当たり前で大切な事なんだよ。コレくらいまでいってようやく一人前だ。

「ギャルゲすることが人間の基本欲求レベルまでいってるのかよ・・・」

「まあな。んで？話は？話だけは聞いてやる」

「ああそつだ。実は最近イッサー元気なかってさ。励ましついでに俺ん家で鑑賞会するだけど、くるか？」

鑑賞会・・・ああ、エロDね。

「悪いがパスだ。今日は家に帰るよ。」

「なんだよ、たまには連もつぜ？」

「普段ならいつでもいいが、今日は眠い。かえって寝ると今決めたから無理なんだ。悪いな」

「そうか・・・・・・・・・・っていまかよッ!!」

「ああ、今だ。俺は今に生きる男だからな」

実際、今からギャルゲする。ようやく力加減が出来るようになってきたからな。はやくしたい作品が山のようにある。

とそこにイツセーとメガネが俺の方に歩いてきた。

「どうだった？松田。進くるって？」

「いやいや、来るだろ。奴も男。下についているものが飾りでない限りかなら………ギャフンツ！？」

とりあえず殴った。メガネを倒した。メガネは死んだ。やったー……

「やる気なさ過ぎだろツ！？」

とって、キレてきたメガネにレバーブローをかました。なんか、気を失っちゃった。しかし、なんでメガネはキレてくるんだ？ただメガネを殴っただけだってのにさ。まったく、これだから最近のメガネは……

「いや、本道は来ないってさ。」

「え？進まないの？」

この二人、メガネの事放置してやがる。案外エグいな。

「ああ、今日は帰って寝たい」

「そっか、じゃ先に帰るよ」

「じゃあな本道ッ！！また明日も来いよッ！！」

とって、メガネを引きずっていった。てか、顔面をずっていつてないか？アレ……………

ふつと、外に視線をやる。少しだけ、茜色に染まりかけた空。チラホラと下校していく生徒がいる。毎日をバカみたいにはしゃいで、単純だがそれなりに楽しい生活。それが俺とあいつの日常だった世界。だが、俺達がそこに帰ることはもうけして出来ない。あの日、俺達の世界は完全に壊された。あの墮天使に、あの悪魔に、そして俺達自身が、今までの世界を壊した。完全に壊したものは直らない。どんなに誤魔化してももう直らない。そして、壊れたものの代わりをたてないといけない。その代わりがどれほどのものなのか、俺達

にはまだ解るはずもない。だが、一つだけ確かだ。それは・・・

「俺とあいつの日常は、ここでピリオドだ」

次の世界がもうすぐそこまで来ているのを今までの日常を眺めてながら、確信した。

俺とあいつの日常編〜終わりと変化〜（後書き）

とまあ、これでようやく日常編は終了です。次回は前に要望があったキャラ設定をあげます。しかし、イッセーの扱いがヒドいな、進。

ヒロインアンケートの途中経過です。

ゼノヴィア 三票

黒歌 三票

オフィス 二票

ロスヴァイセ 二票

朱乃 二票

イリナ 一票

ソーナ 一票

九重 一票

小猫 一票

うん、意外にゼノヴィアが食い込んでいる。自分の予想では朱乃が

ぶつちぎるかと思ったんだがな………

そしてまさかのオフィスツ！！強い……ホント強い………
・・

さて、アンケートなのですが、一人で複数のキャラに票を入れても大丈夫です。てか、なんとなくわかってるよね。みんな。

今回の更新は明日ツ！！いやだって、キャラ設定だからさ。

進のヒ・ミ・ツ?・・・・・・・・うん、キモイ(前書き)

とまあ、要望があつたキャラ設定です。

見にくいですが許してください。

では、どうぞ。

進のヒ・ミ・ツ?・・・うん、キモイ

ほんとう
すすむ
本道 進

外見情報

髪型/髪質・・・サラサラストレートヘア。色は黒。イメージとしてはDTBのヘイのような感じ

視力・・・幼少からの訓練で無駄にいい

聴力・・・幼少からの訓練で無駄にいい

頭脳・・・非常に悪い。テスト勉強を毎日七時間、二週間続けて最高によくて平均点の10点下ぐらい。しなければ間違いなく赤点。さらに記憶力が悪く。初対面の人間の名前と顔は間違いなく三歩歩いたら忘れる。覚えるには、進が気に入るか、二年間話かけ続けないといけない。だが、頭の回転は早く。発想力や想像力、戦略をたてるのは得意。

体格・・・ガチガチの骨太&筋肉質。筋肉は異常な人体改造のせいで速筋と遅肉が半分半分できている。さらに手と足が長く。肩幅も広い。しかし着やせするタイプ

ギャルゲ・・・もはや三大欲求ならぬ四大欲求の一つ。進にとってギャルゲをすることは呼吸する事と同じくらい大切で当たり前。

靴・・・ロングソーツの革靴。ブーツ系が好き。あとコン?ースのスニーカーも。持ってる割合としては6:4:2ぐらい

ファッション・・・上はジャケットやスーツ系の大人っぽいのが好き。
ボトムスは上に合わせたストリートジーンズで揃える。

記述設定

誕生日 1月17日

血液型 AB型

身長/体重 178?/68?

足サイズ 28?

趣味 ギャルゲ・イッセーイジリ・掃除・観葉植物の手入れ・靴や服の新作チェック

特技 盗聴・盗視・ギャルゲの段階的評価・カラオケ（↑主にGR A? RODEOかアニソンを歌う）

好きな??

食べ物 甘いもの・辛いもの

本 なし、読めない漢字がいっぱいあるため

音楽 アニソン、ゲーソンを主に聞く。歌手として好きなのはGR A? RODEO

ゲーム ギャルゲもしくは戦闘が面白いゲーム

テレビ 戦闘シーンがあるアニメ。熱い系やシリアス系、鬱系が好き。

映画 オー？ヤンズシリーズが好き。解りやすくて派手だから

動物 猫。あとは熱帯魚。

その他 睡眠・高い所・金・散歩・酒（ダメ年だがのむ、主に日本酒）

嫌いな??

食べ物 さんま、いわし、あじなどの魚。

本 よめないから嫌い

音楽 童謡、演歌、ラブソング

ゲーム 自由度が低く戦闘がつまらないゲーム

テレビ 恋愛ドラマ

映画 恋愛映画

動物 軟体動物、ヌルヌルした生物

特記事項

身体能力・・・特殊な血筋で、生まれながらにして非常に高い身体

能力を持っている。また、その身体能力を異常に改造したため歴代の本道一族でも屈指の身体能力である。だが、経験や技術が未だ未熟。

[illegible]

武術・・・古式武術「本道一心流」。技としては「四季極」の中の4つしかない。しかし、その技を放つには異常な身体能力が必要となるため、まず人体改造を始めないと話にならない。進は身体能力としては高いが、技の精度、熟練度がないため修行がまだ必要だが形としてなら「四季極」を放つ事が出来る。

女嫌い・・・母の圧倒的権力の前になすすべなく過ごした幼少がトラウマになり、女性が嫌いになった。ただし、二次元の女は大好き。理由は「裏切らないからさ・・・」

恋愛・・・女嫌いなため未だしたことがない。まったくのチェリーさ？ただ、他人の感情の読み取りは上手いため、他人の色恋沙汰には敏感。しかし自分への好意はまったくわかっていない。理由は学校で公然と「女が嫌い」といつているため、間違つても女子が好きになるはずがないと自分で思っているため。しかし、顔の出来も中の中から中の上くらいなため、割とモテる。

性格・・・ぶつちやけ、ヘタレでツンデレ。ツンデレ・・・なのかな

？ただ、他人に対して基本無関心。しかし、困っている人がいたらなぜか助けたくなる。

神器・・・ここはまだ秘密だ。

進のヒ・ミ・ツ?・・・・・・・・うん、キモイ（後書き）

話を進めていく中ででてきた事についてはまた随時書いていきます。

それではまた。

次回は土日かな？

悪魔（のしもべ）始めました（前書き）

とまあ遅くなりました。更新です。いやあ昨日更新したかったんですが、友達のうちに泊まっています。朝五時まで遊んでましたよ。

出来としては・・・聞かないで。

それではどうぞ。

のために滅びろッ！！

そんな、生物が滅亡しかねないような事を朝起き一番に呟く。

だつてあれだぜ？太陽うざくね？太陽が昇ってきたら、（ああ・・・また1日始まるのか・・・）ってならね？憂鬱で死にたくならね？わからない？なにもする気が起きなくなるのがわからないか？そう、今の俺はなにもしたくないんだ。動いたら負けだなと思ってる。働くんじゃないぞ？動くんだぞ？そこ重要だから。

とゆうわけで、俺は寝る。非常に正当で正論な理由で寝る。あれだ、太陽が沈んだら起きるよ。いやそのころには動くから大丈夫だよ。なんてたつて、太陽が沈んでるからな　じゃ、トウトウルー。

そう思い、目を閉じるとピンポンと間の抜けたインターフォンの音が部屋に鳴り響く。どうやら誰かきたみたいだ。こういうときは無視だ。例えばドアの前にこの世のものとは思えないほどの美女が、待っていたとしても俺はいかない。決していかない。第一、俺は女性嫌いだ。第二にそんな事はない。自分で考えといてなんだが、ありえないから。どうせイッサーだから。

あ、でも。イッサーだったら行かないとな。いつて確認してから殴って寝よう。うん。そうしよう。あれだよ、動かなきゃ負けだよ。誰だよッ！！動いたら負けなんてクソカスな事言ったのッ！！謝れッ！！今こうやって動こうとしている俺に床がめり込むぐらい謝れッ！！

そう思い立ち、重いからだを動かしてドアの前までダラダラと歩く。
いやぁ、重労働だ。秒給28万くらいもらえるんじゃないか？まったく、なんて俺は真面目な青少年なんだ。

「もしもしー？進ー？起きてるー？」

いつもの声で、普段ならまずあり得ないことを聞いてくる。いつもならこの時間帯は寝ているが珍しく目が覚めた。この後二度寝をするがとりあえず応答しといてやるか。

「ま、まさかッ！！イッセーさんッ！？イッセーさんなんですかッ！？」（↑進裏声）

「えッ！？だ、誰ッ！？」

「あなたの八番目の愛人、ホッチキスですッ！！」

「知るかぁぁッ！！なんで学生の文房具を愛人にしてるんだよぉ
おおッ！！しかも八番ッ！？え？俺本妻と愛人が七人もいるのッ
！？本妻に申し分けなさすぎるだろッ！！てか俺軽すぎだろッ！！」

「違いますッ！！イッセーさんッ！！私は業務用ですッ！！業務用ホッチキスですッ！！」

「ツッコむところはそこじゃなあああいッ！！てか業務用ホッチキスなんてものがあるのかあッ？！」

「知りませんッ！！」

「知らんのかいッ！！てか、もういいからッ！！進もういいからッ！！起きてるのはわかったからッ！！いい加減顔出せッ！！」

なんだよこいつ。今日やけにのりが悪いな。ふだんならもう少しツッコんでくるのに。てか、さっきからなぜかアレの気配がするんだが・・・・・・・・・・気のせいだよな。イッセーと朝からアイツが俺の家のドアの前に二人並んでいるわけないよな。もしそうなら今度こそイッセーは犯罪をしちまった事になるよな。

・・・・・・・・・・ヤバイ、はやく何とかしないと。もしそうならイッセーの金ボールを潰そう。そうしないと収集がつかなさそうだ。・・・・・・・・・・よし。とりあえず、聞いてみよう。

「あのー・・・・・・・・イッセーくん？そこに誰か居ませんか？なんか気配がするんだが・・・・・・・・気のせいだよな？」

ドア越しに恐る恐る聞く。頼むからいらないと言ってくれ。

「ん？ああ、いるぜ？さっきお前のことを話たら先輩がお前の事知ってたらしくて。どうせなら一緒に学校いこうってことになったから、一緒にきてもらったんだ」

ん？この子は何を言っているのだろうか？俺の求めている答えと全く違う答えが帰ってきたのだが、気のせいだよな？聞き間違いだよね？そうだよな？パト？ツシュ・・・

「イツセーくんイツセーくん。さらにお伺いいたしますが、まさかその先輩というお方は、紅い髪の女性じゃないですよね？」

「いや、その通りだけど？というか、なんでそんな敬語なわけ？キモいぞ」

ダメだコイツ、もう手遅れだ。どうやら幻覚を見ているらしい。間違ってもあの人と一緒に来るわけがないのに来ていると錯覚している。・・・・・・・・・・かくなる上は俺がこの目で見定めるッ！！！
実はいつも自分に都合よくッ！！絶対にあの人じゃないッ！！そう俺は信じるッ！！

そして、ドアノブに手をかけ、ドアを開いた。そこに立っていたのはッー！！

「おはようございます」

紅いカツラをした等身大のキンチョールが建っていた。

「……………ってあり得ないだろッー！！」

そんな事を叫びながら飛び起きる。辺りをみる限り俺の部屋のように。体中いやな汗をかいてる。くそ、なんて夢だ。まさかのキンチョールだなんて……。もういいよ、キンチョール。勘弁してくれ。

時刻を確認する。どうやら五分ほど寝ていたらしい。しかしビックリだな。まさか目を閉じた瞬間寝るなんて。早業すぎる。

しかしどうしよう。さっきの夢が衝撃的すぎて眠気が吹っ飛んだ。どうしよう？このまま学校に行くか？いや、それは俺のプライドが……。しかし、出席日数もあるからな……。仕方ない、行くか。そうと決まればまず顔を洗おう。

そうして朝の支度を始めていく。顔を洗いおえ、制服をきて靴をはいてるときにインターフォンが鳴り響く。瞬間、全身から冷汗がでる。

「おい、進一？起きてるー？」

さきほどみた夢と同じ状況。マズい。非常にマズい。なんかドアあけたらマジでキンチョールがいそう。紅いカツラしたキンチョールがいそう。いやだあッ！！そんなシュールな光景みたくないッ！！

「イ、イイイイイッセーッ!?そこに女性はあるかッ!?」

「な、なんだよ！？なんでそんな動揺してるんだよ！？」

「うるさいッ!! 答えろッ!! 答えなきゃ金? けりつぶすぞッ!!」

「怖すぎるわッ！！どんな脅しだよッ！！あとなんでわかるんだよッ！！ゴルゴかッ！？おまえはゴルゴなのかッ！？」

!!?!?!

イッセーの返答に固まる。まじか？マジでキンチョールなのかッ！

？まさかのキンチョールなのかッ！？勘弁してくれ、キンチョールッ！！

恐る恐るドアノブに手をかける。ヒンヤリしていたが今はどうでもいい。体中が震えている。汗も滝のように出ている。ここまですでドアを開けるのに勇気が必要だった事はあったか？いやない。

そして思い切り、ドアを開けたッ！！そしてそこにはッ！！

「おはよう、本道進くん」

紅い髪をした悪魔がたっていた。そうリアス・グレモリーがそこにいた。

悪魔（のしもべ）始めました（後書き）

キンチョールはもう最後なんで許してください。もう使わないのでとまあ辛い。後書きとか前書きって予想外に辛い。なんか本文書いてからのコレはなかなかくる。

ヒロインアンケートの中間発表です

黒歌 四票

オフィス、朱乃、ゼノヴィア 三票

ロスヴァイセ、小猫 二票

ソーナ、九重、イリナ 一票

って感じですよ。このアンケート、とりあえずまだしばらくは続けます。

次回の更新は、水曜日かな？

悪魔（のしもべ）始めました〜野郎の嫉妬と女の嫉妬〜（前書き）

遅くなつてすみません。あと内容グダグダです？

悪魔（のしもべ）始めました〜野郎の嫉妬と女の嫉妬〜

今、奇跡が起きている。あろう事かこの俺が、普通の時間帯に登校している。……。いやいや「それが普通だ」みたいなメタなツッコミは止してくれ。俺からしたらまずあり得ないことだから。はぐれメタルが三体連続で出現するくらい珍しいから。いつぶりだろうな……。高校入ってからだと二桁にはいってないはずなんだが。

まあ、今はそんな事はどうでもいい。今は――

「んで？なんかようかよ？リアス・グレモリー」

――自分の主っぽい感じの人に質問をぶつけることが重要だ。

「そうね……。簡単にいうと、2人にはもうそろそろ私の下僕として働いてもらおうと思ったのよ」と、なんかわりと楽しそうに言うってくるご主人様（クソ悪魔）。ったく、こっちはなにされるかわからんから不安がバーゲンセール状態だぜ。そんな中イツセーが質問してきた。

「せ、先輩、じゃあやっぱり進も……」

「ええ、アナタと同じ悪魔であり私の下僕よ」

どうやら、イッセーは俺たちが悪魔だって知ったようだな。

「イッセー、いつ悪魔だって聞いたんだ？」

「今日の朝だけど？ていうか、進は俺やおまえが悪魔だって知ってたのか？」

「ん？まあな。てか、なんかつつすらと血の匂いがするぞ？どっか怪我したのか？」

さつきから微かに匂っていて気になってた。イッセーから強く匂うから、どこか怪我でもしてるんだろうか？

「え？うん。ちょっと昨日な」

「……………どうやら、昨日別れたあとになんかあったっぽいな。てか、今考えたらおかしいな。朝からイッセーとご主人様（クソ悪魔）が一緒にウチに迎えにくるなんてさ……………ん？一緒に？」

「おいイッセー。話は変わるがなんで2人できたんだ？おまえならともかく、リアス嬢が朝からウチに来るなんておかしいじゃねえか」

「えッ！？い、いやあ！？たまたまじゃない！？」

「あほんだら。んな偶々あるか、ボケ。おい、リアス嬢。どういうことだよ？」

と、ご主人様（クソ悪魔）に問いかける。

「昨日、イッセーのウチに泊まったからよ。ちょっと、用事でね」

なん・・・だと？・・・ま、まさかイッセーは犯罪を！？コレは聞いておかないと！！下手したらイッセーの金？けり碎かないといけない！！

「・・・それ、どういう用事だ？」

少し睨みながら聞く。多少強くでないとこついうタイプは何も教えてくれないからな。イッセーが間違いを犯してないことを強く願う。

「・・・昨日、少し堕天使との戦闘があったのよ。その時に彼が負傷したの。傷がヒドかったから治療のために彼のウチに泊まったの。わかった？」

「堕天使・・・、アレか？」

脳裏に浮かぶ忌まわしい堕天使の顔、イッセーを殺した実行犯。俺の復讐すべき対象。また、アレが——ッ！？

「天音夕真のこと？アレとは違う墮天使よ。危うく私の可愛い下僕を殺される所だったわ」

どうやら外れたらしい。しかし、案外いるんだな。人外が存在って奴が。

「せ、先輩？今、夕真ちゃんの事・・・」

イツセーが驚いた顔をしてリアス嬢に聞く。そういや、イツセーはアレの事を覚えていたな。すっかり忘れてた。

「その事についてだけど、もう少し時間をとって話しましょ。学校の登校時間中じゃあ、人目や時間が足りないわ」

周りを見るとちらほらとうちの学校の生徒が見える。当たり前だが、悪魔であることは秘密にしとかなないといけないようだ。

「わかり、ました・・・」

苦虫を噛んだみたいな顔をしながらイツセーが呟いて、それ以降その話題にはふれなかった。

と、そんな会話が終わってから何も話さずに登校していたら、なぜか周りから視線を感じる。学校に近づくにつれて強くなっていく。けど原因はすぐにわかった。

「・・・・・・・・」

このお隣にいるリアス嬢が学校でも屈指のサボリ魔と学校最強クラスのエロ男と一緒にいたらそら機会に見るわな。それに俺たちがいなくてもリアス嬢の容姿だけで視線はひくだろな。

よくよくみたら非常に整った顔立ちをしてる、紅い髪も目立つ。けどそれ以上に目立つのが。動くたびに存在のでかさを示す胸だろ。なんだよ、アレ。ブルンブルンしてんすけど。動くのと同時にゆれてんすけど。今までみてきた女の中で一番でかいんじゃない？ってくらいデカいんですけど。アレだ、デカメロンだ。メロンじゃないデカメロンだ。デカいんだ。もうデカいと言えない。それにイツセーの鼻息が荒いんですけど。どうにかなんないっすか、みなさん・

まあいい、あんま気にしないようにしよ。と煩惱を殺したが周りが非常にうるさい。それに会話の内容が

「どうしてあんな男たちと・・・」

とか

「リアスお姉さまがあんな下品な男たちと一緒にだなんて・・・」

いわれてるだが、俺関係なくね？てか逆恨みじゃね？俺なんかしましたっけ？こんなナイフみたいに鋭い視線を受ける理由が見えたら・・・ないこともなかった。イツセーか・・・。イツセーがすべての原因か。・・・ますます俺関係ないじゃん！クソ・・・なんで俺がこんな目に・・・正直泣きたい。

やっこの思いで校門を抜け限界前の下駄箱についた。何人か奇声あげて倒れる奴もいたんだが・・・気にしたら負けかな？

「あとで使いを出すわ。放課後また会いましょう」

と俺達に告げて、自身の教室に向かっていった。

「なあ、イツセー・・・」

リアス嬢が去った後、隣にいたイツセーに話しかけた。

「なんだ？進」

「・・・スゴかったな」

「・・・・・・・・・・うん」

2人してあのデカメロンのゆれぐわいを思い出していた。

その後、下駄箱で靴を履き替え教室にたどり着いた時、教室から異様な殺気を感じた。なんだこれ？凄まじいくらい殺気がでてるんだが。間違いなく殺されるくらい殺気が出るんだが、私なんかしましたっけ？ただ学校に來ただけで殺されそうになるってどんなんだよ。このまま家に帰りたい。けど今日は学校にいないといけない。いないとリアス嬢の約束を破っちまうことになっちまう。アレだよ。女の人との約束は命を全力燃焼してでも守れってお母様の教えなんだよ。・・・よし、覚悟を決めたぜ。

「いこうか、イツセー」

隣にいる相棒に同意を求める

「ああ、進。覚悟が決まったぜ」

そして、俺はドアに手をかけ思い切りドアを開けた！！

瞬間、机が俺達めがけて飛んできた。

「「あぶなッ！？」」

反射的に教室の壁に身を隠した。そしてもの凄いスピードで机が飛んでいき、派手な音をたてて壁に激突した。

「……………」

絶句。何も声がでない。なんだあれ？机つてあんなスピードで飛んで来るのか！？あたったら間違いなく骨が折れるくらいの威力だったぞ、アレ……。

壁から教室の様子を盗み見ようとして顔を出した瞬間、鋭い何かが飛んできた。慌てて顔を引き戻してよける。すると、グサツと音が床から聞こえてきた。音がした方を見ると床に五センチくらい突き刺さった鉛筆やらシャーペンが目に入った。

はぁッ！？な、なんだこれッ！？なんだよこれッ！？ヤバいつて今のコース間違いなく頭直撃コースだったって。てか、ジャイロ回転してたぞ！？シャーペンジャイロ回転してたぞ！？メジャーリーガーがウチのクラスにいるのかよ。

「す、進？なんか今とてつもないものが飛んで来たんだけど気のせいかな？気のせいだよな？気のせいにだとしてたいよ！」

「イッセー、現実逃避すんな。俺も目を背けたいが間違いなく真実だ」

てか、ウチのクラスの連中の戦闘能力たかすぎだろおい。どこの学校にシャーペンをジャイロ回転で投げる奴にいらんだよ。

「てか、この状況どうするよ。このままだと2人して殺されるぞ？」

「フツ……甘いなイッセー。俺に作戦がある。ただこの作戦には2人の絶対的な信頼が必要になる」

「ぜ、絶対的な信頼・・・」

「そつだ。俺はおまえの事を信頼してる。あとは、おまえ次第だ」

「・・・・・・・・わかつたぜ、進。お前を信頼するぜ。作戦はすべて任せろぜ」

「ああ、任せな。んじゃ逝こうか、イツセー」

イツセーが頷いたのを見て、教室にいる連中に聞こえるような声で。

「降服だ。俺たちの負けだ、だから攻撃をやめてくれ」

「・・・・・・・・」

沈黙。時間にしては大体三十秒ほどだったが、とても重い沈黙だった。

「・・・・・・・・いいだろう。降服を受け入れよう」

かえってきた返答に俺は安堵する。ここが通らなきゃ何も始まらないからな。

隣にいるイツセーに合図を出し2人で教室に入る。すると周りからの視線、視線、視線……。嫉妬と恨みが詰まった視線を俺達は受ける。クソ、予想以上に堪えるな・・・

「兵藤一誠、本道進。単刀直入に聞く。なぜ我が駒王学園の二大お姉さまの1人、リアス・グレモリー先輩と登校した？」

問いかけてきたのはハゲ。どうやら奴が代表らしい。奴と話をつけない限り俺たちに明日はない！！

作戦を始める前にイッサーにアイコンタクトを送る。今の俺たちは目と目だけで相手の伝えたいことが解るのだ。

「イッサー・・・始めるぜ？これから行う作戦はお互いの信頼が――

――」

目で訴える。それを受けと奴も。

「クドいぜ、進。二年や三年の付き合いじゃないだろ？俺たちの絆は簡単には切れやしないぜ」

「――そうか。わかった、始めるぞ」

そう言つて、俺はハゲと向かい合う。

「ハゲ・・・その前にいつておかなきゃならない事がある」

「なんだ？」

オペレーション・・・スタートだ！！

「おまえらが裏切られたように、俺も裏切られたんだ。・・・・・・
・・・この兵藤一誠によって！！」

「――ッ！？」「――」

俺の一言に全員固まる。イッサーさえも固まっていた。そしてしば

らくしてハゲが。

「それは・・・どういうことだ？」

よし、食らいついてきた。

「確かに、今日俺はリアス・グレモリーと一緒に登校してきた。だが、その登校時の俺の姿は、どうだった？少なくとも喜んでいたように見えたか？むしろ疲れた顔をしていたと思うが？」

「た、確かにあのときのおまえは喜んではいなかった」

俺の指摘に全員が息をのむ。よし、今の空気は悪くない。このままいくぜ！！

「じゃあ、逆を聞こう。ここにいるイツセーはどうだった？俺と違い喜んでいたんじゃないか？」

「ああ、イツセーは嬉しそうにしていたよ。だが、それは関係——」

「——があるから言っているんだ。考えてみてくれ、リアス・グレモリーみたいな美女と一緒に学校に登校して嬉しくない奴がいると思うか？いないだろう。じゃあなぜ、俺は嬉しくなかったのか。それは・・・」

少しためる。その短い時間にイツセーにアイコンタクトを送る。

「進うううう——！？大丈夫なのか！？本当に大丈夫なのか！？なんか俺の立場どんどん悪くなってるんですけど！？」

「俺を信用しろよ、イツセー。大丈夫だ、すべて作戦通りだ」

「なんかひたすら俺の立場が悪くなっていったるのは俺の気のせいなのか!？」

「だから作戦通りだつて。俺を信用しろよ、イツセー」

「ああ、わかったよ。任せたぜ!!進!!」

アイコンタクト終了。この間わずか一秒。そして――

「イツセーが俺を裏切つて、リアス・グレモリーと仲良くしてたんだよッ!!」

「さっきまで信用とか信頼の話はどこにいったんだよコラアアアッ!!てか、今おまえ裏切ったよな!？あらぬ理由たてて俺裏切ったよな!？」

「どつちがだよ!!さきに裏切ったのはそつちだろ!!俺たちの十年以上かけて積み上げてきた友情を砕きやがつて!!」

「おまえだよ!裏切ったのも、友情砕いたのも全部進だよ!!」

「見たかおまえら!？コイツ裏切ったのを誤魔化そうとしてやがるぞ!？」

そういつて周りをみる。だがあまり反応がよくない。

「それでおまえは何がいたいんだ?」

なるほどつまり核心を話せと言いたいのか。

「簡単だ。俺はおまえたちと同じ被害者だって事だよ」

「その理由は？」

「それは俺がここにすることが最大の理由だ」

「何？」

「俺がこんな朝早くから学校に来ていることが最大の理由だって
いたいのさ」

「どういうことだ？」

「俺が朝から学校にくるなんてことは年間でも数回しかない。理由は簡単、朝が苦手だからだ。だから寝坊して昼頃に学校にくるのさ。しかし、今日はどうだ？朝から来ているじゃないか。つまり朝誰かにむかいにきてもらったということだよ」

「――！！」

どうやら解ったようだな。

「そして今日、朝向かいに来たときにはイッセーとリアス・グレモリーがいた。つまり！！イッセーとリアス・グレモリーは並々ならぬ関係にあるっていうことなんだよ！！」

「でっち上げと嘘のオンパレードだなッ！！てかマジでコイツ友情を踏み碎きやがった！？」

イッサーが叫んでくるが無視して話を続ける

「じゃ、じゃあおまえは・・・？」

「ああ、おまえたちと同じ被害者だ。そして・・・俺たちの敵は兵藤一誠だッ！！」

そしてイッサーの方をむいてアイコンタクトをする。

「進ッ！！どういっつもりだよ！？こんな裏切るみたいなことしやがッて！」

「裏切る？違うな。これが作戦だよ。」

「な、何ッ！？」

「あの状況で2人が助かる確率は低い。ならば片方を犠牲にするこ
とでもう片方を生かしただけにすぎない」

「そ、そんな・・・」

「じゃあイッサー。生きてたらまたあおう。」

「な、何？何を言って？」

そしてイッサーは気づく。奴の周りに引かれたイッサー包囲網に。
今俺たちの敵はイッサーただ一人だからな。

「裁きを・・・」

「怒りの鉄槌を・・・」

口々に恐ろしいことを言いながらイツセーに向かっていくクラスメイトたち。

「ま、まで！！みんな進騙されてるんだ！！アレは、アレは全部でた・・・・・・・・・・らめじゃなかったああああ！！？」

そう、俺の言ってることは全て真実。ただし言い方を変えてるだけだ。

「ま、まって！！ホントまって！？アレが！？本道進が！！本当の敵なんだって！！わかってくれよお・・・・・・・・ぎゃああああああああああ・・・・・・・・・・」

そして、イツセーは星になった。

そして時間は過ぎてホームルーム。担任の先生が教室に入ってくる。と、俺に気づいたようだ。

「なんだ？本道。珍しいな、朝からいるじゃないか」

「たまには来ますよ。」

「そうか。コレからも普通に来てくれ」

「床に頭擦り付けてくれるなら考えなくもないですよ?」

「おまえはどれだけ上から目線なんだ・・・」

それ以降は普通に連絡事項を述べる担任。そして一通り言い終えた後。

「それから・・・さっきから思ってたんだが。ゴミ箱を被ってパンツ一丁でベルトで固定されて体中あざだらけなのは兵藤か?」

「ええ、そうですか?」

「・・・誰がしたんだ?」

「あいつ自身が望んでました」

「そうか、なら問題ないな。では解散」

どうやらこの学校。兵藤は無視してみんなの共通認識のようだ。

悪魔（のしもべ）始めました！野郎の嫉妬と女の嫉妬（後書き）

遅れた理由やらアンケートの経過は次の更新に載せます！！じゃ。

悪魔（のしもべ）始めました♪歓迎とシャワー♪（前書き）

・・・言い訳は一つ。シュタゲが面白すぎただけだ・・・

すみません、本当すみません。

それではどうぞ。

悪魔（のしもべ）始めました。歓迎とシャワー。

「ヒドい目にあつた・・・」

「イッセーがつぶやく。あのゴミ箱をかぶった状態で丸々1日過ごし、ようやく解放されたようだ。」

「なんだ？その顔。どうせ顔面スライディングでもしたんだろ？アホが」

「こんな顔を見て一切心配してくれないのもアレだけど、その原因を作った張本人が事件を忘却してることに對して俺はどう反応したらいいんだよ！？てか、なんで進は無傷なんだよ！！」

「美形だから」

どや顔しながら甘い声で言い放つ。

「あんた真顔でなにいつてんの！？てか、謝れよ！！今日1日ゴミ箱被り続けた俺に謝れよ！！」

「サーセンwww」

「全く悪いと思つてないな・・・」

「うん」

「即答！？」

「だってゴミ箱被るのおまえの趣味だろ？」

「ねえよ！！んな事実まったくねえよ！！てか、やめろって！！そう言うこと言って俺の変な趣味を増やそうとするなって！！」

「いいよるなウザい！！」

そう言っでイツセーにパンチ

「反抗期！？」

顔面にジャストミート。なのに無傷だった。コイツ、体の強度あがつてね？

そんなバカ騒ぎをしていたら不意に後ろに気配を感じた。

「すまない。君達が兵藤一誠君と本道進君で間違いないかな？」

振り向いてみるとそこには薄く笑みを浮かべたイケメンな青年がたっていた。だが、それよりも驚いたのが俺との距離だ。3、4歩程度の距離があいているがこの距離になるまで俺が気配に気づかなかった。確かに気を抜いていたがそれでも驚愕に値する。

コイツ、俺とタメぐらいでコレほど気配を消せるとは……。なかなかスゴいな。てか、イツセーが半眼で睨んでる。そっぴやコイツ、イケメンが嫌いだったな。っか、うるさい。周りが超っつさい。どうしてこっぴの声って耳にキンキンくるんだ？軽く殺意がわくんだが……。とりあえず質問に答えるか。

「ちげえよ。俺は本道進だが、コイツは逆さゴミ箱っていう名前だ。ちなみに名字は逆さ、名前がゴミ箱だ」

「ちがうから！一文字も合っていないから！！前からいつてるだろ！そうやって初対面の人間に変なうそつくなって！」

「アアン？テメエ・・・今がないなんて本気で言ってるのか？」

「——ッ！？」

怒気をはらませながら言う。すこし強張った顔を見せながら、

「まあないがな」

「ってないのかよ！？」

あっさり裏切ることにした。

「ははは、とりあえずあってるのかな？」

といって苦笑しながらつぶやく、どっかのイケメン。

「だからちがうって。コイツの名前は下半身生物『イッサー』だよ」

「どんなんだよ！！下半身生物って！！てか、さっきと言ってるこ
とが違いすぎる！！」どんなっておまえそりゃあ・・・

「基本的に物事を下半身にちなんだ考えをする奴の総称だが？」

「すみません・・・生きててすみません・・・」

「え、えーと・・・、とりあえず僕はリアス・グレモリー先輩の使
いできたんだけど、一緒にきてくれないかい？」

まあ、予想はしてたがな。

「了解。おい下半身、いくぞ？」

「・・・俺、この話が終わったら自殺するんだ・・・」

いきなり死亡フラグを建ててきた。しかも生き残っても死ぬのかよ。
斬新だ。

「おうやれやれ（笑）」

「へぐわあああああああああん」

イッセーがいきなり泣き出した。だが、今は気分がいいから俺は

「うざい（笑）」

「へぐぶツ!？」

腹に蹴りをかます。うん、見事にみぞに入って悶絶してる（笑）

「り・・・理不尽、な・・・ガクッ」気絶したか。チッ、
使えない玩具だ。さて、引きずってくか。顔をな。

「んじゃ、行こうぜ」

「え？か、彼は大丈夫なのかい？」

戸惑うモヤシ。まあ、普通はそうだな。

「いいんだよ。単なるこいつの趣味だから。あ、わりい。ちと待つてくれ。荷物の準備をする」

「あ、ああ・・・わかったよ」

その言葉を聞いて身支度を始める。いやぁ持って帰るものが多い。マンガにゲームにラノベ。うん、いっぱいだ（笑）

「・・・哀れな・・・」

モヤシがイツセーをみて、そんな事を呟いた。

モヤシの後に続きながら向かった先は、後者の裏手だ。確か、旧校舎だったかな？今は使用されてなかったはずだが・・・。てか、なんかオーラがすごい。なんていうか、いかにもでるぞみたいな雰囲気だ。けど外見は古い感じだけで窓もどこも割れてない。

「ここに部長がいるんだよ」

モヤシがそう告げる。・・・部長？アイツ、何か部活してんのか？つか、コイツも同じ部になるのか？まあ会ったら話してくれるだろうからいいが。

二階建ての木造校舎を二階まで進みさらに奥にまで歩く。床を見てみるとほこりがみあたらない。割と掃除してるんだな。そうこうしていたらモヤシの歩が止まる。どうやら目的地のようだ。どうやら教室のようだ。戸にはプレートがかけられている。

『オカルト研究部』

……オカルトがオカルトを研究部するなんて。自分研究したらはやくね？

「部長、連れてきました」

引き戸の前からモヤシが確認をとると「ええ、入ってちょうだい」というお返事。律儀だな

モヤシが戸を開けて入っていく。それに続くようにしてイツセーと一緒に入る。ちなみにイツセーはあれから三分で復活した。……化け物だな。

部屋の中を見てみるとあらびつくり。変な文字がやたらと書いてある。壁やら床やら天井やら。んでさらには教室の真ん中に変な円陣。ぶっちゃけひくわ……

あとは、ソファーとデスクが数台ある。と誰か座ってるな。誰だ？あの女。ロリなコンが喜びそうな体型をした美少女だ。いや正しくは美少女か？まあ可愛い部類される顔立ちだ。つか眠そうだなコイツ。あとそこはかと同じ感じがする。何となくだな。

「こちら、兵藤一誠君と本道進君」

モヤシが紹介しやがる。それに応じて彼女も頭を下げてる。

「あ、どうも」

イツセーが頭を下げる。俺はというと右手を軽く上げて答える。それを確認すると食べかけの羊羹を食べ始める。・・・うまそうな羊羹だ。

シャー。

部屋の奥から、水が流れる音が聞こえる。シャワーか？みるとシャワーカーテンを発見。誰か使ってるようだ。ああ・・・みないよにしょ。てかシャワーで・・・どんなんだよ・・・

キュツ。

水を止める音。

「部長、これを」

あん？カーテンの奥にもう一人いるのか？声からして女のようなが、アイツのじゃない。

「ありがとう、朱乃」

隣を見てみるとイツセーが顔を赤くしていた。間違いなくエロいことを考えてる。

「・・・いやらしい顔」

ぼそりと言。どうやらあの羊羹が言ったらしい。

「言ってやるな、これがデフォルトなんだ」

「言ってることがムゴい・・・」

ジャー。

カーテンが開く。そこにいたのは制服を着たアイツ。てか、髪ちゃんと乾かせ。痛むぞ。

「ゴメンなさい。昨夜、イッセーのお家にお泊まりして、シャワーを浴びてなかったから、今汗を流したの」

それをきいてイッセーが応える。

「あ、そうだった・・・げはっ!？」

「「「!!!??」「」」

とりあえず、イッセーを蹴ってみた。イッセーは引き戸の所まで転がりドアに当たり止まった。おー、みなさん驚いてる。

「・・・よし?」

「よしじゃねえよ!!人けてよしじゃねえよ!!つか意味もなく蹴るなっていつてるだろ!？」

「いや、理由はあるぞ?なにか全国のおっきなお友達がテレパスィーを送ってきてそれに従っただけなんだ。うん、だから俺は悪くな

いからな」

「そつか、じゃあしょうがない、みたいな事になるかああああ！！意味わかんねえよ！！なんで俺蹴られなきゃならないんだよ！？」

「いやだから全国の――」

「ただ単におまえが蹴りたかったただけだろうが！！」

「うん」

「素直にいつでも意味がない！！むしろ悪意を感じます！！」

「悪意じゃない殺意だ」

「今すぐ俺は逃げたいです！てか俺がなにをしたっていうんだよ！！」

「光合成した」

「もう人じゃねえよ！！人間のスペック上無理だから！！」「じゃエロい妄想した」

「誠に申し訳ありません」

静かにイッセーが土下座している。スゴいな、もはやイッセーの土下座が日常と化してきた。

「ほ、本道君？これはいったいなに？」

リアス嬢が聞いてくる。若干戸惑っているようだ。

「気にするな。いつもの事だ」

「・・・これがいつもかしら？土下座するのがいつもかしら？」

「しまいになれる。」

全国のおつきなお友達・・・恨みははらしたぜ・・・・・・・・・・

「おら、イツセー。頭蹴り上げられなくなったら今すぐ立ち上がりやがれ」

「横暴にもほどがある・・・」

涙を流しているイツセーを無視ってシャワーを見る。なんであるんだ？不思議すぎるだろ。とよくみたら奥に人がいる。

質の良さそうな黒髪をポニーテールにした女の人だ。その顔には笑顔が浮かべている。・・・どこことなくお母様に似ている気が・・・
・・・オーラとか色々。

「あらあら。はじめまして、私、姫島朱乃と申します。どうぞ、以後、お見知りおきを」

なんか裏がありそうな笑顔をして挨拶してくる。・・・・・・・・・・
いい声はしてる。

「こ、これはどうも。兵藤一誠です。こ、こちらこそ、はじめまして！」

イッセーがかなり緊張している。なにやってんだこいつ？

「本道進だ。・・・はじめまして」

いかん。もう名前を忘れてしまった。ヤバいな・・・。

「これで全員揃ったわね。イッセー、進」
そう言っただけ確認をもとめてくるリアス嬢。

「は、はい」

「・・・」

「私たち、オカルト研究部はあなた達を歓迎するわ」

「え、ああ、はい」

「・・・」

「悪魔としてね」

「——っ」

「・・・グウ」

「て寝るなよ進!!」

もう眠いよパトラッ?ユ・・・

悪魔（のしもべ）始めました♪歓迎とシャワー♪（後書き）

実はアンケート何ですけど、趣向を変えようかと。期間性じゃなくて、規定量を超えたものをヒロインにします。んで、ヒロイン枠を一人から三人に増やして、とりあえずヒロイン三人で話を進めて、その後もう一度アンケートとってメインヒロインを決めたいと思います。んで後の二人をサブにします。いきなり変えちゃってすみません。

中間順位は

オフィス 五票

朱乃 黒歌 四票

ゼノヴィア 三票

ロスヴァイセ 小猫 二票

ソーナ 九重 イリナ 一票

ってかんじです。とりあえず10票を目安にします。

それではまた、次回は日曜日くらいには・・・

悪魔（のしもべ）始めました！神器と自己紹介（前書き）

長かった。今回一番ながかった。そしてついに進の神器が！！

話はいきなり変わるんですけど、セイクリッドセブンってアニメが
案外おもしろい。あの中二くさがね……………

悪魔（のしもべ）始めました。神器と自己紹介。

「粗茶です」

「あつどうも」

ソファーに座る俺達に、・・・黒ポニーがお茶を淹れて渡してくる。
淹れられたお茶をずっとイッセーが飲む。

「うまいです」

「あらあら。ありがとうございます」

イッセーの言葉で嬉しそうにわらう黒ポニー

「進はのまないの？」

「俺はいい。今喉は渴いてないからな」

テーブルを囲んでソファーに座る俺、イッセー、もやし、チビスケ、
リアス嬢。

「朱乃、あなたもこちらに座ってちょうだい」

「はい、部長」

黒ポニーがリアス嬢の隣に座る。全員の視線が俺達に集まる。あれ
か？俺たちは動物園の珍獣なんか？みせもんじゃねえぞ？とそん
な中リアス嬢が口を開く。

「単刀直入に言うわ。私たちは悪魔なの」

いや、状況的にそうでしょうよ。

「信じられないって顔・・・ではないわね、進。イツセーは仕方ないわ。でも、あなたも昨夜、黒い翼の男をみたでしょ？」

やはり。イツセーは昨日のうちに堕天使にあつてるようだな。・・・よく生き残れたな。

「あれは堕天使。元々は神に仕えていた天使だったんだけど、邪な感情を持っていたため、地獄に堕ちてしまった存在。私たち悪魔の敵でもあるわ」

この世界に堕天使やら悪魔やらマジでいるとわな・・・

「私たち悪魔は堕天使と太古の昔から争っているわ。冥界——人間界で言うところの『地獄』の覇権を巡ってね。地獄は悪魔と堕天使の領土を二分化しているの。悪魔は人間と契約して代価をもらい、力を蓄える。堕天使は人間を操りながら悪魔を滅ぼそうとする。ここに神の命を受けて悪魔と堕天使を問答無用に倒しにくる天使を含めると三すくみ。それを大昔から繰り返しているのよ」

つまり、アンパンマンとカレーパンマンが土地を巡ってバトってるなかに独り占めしようとしてしょくぱんまんが乱入したってことか？

「いやいや、先輩。いくらなんでもそれはちよつと普通の男子高校生である俺には難易度の高いお話ですよ。え？オカルト研究部ってこういうこと？」

「オカルト研究部は仮の姿よ。私の趣味。本当は私たち悪魔の集まりなの」

・・・俺たちの存在自体がオカルトだろ？

「――天野夕麻」

その名前に、怒りがこみあがる。イッセーも驚いてるようだ。

「あの日、あなたには天野夕麻とデートをしていたわね？」

「・・・冗談なら、ここで終えてください。正直、その話はどういう雰囲気でしたくない」

おう。珍しくイッセー怒ってるよ。まあ、残念ながら冗談じゃないんだよな。

「彼女は存在していたわ。確かにね」

といって、イッセーにハッキリと告げるリアス嬢。

「まあ、念入りに自分であなた達の周囲にいた証拠を消したようだけど」

そついつて指を鳴らすリアス嬢。すると黒ポニーが一枚の写真を出してきた。そこには俺達から日常を奪い去った存在が写っていた。

「この子よね？天野夕麻ちゃって」

拳を強く握る。自分の中にある殺気を押さえる。コイツだ。コイツが俺の、復讐の対象。待ってるよ、必ず俺が殺してやる。

「この子は、いえ、これは堕天使。昨夜、あなたを襲った存在と同質の者よ。この堕天使はとある目的があつてイツセーに接触した。そして、その目的を果たしたから、あなたの周囲から自分の記憶と記録を消させたの」

「目的？」

その目的はおそらく。

「おまえを殺すためだろ、イツセー」

イツセーが驚愕する。そして俺に噛みついてきた。

「な、なんで俺がそんな！」

「知るか、その理由はそこにいるリアス嬢が教えてくれるだろうよ。つか、俺も巻き込まれた？側の方なんだよ。俺も分らんことが多い」

むしろ突っ込んでいったよな？俺……

「落ち着いてイツセー。仕方なかった……いいえ、運がなかったのでしょうね。殺されない所有者もいるわけだし……」

「運がなかったって……」

おいおいおいおい。俺達の死んだ原因が『運がなかった』って・・・
ショックでなくぞゴラ。

「あの日、あなたは彼女とデートして、最後にあの公園でお腹を貫かれたのよ」

「でも、俺生きてるっスよ！だいたい、なんで俺が狙われるんだよ！」

そうだ。そこが疑問だ。なんでイッサーが狙われなきゃならなかったんだ？こんな性欲を除けば何も残らない奴をなぜ殺さなきゃならなかったんだ？

「彼女があなたに近づいた理由はあなたの身にとある物騒なモノがついているかいないか調査するためだったの。きっと反応が曖昧だったんでしょね。だから、時間をかけてゆっくりと調べた。そして、確定した。あなたが神器を身に宿す存在だと——」

神器——

確か、アレもそんな事を言っていたような？いないような？

すると今度はモヤシが話し出す。

「神器とは、特定の人間の身に宿る、規格外の力。例えば、歴史上に残る人物の多くがその神器所有者だと言われているんだ。神器の力で歴史に名を残した」

「現在でも体に神器を宿す人々はあるのよ。世界的に活躍する方々

がいらっしやるでしょ？あの方々の多くも体に神器を有しているのです」

モヤシの次に黒ポニーが説明してきた。とりあえず、質問をぶつける。

「じゃ、アーサー王のエクスカリバーもその・・・神器？に部類されるのか？」

「はい。だけどそのクラスの神器は滅多にありませんわ」そうなのか？だったらクーフリーンのゲイ・ボルクとかもそれに部類されるのか・・・

「大半は人間社会規模でしか機能しないものばかり。ところが、中には私たち悪魔や堕天使の存在を脅かすほどの力を持った神器があるの。さっきいったようなエクスカリバーもそうよ。そしてイツセー、手を上にかざしてちょうだい」

「え？手？手！？」

「いいから、早く」

リアス嬢に急かされながらイツセーは左腕を上にした。

「目を閉じて、あなたの中で一番強いと感じる何かを心の中で想像してみてください」

「い、一番強い存在・・・。ド、ドラグ・ソボールの空孫悟かな・・・」

ああー・・・あれは確かに強かったなあ。

「では、それを想像して、その人物が一番強く見える姿を思い浮かべるのよ」

それをきいてイッサーが目を閉じる。あ、たぶんドラゴン波を想像してるな。

「ゆっくり腕を下げて、その場で立ち上がった」

指示通り、イッサーが立ち上がる。

「そして。その人物の一番強く見える姿を真似るの。強くよ？軽くじゃダメ」

まじかよ！？あの年でドラゴン波をやるのか！？羞恥プレイにもほどがあるだろ！？イッサー・・・や、やるのか？やってしまうのか！？その年で！ドラゴン波を！！てか、俺は耐えられるか？みなさんマジ空気のなかやったドラゴン波をみて俺は笑いをこらえることができるのか？断言しよう、無理だ。

そしてイッサー構えてそして！

「・・・ド、ドラゴン波！」

開いた両手を上下に合わせて前へ突き出す格好をとる。

「~~~~~ッ!？」

まじか！！やりやがった・・・やりやがった！そして笑いがおさえられない。ヤバイ、マジ耐えられないwww

「さあ、目を開けて。この魔力漂う空間なら、神器もこれで容易に発現するはず」

え！？ドラゴン波で！？俺以外だれもうけてないドラゴン波で！？
するとイツセーの左腕が光り出した。

「何これ！何これ！」

マジか！？マジなのか！？神器所有者はみんなこれをくぐるのか！？
？こんな羞恥プレイをくぐるのか！？

光が形を形成していき、左腕を覆っていく。そして光が止み赤色の籠手らしきものが装着されていた。特徴としては凝った装飾と手の甲部分の宝石らしきところだろ。

「な、なんじゃ、こりゃあああ！」

うわぁー・・・なんかできてるよー・・・・・・・・

チョー驚いてますよ、イツセーさん。するとリアス嬢が。

「それが神器。あなたのもよ。一度ちゃんとした発現できれば、あとはあなたの意志でどこにいても発動可能になるわ」

あの赤いのがねえ！。てか、よく知ってるね。

「あなたはその神器を危険視されて、墮天使——天野夕麻に殺されたの」

つ、つまり、あれが原因？

「瀕死のなか、あなたは私をよんだのよ。この紙から私を召還してね」

するとリアス嬢が一枚のチラシを取り出す。それはイツセーがデートの待ち合わせの時貰ったチラシだ。そこには『あなたの願いを叶えます』という感じで書かれている。うん、胡散臭すぎだろ。よくみたら魔法陣が書かれている。ん？床のと似ているような？

「これ、私たちが配っているチラシなのよ。魔法陣は、私たち悪魔を召喚するためのもの。最近は魔法陣を描くまでして悪魔を呼び寄せる人はいないから、こうしてチラシとして、悪魔を召喚しそうな人間に配っているのよ。お得な簡易版魔法陣。あの日、たまたま私たちが使役している使い魔が人間に化けて繁華街でチラシを配っていたの。それをイツセーが手にした。そして、墮天使に攻撃されたイツセーは死の間際に私を呼んだの。私を呼ぶほど願いが強かったんでしょうね。普段なら眷属の朱乃たちが呼ばれているはずなんだけれど」

あんな胡散臭い紙切れを信じる奴がいるのか・・・

世の中疲れてるなあ・・・

「召喚された私はあなたを見て、すぐに神器所有者で墮天使に害さ

れたのだと察したわ。問題はここから。イツセーは死ぬ寸前だった。墮天使にお腹を貫かれていたから、瀕死の状態だったのよ。あのまじじゃ助からなかった。だから私はあなたの命を救うことを選んだ」
それが悪魔への転生ってわけか。

「す、進は？進もなんですか？進も夕麻ちゃんに——？」

「あー・・・あれはー、殺されたのか？いや、どっちかというと自爆に近いのか？うーん・・・」

イツセーの問いに悩む。アレはどちらに部類されるんだ？自爆殺害？事故？え？どれ？

「そういえば、あの状況の細かい所まで聞いてなかったわね。いいわ、進。今ここではなしてちょうだい。」

リアス嬢からの許可もでたから言ってみよう。うん。みんななら事故か自爆か殺害かわかるだろ。

「えっと・・・天野？だっけ？イツセーがそいつを紹介してきた時から違和感を感じてな。直感で人じゃないってわかったんだ。んで、気になったからイツセーのデートを尾行してアレの目的を探ってたんだ。そしたら、イツセーを殺そうとしたから間に割って入って戦った。はじめは一撃加えて逃げるつもりだったんだが失敗してな。そしたらアレに興味持ち出して、見せしめにイツセーが殺されたんだよ」

よく考えたら、イツセーが一番哀れだな。

「え？じゃ俺がやられた理由って進のせいなの？」

「いえ、元からイツセーを殺すつもりだったのでしょう。ただ、予想外な横槍が入ったからまず目的を果たすことを優先しただけだわ」

「どっちにしろ俺は殺されてたんですね・・・」

ま、そゆことになるな。

「んで、イツセーが殺されたのを見て俺がマジギレして、後先まったく考えず特攻してたのよ。なんか光の槍みたいの体を貫かれたっばいけどそのまま突っ込んでいつて、一発デカいのをアレにぶちかましてやった。そのあと、アレが吹っ飛んでいった後にリアス嬢が現れたんだ」

話し終わるとイツセー以外なんか引いてる。あれ？なんか変なことありました？真実話したただけなんですけど・・・

「す、進？その話は本当かしら？」

「む？失敬な。真実ですがなにか？」

「い、いえ。堕天使の光の槍をくらったたら普通は悪魔じゃなくても人間なら即死なのだけど・・・、信じられないわ」

事実だからな、事実だからな。

「じゃ、じゃあ進はそれが原因で？」

「ん？まあ、そうなるんじゃない？てか、即死じゃなかったぞ？普通にアンタしばらく話しただろ？」

「規格外すぎるのよ、あなた・・・」

また全員から引かれてる・・・、いやだから全部真実だから。

「ま、まあ、そういう経緯であなた達を私、リアス・グレモリーの眷属として生まれ変わらせたの。私の下僕の悪魔としてね」

リアス嬢がそういった瞬間。墮天使とは違うコウモリのような翼がリアス嬢の背に現れた。

バツ。

音が背中からでる。背中をみると同じように翼が出てきていた。

・・・かつちよいい！。

「じゃ、改めて紹介するわ。祐斗」

とリアス嬢からの命でモヤシがこっちを向いてくる。

「僕は、木場祐斗。本道君や一誠君と同じ二年生ってことはわかってるよね。えーと、僕も悪魔です。よろしく」

よし、モヤシだな。覚えたぜ。

「・・・一年生。・・・搭城小猫です。よろしくお願いします。・・・」

・悪魔です」

小さく頭を下げるチビスケ。

「三年生、姫島朱乃ですわ。いちおう、研究部の副部長も兼任しております。今後もよろしくお願いします。これでも悪魔ですわ。うふふ」

深く頭を下げる黒ポニー。

「そして、私が彼らの主であり、悪魔でもあるグレモリー家のリアス・グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくね、イツセー、進」

・・・どうやら予想以上に厄介な事になったようだ。

「本道進だ。よろしく」

とりあえずもう一度自己紹介をする。それにつられてイツセーももう一度。

「兵藤一誠です。よろしくお願いします」

俺達の自己紹介をきいてリアス嬢が笑顔でこたえる。

「ええ、よろしく。さて、早速だけど進。あなたにしてもらうことがあるわ」

その言葉に疑問をもつ。すること？いきなりだな。

「マジで早速だな。OK、なんだ？」

「さっきイツセーがやったようなことをしてもらっわ」

「さっき？神器の発動か？」

「ええ、そうよ。あなたからは微弱だけど神器の反応があるの。せっかくだからここで発動させましょう」

「まじかよ。てか、今日俺『まじかよ』って何回いったっけ？かなり言ったような・・・」

「ん？まてよ？発動？神器を？ま、まさか・・・」

「あ、あのぉ・・・？つかぬことをお聞きしますが、まさか私もドラゴン波をしないといけないのでしょうか？」

「もしそうなら発動なくていいよ、マジで。あんな羞恥プレイ耐えられない。」

「あなたの中でイツセーと同じように強い姿がそれなら同じようにしてもらっけど、どうなの？」

「あ、そ、そうだったな。いやぁー焦ったぜ・・・。まさか俺がドラゴン波をしなくちゃならないのかと本気で悩んじゃったぜ・・・」

「いや、違っけど・・・」

「じゃあ、あなたの中で一番強いと感じる何かを想像してちょうだい」

「お、おう・・・」

と言われても困るんだけど・・・俺の中での最強だろ？だったら当然お母様になるわけだが・・・ち、違うよな？そういう最強じゃないよな？

だとしたら次に強いとしたら・・・認めたくないが親父だよな。時速二百キロ近いスピードで突っ込んでくる五トントラックを右ストレート一発で弾き返すような化け物だよな。・・・本当にさ、人なのか？

「え、えつと・・・俺の中での最強って親父だけど、その真似をすりゃいいのか？」

助けて、リアえもん！！

「ええ。あなたの中でのイメージがあなたのお父さんならそうよ。心の中で想像してちょうだい」

取りあえず目をつむる。親父を想像するってやだな・・・まあ、仕方ないか。親父、親父。・・・あれ？なんでだろ？なんだが目から暖かいものが流れてくるよ？

「イ、イツセー？なんで進は泣いてるのかしら？」

「・・・聞かないでやってください。進にとって親父さんはトラウマの塊みたいなものですから」

「そ、そう・・・大変ね、彼・・・」

よ、よし。なんとかイメージは出来たぜ。

「リアス嬢。次は？」

「次はその人物が一番強く見える姿を思い浮かべるのよ」

強い姿ね。・・・やっぱり、正拳突きしてるところかな？ガキのころからずっとみてるが、全くもって無駄がなく、速く、力強いんだよな。

「・・・いいぜ。次は？」

目をゆっくり開いて指示を待つ。

「ゆっくりたって、その姿を真似るの」

「真似るのはいいが、少し場所がせまい。移動してもいいか？」

「構わないわ。やりやすいようにしてちょうだい」

了解、と。

俺はソファーから立ち上がり、少し移動する。距離にしたら2、3歩程度かな？その位置でとまりゆっくりと目をまた閉じる。

「・・・」

全員の視線が集まるのを感じるが、集中すれば気にならなくなるだ

る。・・・よし。

「いくぞ」

腰を落とし、股を肩幅ほどに開く。左手を前に突き出し、右手を胸の辺りに持つてくる。左手は甲は上、右手は甲は下にある。そして

「フッ——！！」

腰を捻らせて、右手を突き出す。と同時に左手を胸の位置にまでしまう事を行う。さらに右手を捻らせながら180度回転させながら突き出す。そして——

パンツ！！

打ち出した拳が空気を弾かせる。うん。いつ聞いてもいい音だ。親父もこんな音を出してたな。ただなにか違和感を感じた。なんか音が？音のであるタイミングがおかしかったような？そう、なんか拳を突き出し終わった後から聞こえたような？

「す、進・・・今、さ。音があとから聞こえたような？」

イッサーが戸惑うように質問してくる。うん、俺も同じように事を思ったよ。

「お、音速を超えたのかしら？」

「た、たぶんそうじゃないでしょうか部長」

「規格外ですわ、本当に」

「・・・ビックリ、です」

え？あれ？マジで？音速越えちゃったの？マジで？秒速36キロこえたの？マジで？

「・・・もういいわ。進、目を開けてちょうだい」

「あ、おう・・・」

目を開けてみる。そこには皆さん疲れたような顔をしてました。いや、俺のせいじゃないから。やれっていったのリアス嬢だから。

するといきなり――、俺の全身が光り出した。

「え？は？はい！？」

めっちゃ光ってる！？体がめっちゃ光ってる！？ヤバいぐらい光ってる！？太陽拳全身版みたいな感じだよ！？え？大丈夫なのか？俺！？

「落ち着いて、進。神器が反応してるのよ。大丈夫、しばらくしたら光らなくなるわ」それでもビビるわ！！てか、今の俺って、等身大蛍光灯みたいな感じなんだけど・・・・・・早く終わってくれ――！！

すると光はイツセーの時と同様に、形を成していった。まるで全身

を包むようにゆっくりと光が動いていった。

そして、光がやんだとき、俺は制服の上に真っ黒なコートを着ていた。

真っ黒な、本当に真っ黒なコートだ。装飾は愚か、ボタンやチャックすらもない。襟もいたってふつうだ。本当にシンプルな、それでいて色濃いコートだ。長さとしてはすねぐらいまである。

これが――？神器？イツセーのとは全然違うな。

「ふーん、それがあなたの神器か」

リアス嬢が話しかけてくる。てか、これどうやってしまっただ？

「あのさ？これどんな力があるんだ？」

てか、それが一番重要じゃね？

「それは私でもわからないわ。メジャーな形をしたものならだいたいわかるかもしれないけど、私もコートの神器なんて始めてみたからどうにも・・・」

そすか。まあ別にいいが。

「神器については調べておくわ。それよりも二人とも、これから悪魔の基本的な活動について説明をするからこっちにいらっしやい」

「・・・どうやらまだ今日は続きがありそうだ。俺、もう家に帰りたい。帰りたいよおおおおッ！！」

カムバック!! 日常!!

悪魔(のしもべ)始めました〜神器と自己紹介〜(後書き)

進のコートイメージはDTBのヘイのコートです。裏地も黒ですが・・・

ちなみにこのコートの禁手状態、友達にしたら、「チートすぎる」っていわれました。それぐらいしないとだめなんだよ!!けど、最終的にごり押しになる。それに能力はチートだけど相手に直接ダメージはないチートだからそんなに・・・

中間順位は

オフィス 五票

朱乃 黒歌 ゼノヴィア 四票

小猫 三票

ロスヴァイセ 二票

ソーナ 九重 イリナ 一票

こんな感じです。

次回は・・・、休日までに一回は更新します。

あと、進のコートの名前、募集します。作者ネーミングセンスないから（笑）

悪魔(のしもべ)始めました♪爵位と目標♪(前書き)

はい、更新です。

そしてついに進が壊れる！・・・はじめから壊れてたな。

それではどうぞ。

悪魔（のしもべ）始めました！爵位と目標！

深夜――

誰もが寝静まった中を俺、本道進は駆け抜ける。月と星に照らされた家々の屋根の上をスーパーボールの跳ねる。その速度は自転車なと比較にならないほどのスピードだ。

（まるで、忍者だな・・・）

心の中でばやく。今の俺の状況って『modern strange NINJA』？近代に蘇った奇妙な忍者？うん、かつちよいい。後はあれだな、『猫の目』（男version）だな。あんな感じじゃない？今の俺。

俺が家々を跳ねる理由は、このチラシ。そうチラシ配りをしている。イッサーが持っていたものと同じのだ。欲がある人間がこれを使うと俺たち悪魔が召喚されるってやつだ。

手に持つてる携帯機器をみると、モニターには周囲の町マップが表示されている、そして赤い点が点滅している。そこには欲がある人間がいるってわけだ。んでそこにこのチラシをわたしにいく。この繰り返しをここ数日ずっとしている。

「・・・はあ。いつまでこれを繰り返したらいいんだ？」

そんな事を、空を駆け抜けがなから呟いた。

あの日、俺達がリアス嬢に呼ばれた日に遡る。

ちなみに神器は念じたら消えた。ビックリだぜ。あと悪魔の翼なんだが、なれたら飛べるらしい。マジでかつちょいいな・・・

「私のもとに来ればあなたの新たな生き方も華やかになるかもしれないのよ?」

悪魔になったことについて頭を抱えているイツセーにリアス嬢がウインクしながら言い放つ。俺?別に気にしてないからな。元々化物みたいな存在が本当に化け物になっただけだからな。

しかし、どうやら俺達は悪魔に転生したかわりにリアス嬢の下僕として生きてかなきゃならないらしい。まあそんな事を言ってたしな。

人間から悪魔に転生したやつは、絶対的に転生させた悪魔の下僕として生きてかなきゃならんらしい。なんか社会的ルールらしい・・・俺の嫌いな言葉だ。そういうルールは大っ嫌いだ。

「でもね、悪魔には階級があるの。爵位っていうのがね。私も持っているわ。これは生まれや育ちにも関係するけど、成り上がりの悪魔だっているわ。最初は皆、素人だったわ」

「どこぞの学校のCMみたいなこといわないでください!っーか、本当ですか?いまいち信用できない」

・・・よく知ってるな。古いCMなのに。ん?なんかリアス嬢がイツセーに耳打ちしてるぞ?てか、小声でも俺の聴力なら拾えるんだが・・・

「やり方しだいでは、モテモテな人生も送れるかもしれないわよ？」

「どうやってですか!？」

早っ!？反応早っ!？もはや脊髄反射クラスじゃね?てか、そこま
でいくと素晴らしいな、おまえのスケベ根性。てか、なんかリアス
嬢からでてるんだが・・・、オーラ?みたいなのが。あれが魔力か?

「純粋な悪魔は昔の戦争で多くが亡くなってしまったのよ。そのた
め、悪魔は必然的に下僕をあつめるようになったの。まあ、以前の
ような軍勢を率いるほどの力も威厳も消失してしまったけれど。そ
れでも新しい悪魔を増やさないといけなくなった。悪魔にも人間同
様に性別はあるから悪魔の男女の間に子供は生まれるわ。それでも
自然出産で元の数に戻るには相当な時間がかかってしまうの。悪魔
という存在は極端に出生率が低いから。それでは墮天使に対応でき
ない。そこで素質のありそうな人間を悪魔に引き込むことにしたわ
け。下僕としてね」

「やっぱり、下僕じゃないですか」

「いやまったくもってその通りです。」

「もう、そんな残念な顔をしないで。話はここから。ただそれでは
下僕を増やすだけで力のありそうな悪魔を再び存在させることには
ならない。だから、悪魔は新しい制度を取り入れたわ。力のある転
生者——つまり、人間から悪魔になった者にもチャンスを与えるよ
うになったのよ。力さえあれば、転生者でも爵位を授けよう——と。
そのせいもあって、世間に割と悪魔は多いわ。私たちがみたい人間
社会に潜り込んで行動している悪魔も少なくないしね。イッセーや

進も知らず知らずのうちに悪魔と町中ですれ違っていたと思うわ」

ま、まじかよ。でも確かに時々街中で違和感を感じることはあったが・・・

「悪魔って案外身近に存在するだな？」

「ええ。もつとも、認知できる者とできる者がいるわ。欲望が強い者や悪魔の手でも借りたいほど困っている人間は悪魔に強く認識しやすいわね。そういう人たちに魔法陣つきのチラシを配ると私たちは召喚されやすいのよ。悪魔を認知できても、先ほどのイッセーのように私たちの存在を信じない者も多いけれど、魔力を見せれば大抵は信じるわ」

じゃ、イッセーがリアス嬢を召喚したのは欲望が強かったからか。まあ欲望だけなら史上最強じゃね？ん？まてよ？

「でもよ、リアス嬢。俺はうつすらだがあんたらに違和感を感じたぜ？少なくとも人じゃないのはわかったんだが・・・」

つまり、俺は欲望が強いのか？うーん、そんな強い方じゃないんだが・・・

「あなたの場合は、直感で感じたんでしょ？まったく、知れば知るほど人間離れしてたわね・・・」

「さいですか」

まあ、そうだろうと思ったよ……。といきなりイッセーが思いついたように叫んだ。

「じゃ、じゃあ！やり方次第では俺も爵位を！？」

「ええ。不可能じゃないわ。もちろん、それ相応の努力と年月がかかるでしょうけど」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」

イッセーが叫び出す。てか、隣にいらんだから叫び出すなよッ！鼓膜破れるだろうが！！

「マジか！俺が！俺がハーレムを作れる！？エ、エッチなことしてもいいんですね！？」

「うわぁー……最低だぁー……」

さつきまでの真面目な話を一瞬で色欲の方へ持つてくとか……。マズい、早く何とかしないと……

「そうね。あなたの下僕ならいいんじゃないかしら」

「つていいのかよ！！その人に人権とかはないのかよ！！もはや一種のレ？プじゃね？」

つか、イッセーの喜びようが、ヘンパないんだが……。そんなにハーレム作りたかったのか。まあ現代社会じゃハーレムは難しいわな。下手したら後ろから刺されるし、首飛ばされるし、ヤンデレに殺されるし……。某誠くんがいい例だ。あれ？イッセーって一誠だよな？一文字あつてるよ？……。こいつ、死ぬんじゃない

ない？

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッ！！悪魔、最高じゃねえか！何、これ！何、これ！チョーテンション上がってきたよ！いまなら秘蔵の工口本も捨てられ——」

とそこで真顔で考え込むイツセー。てかよかったな。俺はテンション下がる一方だ。

「いや、工口本はダメだ。アレはダメだ。俺の宝だ。お袋に見つけられるまではやっていける！それとこれは別だ。うん、別だ！」

「フフ。おもしろいわ、この子」

リアス嬢が笑う。いや、おもしろいじゃなくおかしいだろ、常考。

「あらあら。部長が先ほどおっしゃっておられた通りですわね。『おバカな弟達がかできたかも』だなんて」

といって黒ポニーがにこやかに笑う。いやいや、確かに俺はバカだが、イツセーはおバカなレベルじゃないからな。てか、なんかどつかずれてないこいつらッ！？

「というわけで、イツセー。私の下僕というわけでもいいわね？大丈夫、実力があるならいずれ頭角を表すわ。そして、爵位をめらせるかもしれない」

「はい、リアス先輩！」

「違うわ。私のことは『部長』とよぶこと」

「部長ですか？『お姉さま』じゃダメですか？」

お、お姉さまて・・・、こいつもう本格的にだめなんじゃないかな？つか、それを真剣に悩まないでくれよ、リアス嬢。

「うーん。それも素敵だけど、私はこの学校を中心に活動しているから、やはり部長のほうがつくりくるわ。いちおう、オカルト研究部だから。その呼び名でみんなも呼んでくれてるいるしね」

「わかりました！では、部長！俺に『悪魔』を教えてください！」

うん。言葉だけきいたら素晴らしいが、動機が不純すぎだ・・・

「フフフ、いい返事ね。いい子よ、イツセー。いいわ、私がお前を男にしてあげるわ」

とってイツセーのあごをなでるリアス嬢。・・・なにをどうつつこんだらいいかわからない。

「ハーレム王に俺はなるっ！」

「いやいやいやー！『海賊王に俺はなる』てきなのでいうなよ！てかおまえは杉崎か！？杉崎なんか！？超高性能副会長なんか！？」

・・・聞いてないぞ、コイツ。目が超キラキラしてるよ。

と、思い出したように俺の方を向くリアス嬢。

「進はどうなの？爵位に興味は？」

「ないな」

「あら？本当？爵位をもらって成り上がりたくないの？」

「ないな」

「あら、即答。なぜかしら？」「だって、めんどくさいだろ？そんな権利やら爵位は、俺には必要ない。必要とも感じない。もっていても使わないだろ、それに俺は使わないものは持たない主義だ」

「じゃあ、女性には？イツセーのようにハーレムに興味は？」

「それもないな」

「・・・それはなんでかしら？」

「ぶつちやけ、興味ない。それに女性って扱いが難しいだろ？そんなことは超一級フラグ建築士がやることで、俺はまったくもって興味がない」

それに・・・女性が恐いつて身にしみてるからなあ・・・。あんな存在とは付き合いたくない・・・

「じゃあ、何を目的に生きてくのかしら？」

目的？それなら簡単だ。

「親父を血祭りにすることだな」

そう、俺の人生を奪い去った存在をぶちのめすのが目的だ！

「・・・現段階では無理なの？」

リアス嬢が戸惑いながら聞いてくる。フツ・・・そんなの。

「無理だな」

「・・・・・・・・・・」

いや、無理だって。アレ殺すのはまだ無理だって。冗談で水面を走る奴にはまだ勝てないって。

「あ、あともう一つある」

「な、なにかしら？」

顔をひきつらせながらリアス嬢が聞いてくる。俺の夢は全世界のオタクの夢だ！

「ああ、二次元に行くことだ！！」

「「「・・・・・・・・・・」」」

その場にいた全員が絶句した。さっきまではしゃいでたイツセーもだ。な、なんだよ！そんな哀れむような視線は！

「次元を越えることが目標って・・・」

「予想斜め上すぎますわ・・・」

「変人、です」

「あ、あはは・・・」

「進も十分ヒドいよな・・・」

な、なんともおもいやがれ！けどおまえらならわかるだろ！？リアルなんていうところからログアウトして二次元にログインしたいだろ！？俺達、二次元人の永遠の夢だろ！？さあ！同士よ！俺と一緒に叫ぼう！

「二次元に、俺は行くッ！！」

悪魔（のしもべ）始めました！爵位と目標（後書き）

・・・夢だよね、僕らの。二次元に行きたいよね・・・、嫁たちとキャッキャウフウフしたいよね・・・

アンケートの途中経過

オフィス 小猫 ゼノヴィア 五票

朱乃 黒歌 四票

ロスヴァイセ 二票

イリナ 九重 一票

とりあえず、アンケートですけど締め切りを一卷の終わり頃にします。

あと、コートの名前も募集中です。

追記、なんといつのまりやら三万PV越えと五千ユニーク越えしていました。さらにお気に入り登録数も五十越えです。ありがとうございます！
ざいます。非才の身ですがこれからも足掻いていきます！

次回は土日中には。

悪魔（のしもべ）始めました！汗と気のせい！（前書き）

とまあ更新です。書いてて思ったんだけど、本当にイッセーの扱いがひどい。加減したれよ、進・・・

あと、微妙にフラグを！たてる？

悪魔（のしもべ）始めました〜汗と気のせい〜

その後、部長（この呼び方で俺と一悶着あったがこの際はぶく）から悪魔の基本的な事を教わった。

まず、集まりは旧校舎のオカルト研究部の部室。時刻は深夜。なんで夜かというところの方が悪魔の力が発揮されるからだそうだ。悪魔だから闇の世界になると力が増すらしい。うん、そのせいでゲーム機が何台壊れたか・・・

あと、朝がさらに弱くなった理由も悪魔になったからだそうだ。悪魔は光を嫌う。光が強いと体に悪いんだとさ。俺が学校にいけなかった理由も悪魔に転生したてだから日の光に慣れていなかったからだそうだ。え？もともといつてないだろ？んなばかな（笑）人間の頃でも昼からはいってたぜ？

俺もイツセーも悪魔になって日が浅いから、まず悪魔社会の仕組みについて勉強しないとイケないらしい。・・・やだな、勉強。てか、したって覚えられる訳ないじゃねえか。まあ、今のところこのチラシ配りを夜中にしてればいいだけなんだが、もうしばらく続きそう

だ。
あ、あとは学園についてだ。俺の通ってる駒王学園は部長の領土になってるしいくて、部長は学園の裏の支配者らしい。学園のお偉いさんも悪魔関係者でグレモリー家に頭があがらないらしいぞ？つまり学園はリアス嬢の私物みたいな感じだ。そのおかげで夜中に学園に集まれるんだがな。・・・今度頼んだら成績あげてもらえるかな？

んで話はチラシ配りになるんだが、魔法陣がかかれたチラシを謎の

機械で点滅してるお宅に届ける。この謎の機械なんだが、悪魔の科学が生んだ秘密道具らしい。・・・これが登場したとき某NEKO型ロボットが道具を出すときの音を口にしてしまった。いや、だつてね？お約束でしょう。

携帯ゲーム機似でそれプラスタッチパネル式だ。意味もなく力が入ってるな。なんか、悪魔ごとに人間界で活動できる範囲は決まってるらしくて、その範囲内でしか仕事——つまり、人間との契約で相手の願いを叶えることだ。代償としてお金や物、最悪命をもらうらしい。まあそんな命をかけるやつなんて滅多にいないらしいがな。

んでこの謎の機械に点滅してるところが欲が強い人間がいる家つてわけ。点滅が続く限り、俺のスーパーボール的な移動は止まらない。悪魔になったおかげか他の人間や警察に認知されなくなった。なんでも仕事中は人間に存在を認識されないようだ。試しに不法侵入したんだが、不幸にもハードゲイ真っ盛りな家に行っちゃってな・・・アレはヒドかった・・・

そ、それから悪魔の活動時間はよるだけらしい、なんでも昼は神やら天使やらの時間なんだとさ。チラシは使い捨てらしいから、味をしめた人間が悪魔に願いを叶えなくなったらまたポストにブチ抜かないといけない。・・・何回も同じこととしてたら一回キレちゃってさ、人のいえのポストに風穴あけちゃった。あ、あははは。

まあ、詰まるところこのチラシ配り、まだまだ続くってわけだ。はあ・・・だりい・・・

「早く人間に——、じゃなかった、妖怪人間か俺は。早く二次元にいきたーい！」

そう叫びながら、ポストを破壊しながらチラシを詰め込んでいった。

ある日の放課後？実は今日学校が終わってから登校してきたからどういえばいいんだろうな？遅刻？欠席？まあいいや、ぶっちゃけ部活に学校にきた。・・・なんだよ、昨日徹夜で『空の境界』見てたんだよ。幹也マジでパネエよ。

俺は旧校舎の玄関でイッサーと待ち合わせして二人で部室に向かっていった。ちなみに普段のチラシ配りはコウモリやらネズミやらを使役して擬人化してやってるらしい。そらまた便利だな。

あ、あとほかの部員の名前、前つけたあだ名通りで呼んだら怒られた。おもにチビスケと黒ポニーに。けど理由をイッサーが話したら納得してくれた。・・・してくれただが、あの哀れむような目を向けられたきがしたが気のせいだよな？ハゲとメガネの前でそう呼んだらつかみかかってきたが返り討ちにしてゴミ箱にねじ込んでおいた。いやー傑作だった。・・・と、部室に到着した。

「はいりまーす」

イッサーがそう言うってから入ると、すでにほかのメンツは揃っていた。・・・てか、なにさこの教室。窓はしめ切って暗幕かけてるし、床には火のつけられたロウソクがあるし、うん怪しい。

「来たわね」

俺達を確認したら、黒ポニーに指示を送る部長さん。いやそらあ、こいつっていったのアンタですから。

「はい、部長。じゃあまずはイツセーくん、魔法陣の中央へきてください」

イツセーはその指示に従いながら中央に向かっていき、そこで止まった。あん？なにすんだ？

「イツセー、進。あなた達のチラシ配りはもう終わり。よくがんばったわね」

笑顔でいつてくる部長さん。なんだ、終わりが。案外楽しくて好きだったんだがな。

「改めて、あなた達にも悪魔としての仕事を本格的に始動してもらうわ」

「おおっ！俺達も契約取りですか！」

「ええ、そうよ。もちろん、初めてだから、レベルの低い契約内容からだけれど。小猫に予約契約が二件入ってしまったの。丁度いいから進とイツセーにいつてもらおうわ」

「・・・よろしく願います」

ペコリと頭を下げてくるチビスケ。堅苦しい奴だな。

「進、少し魔法陣に入ってるわ。移動してちょうだい」

「ん？ああ、了解」

俺が魔法陣から離れると魔法陣が青白く光りだした。

「あ、あの・・・」

「黙っていて、イツセー。朱乃は、いまあなたの刻印を魔法陣に読み込ませているところなの」

ほう、魔法陣にね。パソでゆうとエロゲをインストールしてる感じか？え？ちがう？

そういや、部長が眷属悪魔にとってこの魔法陣は家紋のようなものだって言ってたな。つまり、召喚するもの、契約を結びたいものにとって、これが俺たちを表す記号になる。魔力とやらの発動もこの魔法陣を絡めたものになるんだと。モヤシたちの体にはこの魔法陣が大小各所に書き込まれていて、魔力の発動と一緒に機能するそうだ。俺やイツセーはそれよりも先に魔力コントロールから始めないといけないらしい。

「イツセー、手のひらをこちらに出してちょうだい」

部長さんの指示にイツセーが従い、左手を部長に向ける。すると部長がイツセーの手のひらをなぞる。なぞり終えたら、イツセーの手が光り出す。よく見てみると魔法陣のようだ。なるほど、さっきは魔法陣を書いていたのか。

「これは転移用の魔法陣を通って依頼者のもとへ瞬間移動するためのものよ。そして、契約が終わるとこの部屋に戻してくれるわ」

ほえー、便利だなあー。

「朱乃、準備いい？」

「はい、部長」

そついつて黒ポニーが魔法陣の中央から離れていく。

「さあイッセー、中央にたつて」

部長にそう促され、イッセーは中央に立つ。瞬間また強く光り出す魔法陣。おお、なんか光がイッセーのオーラに見える（笑）

「魔法陣が依頼者に反応しているわ。これからその場所に飛ぶの。到着後のマニュアルは大丈夫よね？」

「はい！」

「いい返事ね。じゃあ、行つてきなさい！」

うおおおお！マジか！？ワープすんのかワープ！？いーなあー！めっちゃいいなあー！かつちよいいなあー！俺もはやくしたいしたいしたああああい！！

うおっ！？なんかさらに光出したぜ！？くっ……まぶしいー！そしてイッセーが瞬間移動を——！！

移動を……い、動……を……。

あれ？イッサーさん、そのままにして光が消えちゃったんですけど？どゆこと？

周りを見ると、部長は額に手をあて、困り顔を浮かべ、黒ポニーは「あらあら」と残念そうな顔をし、モヤシはため息をついていった。

「……イッサー」

部長が目を点にしているイッサーを呼ぶ。

「はい」

「残念だけど、あなた、魔法陣を介して依頼者のもとへジャンプできないみたいなの」

「……はい？今なんて仰いましたか？please kill me again、ん？ちがうな。まあいいや。」

「魔法陣は一定の魔力が必要なやけど……。これはそんなに高い魔力を有するものではないわ。いいえ、むしろ悪魔なら誰でもできるはず。子供でもね。魔法陣ジャンプなんて初歩の初歩だもの」

えーと？つまり？

「つまり、イッサー、あなたの魔力が子供以下。いえ、低レベルすぎて、魔法陣が反応しないのよ。イッサーの魔力があまりにも低すぎるの」

な、なんだってえー……。つまり、あいつは子供以下だということか？

「な、なんじゃそりやあああ！？」

叫びだすイッセー。いや俺でも叫びだしてるわ。これじゃあ依頼者のもとにいけないんじゃないか？だって遠回しに役立たずっていわれてるみたいなものだ。

「無様」

ぼそりと無表情で呟くチビスケ。 うん、俺なら首を吊ってるな。

「今日からイツセーは役立たず、か・・・」

「シャレにならねえよ!」

すると黒ポニーが困り顔で部長さんに尋ねる。

「あらあら。困りましたわねえ。どうします、部長」

「判決、死刑」
(↑進声まねりアス version)

「ゴオオオオオオオ！マジですか！？」

「ええ、マジよ。ほら早く死になさい。そして二酸化炭素削減に協力しなさい」(↑進声まねリアス version)

「うっつ、わかりました。部長がそういうならこの命ッ！……ここでたつてたまるかあああああ！……！」

そう叫びながら俺の方を向くイツセー。チツ・・・バレたか。

「やめろよ！そうやって傷心してる俺の心に塩塗りこむみたいなことやめろよ！危うくマジで死ぬところだったよ！」

あん、俺がそんなことするわけじゃないか。まったく、イツセーは疑い深いな。親友の俺を疑うなんて。俺、泣いちまいそうだ。

「ちくしょうツー！もう少しで長年ウザイと感じていた害虫が死ぬところだったのにツー！まあいい、またのきかいで死なせてやるぜツー！」

「今思ってることと言ってることがまったくの逆だろツー！超穩やかな顔しるのに言ってることが残酷だから余計傷ついたわツー！てか、どっちなんだよ本心！！」

アン？そらぁ・・・

「口に出したほうじゃね？」

「余計悪いわばかたれええええ——ツー！！」

そういつてOrz状態で泣き出すイツセー。なんだよ、ようやく自分の存在価値がわかったのかよ。まったく、気づくの遅いぜ。おまえはいるだけで悪影響を及ぼすんだからな。

すると右から人の気配を感じた。振り向いてみるとそこにはチビスケが。

「なんだ？チビスケ。なんかようか？」

「・・・本道先輩、イツセー先輩に容赦ないですね」

「容赦？あれぐらいでイツセーが凹むかよ。ましてや泣き出すなんて」

「そうそう、あの程度今までに比べたら屁でもないだろうに。アイツ、いじられ検定「10級」の持ち主だからな。」

「・・・思いつきり泣いてるように見えるんで――」

「ちがう、アレは全部汗だ」

「・・・汗、なんですか？思い切り『うわああん』って言うてるように聞こえるんですけど・・・」

「それは気のせいだ。イツセーはあの程度で泣くようなヤワな奴にしつけ――、じゃないな。ヤワな奴じゃない!!」

「今、躑つていいかけましたよね？」

「気のせいだ」

「いやでも――」

「全部気のせいだ」

「・・・は、はい」

ふうー、どうやら納得してもらえたようだ。まったく、理解してもらうのも大変だ。ん？さつきから考え込んでたリアス嬢が話し出した。

「イッセー」

「は、はい」

「依頼者がいる以上、待たせるわけにはいかないわ。イッセー！」

「はい！」

「前代未聞だけれど、足で直接現場へ行ってちょうだい」

「あ、足！？」

そ、その手があったああああ！！やべえよ！ウチの主、マジ天才だよ！

「ええ、チラシ配りと同様に移動して、依頼者宅へ赴くのよ。仕方がないわ。魔力がないんだもの。足りないものはほかの部分で補いなさい」

「チャリですか！？チャリでお宅訪問！？そんな悪魔存在するんですか！？」

ビシッ。

無言でチビスケと俺が指を指す。もちろん俺は中指を。

「ほら、いきなさい！契約を取るのが悪魔のお仕事！人間を待たせてはダメよ！」

そついつてまた汗をながしながら、

「う、うわああああん！がんばりますううう！」

部室をダッシュで出て行った。

「「「・・・・・・・・・・」」」

無言。静寂がこの教室に訪れる。イツセーが走り去って一分。この静寂は継続されていた。うん、なんか空気がね。

「う、うん。気を取り直して、進。貴方のもしましょう」

といってくる部長さん。え？マジで？あの事故の直後に俺しなきゃならんの？ど、どうにかして回避しなくては・・・

「あ、あ〜〜・・・・・・・・、部長さん。」

「なにかしら？」

「いやその、な？今、しないとダメか？」

「正当な理由があるのなら、別にかまわないけど。可能ならしてもらいたいわ」

くっ……、正当な理由だと？んなもんあるのか？否！諦めるな！頭の中の何色か知らない細胞をフル稼働すればなんとかなる……はっ！閃いた！

「実は、俺まだこの体に慣れてなくてな、それでまだ俺も走っていきたくないぁーと」

「なれてない？どういうことかしら？体に不具合でも？」

「いや、そうじゃなくてな。ただ単に、悪魔になったから身体能力があがったろ？もとが異常だったからさらに異常になっちまってまだ加減がよくわからないんだ。そうだから俺もイツセーのように自分の足でいきたいんだよ。自分の体の具合をみながらさ」

「ああ、そういうこと。……まあそういうことならわかったわ。じゃあ、足でいつてきてちょうだい」

よし！回避したぜ！いやぁー危なかったなぁー。さすがは俺の何色かわからない脳細胞だ。

「けど、また同じように準備するのも面倒だから、今回は魔法陣でいつてちょうだい」

回避できませんでしたぁー（笑）

「朱乃、準備して」

「はい、わかりました。進くん、少し待ってて下さいね」

「・・・はい」

結局こうなるのか、GOD。天を仰いでいると隣にいたチビスケがしゃべりかけてきた。よく喋るなコイツ。

「・・・先輩、優しいんですね」

HAHAHAHA、何を言ってるのだろうか、このチビスケは。

「おまえ、今すぐ脳外科が眼科いつてこい。どこをどうみたら優しいになるだよ」

「だって、さっきのイツセー先輩の事を気遣ったの事じゃ」

「・・・」

この子、よくわからんこだなあ・・・。俺は一ミリもそんな事思っ
てないんだが・・・。ほ、本当だからな！

「・・・違うんですか？」

その言葉に軽く微笑んでそしてこう答えた。

「それこそ気のせいだ」

そう言って、魔法陣の中央に歩いていった。

悪魔（のしもべ）始めました！汗と気のせい！（後書き）

とまあ、こんな感じ。小猫ってこんな感じだったか？次回はあれです。契約ですよ。フツ・・・なめるなよ？うちの進が！普通な事ができると思うなよ！

途中経過は

朱乃 ゼノヴィア 六票

オフィス 黒歌 小猫 五票

ロスヴァイセ イリナ 二票

九重 ソーナ 一票

コートの名前ですが、能力がわからないから答えにくい、という意味を貰いましたからしばらく保留にします。能力がわかった時にまた募集します。

悪魔（のしもべ）始めました〜ドアと茶菓子〜（前書き）

さて、更新です。

言い訳はただ一つ、勉強とギャルゲに夢中になっていただけ。いやだってね？「失われた未来を求めて」だよ？激おもしろいんですけどッ！！そして一番の魅力はグラフィックですっ！！皆さんもこのまま携帯で画像検索してみてください。ここまできれいなのみたことないよ……

悪魔(のしもべ)始めました〜ドアと茶菓子〜

「みーつめるCAT'S EYE! magic is play
dancing! 緑色にひかぁーるー!」

知ってたかい? この曲、発売から五週連続でオリコンチャート一位
取り続けて、最後には甲子園のテーマソングになったらしいぜ? マ
ジパネエな。ま、俺は『city hunter』の方が好きだが
な。十トンハンマアアアア——ツ!!!!!!

まあ、こんな感じでノリノリで名曲を歌いながら契約待ちの人間の
所に『CAT'S EYE』の人たちがやっていたように屋根の上
を走ってるのよ。あ、ちなみに歌い方としては・・・そうだな、『
キューティーハニー』を歌う諏訪?さん風』だな。まあ、ニコニコに
あがってるからみて見なされ、腹筋が捻れ狂うから。そっぴやタグ
に、『我が腹筋、捻れ狂う』ってかいたっけな。

あん?なんでワープしなかったんだって? いやだって、なあ? あん
な事故があった後じゃ呪われてるかもしれないだろ? ワープしたら、
イツセー菌が体内に入って、『おっ? い症候群』がでるかもしれないな
いだろ? やだよ、そんなのやだよ! だからとりあえず登録だけして、
風のように逃げたのさ。

とまあ、こんな経緯から絶賛スーパーボール状態なわけだが、目的
地までが案外遠いんだよな。最短ルートからなのにあと五分はこう
してないといけないようだ。はあ・・・たりなあー・・・

「ここ、か・・・」

走ること15分、ようやく到着した。五階建てのマンションだ。手元の機械にはこの四階をしめしている。そこに依頼者がいるわけだが、まったく、この俺にこんなことさせやがって。何様のつもりだよ。とりあえず床がへこむくらい土下座させんぞこら。

「はぁ・・・ダルいな」

そういつて俺はマンションのフロントの方へと向かう。ひろいロビ―を通り過ぎ、そのままエレベーターへ。

「四階と・・・」

エレベーターにのり、ボタンを押した後、壁に寄りかかる。するとエレベーターが動き出し、上へと向かっていった。

「・・・」

エレベーターから降りて先ほど確認した部屋の前に立つ。一応へんてこ機械で確認したからまず間違いはないと思う。まあ、間違っても、今は仕事中だから依頼者以外の人間には認識されないわけだから大丈夫なんだがな。

「この場合、普通ならピンポンなんだけどな」

コンコン

ドアをノックする。いやなんでもノックしないといけないらしいんだよな。理由は、知らないけど部長が念を押されて言われた事なんだよ。

「・・・・・・・・・・？」

ノックして十数秒、一向に人が出てくる気配がない。アレ？おかしいな？電気がついてるし。場所も間違いないはずなんだが・・・

「すみませーん！悪魔グレモリーの使い魔なんスけど、召喚した家ツスか？」

ノックと交えて言う。だが、一向に出てくる気配がない。・・・・・・・・なんか、腹立ってきたな。俺は人をムシるのは好きだが、ムシられるのは大嫌いなんだよ！だが、俺は大人だ。まだこの程度怒るわけがない。

「オラッ！！！」

怒ってはいないが、イライラした腹いせにドアを蹴破るくらいはしちゃってもかまわないだろ？

「あ、あーッ！！ド、ドアがッ！？」

すると、ドアの向こう部屋の住人らしき人がドアの惨劇をみて駆け寄ってくる。いや、加減したから壊れたないって。鍵をかける機能以外わ。

「お、おま、おまえ何してるんだよ！？」

俺を確認するやいなや突っかかってくる村人A。

「いや、ノックをあろう事かこの俺が二回もしてやったのに、一向に出てこなかったから蹴破って差し上げたのですがなにか？」

「色々ツツコミ所はあるけど、まず君の沸点の低さにビックリだよ！？あと、その超上から目線がスッゲー腹立つ！！」

「チツ・・・うるさい奴だな。ドアを蹴破ってやったのに感謝の言葉もないのか？いったいどういう教育を受けてきたんだ？」

「そらこつちのセリフだよ！人の家のドアを蹴破ってるのにまったく反省の色がみえない！！誰のせいでドアが壊れたと思ってるんだよ！？」

「あんただろ？」

「全部おまえのせいだよ！！」

とまあ色々、ギャーギャー騒いでしまったせいで、ほかの住人から苦情がくるのを避けるために家の中にあがってやった。

「おい、村人B。おまえは客人に茶も出さないのか？ふざけるのも対外にしろよ？」

「お前こそ対外にしろよッ！！俺、人生ではじめてここまで上から目線な奴と会話したよ！！」

「そうか、それはめでたいな。おい、日本酒を用意しろ。俺としては松の司が飲みたい」

「誰も感謝なんてしてねえよ！！つか、何気に要求があがってる！？」

まったく、どうしてそうやって騒ぐんだ。俺はこんなにも落ち着いてるのに。

「それで？あんたは何者なんだよ？」

と言いながらお茶をだしてくる、モブキャラC。まったく、早く出せつての。

「だから、悪魔だって。あんたさっきチラシ使ったろ？それできたんだよ・・・ズズ」

・・・まずい。安物だな。風味の欠片もない。ただの色の付いた水だ。いや、水というか、あえていうなら緑色の泥水だ。

「う、うそだ！？おまえみたいな奴が悪魔なわけ・・・あれ？なんでか否定できない！？なんか悪魔ってこんな感じかもって思ってたう！？・・・と、とにかく！！俺の知ってる悪魔じゃない！！悪魔ならチラシを使ったらすぐにくるはずだし、それに俺が呼んだのは小猫ちゃんだ！」

こいつ、遠まわしに俺が悪魔みたいな性格だっていいたいのか？

「今回が俺のはじめての仕事だから、無理言って徒歩できたんだよ。それにあのチビスケは人気らしくて、今日は代役で来た。おら、わ

かつたらとつと願いを言え。あと茶菓子だせ」

「迷惑極まりないからとつと帰ってくれ！！それが俺の願いだ！！」

「その願いは却下だ。そんな事は契約したら叶うから違う願いにしろ。あと、茶菓子」

「何でおまえが願い事を選んでるんだよ！？ふつつ逆だろ！？あとでないよ！！」

なんだと！？茶菓子が出せないっていうのか！？ふざけんな！！茶菓子目当てでここまできたのに・・・

「じゃあとつと願いいえやコラッ！！シバくぞワレッ！！」

「茶菓子がでないってだけでそこまでおこるなよッ！！厚かましいんだよッ！！」

「んなことねえよッ！！子供の頃はな、近所のおばあちゃんから『進くんはいつもなにかせがんでくるわねえ』ってよくいわれたんだぞッ！？」

「間違いなくそれは厚かましい行為ですッ！！」

「んなことどうでもいいからとつと願い事言えッ！！」

「チッ・・・わかったよ！！ちよつと待ってる！！」

そう言つてイスに座りながら考え出す通行人Z。いやしかし、なかない家にすんでやがる。2LDKぐらいあるぞ？

「じゃ、じゃあハーレ・・・」

「却下」

「即答ッ！？つかなぜに俺の願い拒否られてんのッ！？」

「いや、俺が個人的に嫌だから。あと同じ理由で金持ちも却下」

「なんでだよッ！！なんでおまえに俺の願いを選ばせないといけな
いんだよッ！！」

「ここでは俺がルールだ。解ったか？使い捨てキャラ」

いまだ名前もでていないじゃないか。

「あんたホント容赦ないなッ！？てかおかしくないッ！？ふつうな
立場逆じゃないッ！？願いを叶えるためにきたんじゃないのかよ
ッ！？」

「俺、他人が幸せになる願いは叶えない主義なんで」

「じゃここにきている意味ないじゃないかッ！？」

「意味ならあるぞ？アンタみたいな奴のリアクションみて楽しんで
る」

「もう、なんもいえない・・・」

それから10分。被害者Aからでてくる願いを却下し続けていた。そしたらさすがに泣き出して

「じゃあなになら叶えてくれるの?」

と言ってきた。

「アン?俺がきめていいのか?」

「ぶっちゃけ、なんでもいいからとつとかえってほしい・・・」

まったく、困った依頼者だな。優柔不断にもほどがあるな。

「そうだな・・・明日、髪がレインボーカラーになるとかは?」

「不自然すぎるわッ!!何ッ!!?朝になって鏡みたら自分の髪が七色になってるのッ!?!もう外にでれないよッ!!」

文句の多い奴だ。髪の色くらいかえたら名前だつて出てくるのに・・・。最悪でも『レインボーヘア』という称号がつくのだが。

「じゃあ・・・明日デートするとかは?」

「あ、まあそれなら・・・。あ、相手は?とびっきりの娘がいいんだが・・・」

興奮気味にいつてくる、レインボー（仮）

「ああ、まかせろ。とびっきりの・・・ブロッコリーとデートさせてやる」

「まじかよッ！？いやぁー楽しみだなぁー！俺、明日とびっきりのブロッコリーなんかとデートしてたまるかぁぁぁッ！！！！」

おお、すげーなコイツ・・・。流れるようにツッコミに変えたぞ？

「なんで、俺ブロッコリーなんかとデートしなくちゃならないのッ！？つか恐いわッ！！街中歩いてたら、片手にブロッコリーもった奴がチラチラとブロッコリーみて頬赤める奴がいたら恐怖で固まっちまうわッ！！」

「おまつ、世の中にはなぁッ！！キンチョールとデートして業務用ホッチキスを愛人に持つてる奴がいるんだぞッ！？それに比べたら、ブロッコリーなんてまだ植物だろうがッ！！まだまだだよッ！！」
「確かにましかもしれないけどそれでも十分おかしいからッ！！」

「うん、まあ、確かに・・・アイツおかしいわ」

・・・イッセー、はつきり言おう。一般常識的におまえはおかしいという事が今判明された。

「しかし、だとしたら俺からの考えはもうないぞ？どうするんだ？」

「二つだけ！？それも髪の色かえるのとブロッコリーとデートする

の二つだけッ!？」

「俺の全力だ。もうなにもでない」

「ギャグ方向にはホントに全力でしたねッ!！」

そこから小一時間話し合った結果、『明日の仕事が休みになる』にきまった。理由はなんか疲れたかららしいんだが……。まったく、最近の若者は脆いな。ただ仕事しただけで疲れるなんて。

「んじゃま、契約ありがとさんと。そんじゃ、お暇させていただきやす」

「・・・・・・・・」

なんか、契約し終わった後からずっとソファでぐったりとしているんだが。なんかあったのか？ まあいいや。そのまま玄関に向かい靴をはく。さつき鍵をぶっ壊したドアノブに手をかけて外にしようとしたとき、大事な事を言っただけを思い出した。これだけは言っておかないとな。

「次はちゃんとお茶と茶菓子用意しとけよ。じゃあな」

それだけ告げてエレベーターの方に歩いていく。途中で「二度と呼ぶかクソボケエエエ——ッ!！」って聞こえたが、どこかで夫婦喧嘩でもしているのだろうか？ まったく、時刻を考えてくれ。はた迷惑だな。

そのままエレベーターに乗り、一階を選択し、ロビーを通り過ぎて自動ドアから出た所で呟いた

「はぁ・・・前途多難だな・・・」

そういつて俺は、来たときと同様に、CAT・S EYEを歌いながら帰ることにした。

「・・・」

次の日の放課後。部長が怒っていた。いやそらぁもう怒っていた。なんだ？あれの日か？

「2人して前代未聞だよ」

とモヤシが苦笑しながら言ってくる。

「・・・まず、イツセー？」

うわぁーおー、コワイー・・・

「はい！」

「依頼者と漫画のことを語って、それからどうしたのかしら？契約は？」

そう、イツセーは契約をとらず、ずっとドラグ・ソボールを依頼者と語っていたらしい。なんか楽しそうだな。

「け、契約は破談です……。あ、朝まで依頼者の森沢さんと、とある漫画のバトルごっこをして過ごしてしました!」

「バトルごっこ?」

「は、はい!ま、漫画のキャラを演じて、お互い空想の戦いを繰り広げる行為です!」

え?嘘だろ?その年でごっこ遊びしてたのか?……………何もないぜ。

「じ、自分でも高校生として恥ずかしい——いえ、いち悪魔として恥ずかしいと思えてなりません!は、反省はしてます!すみませんでした!」

……。けど、楽しそうだな、ごっこ遊び。久々にしたいな。

「……。契約後、例のチラシにアンケートを書いてもらうことになっているの。依頼者の方に『悪魔との契約はいかがでしたか?』って。チラシに書かれたアンケートはこの紙に表示されるわけだけど……」

ほう、だったら俺の方にも書かれてるはずだが、まあ悪くない評価だろうな。相手は泣いて頼んでたし。

「……。楽しかった。こんなに楽しかったのは初めてです。イツセーきんとはまた会いたいです。次はいい契約をしたいと思います」
……。これ、依頼者さんからのアンケートよ」

おう。なかなか胸を打ついい話じゃないか。やっぱりイツセーには不思議な魅力があるよな。

「こんなアンケート、初めてだわ。ちょっと、私もどうしていいかわからなかったの。だから、少しイツセーに対する反応に困っていたの。ごめんなさい」

「悪魔にとって大切なことは召喚してくれた人間との確実な契約よ。そして代価をもらう。そうやって悪魔は永い間存在してきたの。・・・今回のイツセーのけんは、私も初めてでどうしたらいいかわからないわ。悪魔としては失格なんでしょうけれど、依頼者は喜んでくれた。・・・」

と、さっきまで困り顔をしていた部長が笑みを浮かべる。

「でも、面白いわ。それだけは確実ね。イツセー、あなたは前代未聞尽くめだけれど、とても面白い子ね。意外性ナンバー1の悪魔なのかもしれないわ。けれど、基本のことは守ってね。依頼者と契約を結び、願いを叶え、代価をもらう。いいわね？」

「はい！がんばります！」

とかなり気合いをいれて言い放つイツセー。まあがんばれよ。

「さて、次は。・・・進なんだけれど。・・・」

とさっきまでの笑みを消し、また困り顔で話し出すリアス嬢。ん？俺なんかしたっけ？

「イッサーとは逆にちゃんと契約をとってきたわね。まあお願いとしては低いレベルの願いだったから、代価もたいしたものじゃなかったけど、一回目としてなら及第点よ」

「あ、ああ・・・そらどうも」

と、褒めて？くれているはずなんだが、なぜまた困り顔してるんだ？

「ただ、アンケートがね？私もいまいち意味が解らないのよ」

「なんて書いてあったんだ？」

「・・・ただひとこと、『悪魔のような奴だった』ってね」

「・・・」

え？なに？そら悪魔だけどさ、なんでアンケートにそれを書くんだ？意味がわからんぞ？

「進？とりあえず、昨日の契約の話聞かせてちょうだい」

「ん？ああ、了解」

といて説明をするが、結局わからずじまいだった。だって俺、普通に玄関から入って、普通に会話して、普通に契約して、普通に帰ってきたっただけだ。どこにもおかしな点なんてない。

「進？お話って何をはなしたの？」

「アン？いつも通りにだぜ？適当に思いついた事をポンポンと。チ

ビスケが来れなかった理由とか、俺が新人だって話ぐらいだよ」

「そう・・・変ね？話を聞く限りおかしい点なんてないのだけれど？」

ホントに何でなんだろうな？

悪魔（のしもべ）始めました〜ドアと茶菓子〜（後書き）

とまあ、横暴性が非常に高かったな、今話・・・

進ってギャグパートでホントにヒドいと書いてて感じたよ（笑）

しかし、俺の書いてる作品のギャグはおもしろいのか？ほとんど思いつきでかいてるんだが・・・まあ、ぶっちゃけ思いつきで書いてるようなもんだよな。

アンケートの途中経過はかわらずです。いや、ハーレムになぜか三票入ってたな？今、ヒロインの人数でまた悩んでいます。やっぱり三人はちよつと・・・

悪魔（のしもべ）始めました〜駒と特性〜（前書き）

とまあ更新なのです、はい。

・・・暑い。なんだよ、この暑さッ！！節電しろって世間で言われてるが、あまりの暑さにクーラーをオール完備しちゃってるよッ！！節電する前に太陽の光をどうにかしてくれ・・・。ジメジメした暑さが一番堪える

あと、今話はギャグ控えめ。それじゃどうぞ。

悪魔（のしもべ）始めました〜駒と特性〜

「二度と教会に近づいちゃダメよ」

俺やイツセーが本格的に悪魔稼業を開始して数日がたったある日の夜。とてつもなく立腹な様子の部長がイツセーに言い放つ。

なんでも、イツセーは今日の昼頃に教会の関係者の人と会ったらしく、危うくその人に連れられて教会に入るところだったらしい。んで、その事を部長さんに話したら大変お怒りになられているのでありますよ。

「教会は私たち悪魔にとって敵地。踏み込めばそれだけで神側と悪魔側の間で問題になるわ。今回はあちらもシスターを送ってあげたあなたの厚意を素直に受け止めてくれたみたいだけど、天使たちはいつも監視しているわ。いつ、光の槍がとんでくるかわからなかったのよ？」

とかなり怒気をはらませていうリアス嬢。てか、物騒だな。近づいただけで即ドンパチか？みなさん、カルシウム足りてますか？

「教会の関係者にも関わってはダメよ。特に『悪魔払い』は我々の仇敵。神の祝福をうけた彼らの力は私たちを滅ぼせるほどよ。神器所有者が悪魔払いなら尚更。もう、それは死と隣り合わせのと同義だわ。イツセー」

「は、はい」

おー、おっかな。眼力がスッゲー強い。ま、それだけ真剣にイツセ

ーを心配してくれてるってことなんだろうけどさ。つか、俺も気を
つけないとな。

「人間としての死は悪魔への転生で免れるかもしれない。けれど、
悪魔払いを受けた悪魔は完全に消滅する。無に帰すの。――無。
何もなく、何も感じず、何も出来ない。それがどれだけのことがあ
なたはわかる？」

・・・いやいや、無って言われてもわからんて。死ぬのとなんか違
いがあるのか？まあ、理由を言われても俺の頭のスペックじゃ理解
は無理だな。

「ゴメンなさい。熱くなりすぎたわね。とにかく、今後は気をつけ
てちょうだい。・・・進もよ」

「はい」

「うえ~~~~~い」

とまあ、要約すると教会には某『幸せを幸せと感ずることのできな
い外道麻婆神父』がいるから近づくってことか？え？違う？だっ
たら、『超絶毒舌シスター』がいるからか？え？違う？じゃあ、誰
がいるんだよ？金ピカか？青タイツか？てか、神父キャラってラス
ボス的なキャラが多いなあー・・・

「あらあら。お説教はすみしましたか？」

「おわっ」

と、さっきこつそり（↑俺からしたらバレバレだった）入ってイ

ツセーの背後をとっていた黒ポニーが話し出す。

「朱乃、どうかしたの？」

という部長さんの問いかけに少し顔を曇らながら黒ポニーが言う。

「討伐の依頼が大公から届きました」

はぐれ悪魔。

そついった存在があるらしい。爵位持ちの悪魔に下僕にしてもらった者が、主を裏切り、または主を殺して主なしとなる事件が極稀にあるとかないとか。

んで、そついった野良犬による被害を最小限に抑えるために、見つけだして、主人、もしくは他の悪魔が消滅させるのがルールなんだと。

これは、天使や堕天使側でも言われてることらしくてはぐれ悪魔がいたらみつけないで殺すんだとさ。

まあ、野良犬を野放しにするってのは良くないことだしな。

というわけで、我々オカルト研究部一同。町外れの廃屋近くにきておりまーす！！テンション高くなって？いや、ただでさえ暗いのにさらに暗くしてどうするんだよ。

なんでも、ここで毎晩はぐれ悪魔が人間をおびき寄せて食ってるら

しいぜ？そうか、悪魔の主食は人間なのか、あるあ・・・ねえよ。

「リアス・グレモリーの活動領域内に逃げ込んだため、始末してほしい」っていうのがお偉いさんから届いたもんだから、こうしてクエストを受託して目的地へ向かっているとです。

時刻は深夜。辺りには背の高い草木が生い茂っていて、そのさきに廃屋が見える。夜でも目がきくのが悪魔なんだとさ。

「・・・血の臭いがひでえな」

「・・・はい」

そうさつきから廃屋に近づくと、血の臭いが強くなっていく。隣にいたチビスケは制服の袖で鼻を覆っている。臭いのキツさからして、一人二人が犠牲になったわけじゃないな。

そして、もう一つ。近づくたびに強くなってるものがある。それは周囲に満ちている殺気と敵意だ。まあ、イツセー以外のメンツからしたらこれくらい普通みたいらしいがな。俺？この程度、そよ風より優しく感じるよ。伊達に毎度毎度親父に殺されかけてないよ。

「イツセー、進。2人にはちょうどいい機会だから悪魔としての戦いを経験しなさい」

その部長の一言に少し驚く。まさかいきなり戦わせるとは。

「いやいや、リアス嬢。俺はともかく、イツセーにはちょっとまだ早いだろ。さすがに無理がある」

「まあ、確かにね。進は大丈夫でもイツセーにはまだ無理ね」

「いやいや、そんなバツサリ言ってやるなよ、傷ついてるぞイツセー・

「でも、悪魔の戦闘を見ることはできるわ。今日2人には私たちの戦闘をよく見ておきなさい。そうね、ついでに下僕の特性を説明してあげるわ」

「下僕の特性？説明？」

「怪訝そうな表情を浮かべながらイツセーが部長を見る。うん？どういう意味だ？」

「主となる悪魔は、下僕となる存在に特性を授けるの。・・・そうね、頃合だし、悪魔の歴史を含めてその辺を教えてあげるわ」

「そういつて俺とイツセーに現在の悪魔の状況を説明し始める。」

「大昔、我々悪魔と堕天使、そして天使を率いる神は三つ巴の大きな戦争をしたの。大軍勢を率いて、どの勢力も永久とも思える期間、争い合ったわ。その結果、どの勢力も酷く疲弊し、勝利する者もないまま、戦争は数百年前に終結したの」

部長さんの言葉にモヤシが続ける。

「悪魔側も大きな打撃を受けてしまった。二十、三十もの軍団を率いていた爵位を持った大悪魔の方々も部下の大半を長い戦争で失ってしまったんだ。もはや、軍団を保てないほどにね」

次に黒ポニーが口を開ける。

「純粋な悪魔はそのときに多く亡くなったと聞きます。しかし、戦争は終わっても、堕天使、神との睨み合いは現在でも続いています。いくら、堕天使側も神側も部下の大半を失ったとはいえ、少しでも隙を見せれば危うくなります」

「そこで悪魔は少数精鋭の制度を取ることにしたの。それが『悪魔の駒』——」

部長の話で気になる単語が出る。

「イーヴィル・ピース？」

イツセーも疑問に思ったらしく、部長に聞いている。

「なんスか、それ？」

「爵位を持った悪魔は人間界のボードゲーム『チェス』の特性を下僕悪魔に取り入れたの。下僕となる悪魔の多くが人間からの転生者だからって皮肉を込めてね。それ以前から悪魔の世界でもチェスは流行っていたわけだれど。それは置いておくとして。主となる悪魔が『王』。私たちの間で言うなら私のことね。そして、そこから『女王』、『騎士』、『戦車』、『僧侶』、『兵士』と五つの特性を作り出したわ。軍団を持てなくなった代わりに少数の下僕に強大な力を分け与えることにしたのよ。この制度をできたのはここ数百年のことなのだけれど、これが意外にも爵位持ちの悪魔に好評なのよね」

「好評？チェスのルールでか？」

「競うようになったのよ。『私の騎士は強いわ!』、『いえ、私の戦車のほうが使える!』って。その結果、チェスのように実際のゲームを、下僕を使って上級悪魔同士で行うようになったのよ。駒を生きて動く大掛かりなチェスね。私たちは『レーティングゲーム』と呼んでいるけれど。どちらにしても、このゲームが悪魔の間では大流行。今では大会も行われているくらいだわ。駒の強さ、ゲームの強さが悪魔の地位、爵位に影響するほどにね。『駒集め』と称して、優秀な人間を自分の手駒にするのも最近流行っているわ。優秀な下僕はステータスになるから」

「……きにいらねえな。つまり、お偉いさんの娯楽のために人生狂わされる奴が出てきちゃうってことかよ。そんなに自分の栄誉や評価が大切かよ。」

「そのゲームにはもう部長たちは出たりしてるんですか?」
とイッセーが部長に向けて質問をぶつける。

「私はまだ成熟した悪魔ではないから、公式な大会などには出場できない。ゲームをするとしても色々な条件をクリアしないとプレイできないわ。つまり、とうぶんはイッセーや進、ここにいる私の下僕がゲームをすることはないってことね」

「じゃあ、木場たちもそのゲームをしたことはないってことか?」

「うん」

イッセー達のやりとりを横目に、俺は臨戦態勢に入っていた。そう、さっきまで満ちていた殺気がこちらに凝縮されたのを感じたからだ。

「部長、俺の駒は、役割や特性って何ですか？」

・・・そっぴゃ、特性やら役割やらなんか言っていたな。けどないッセー。

「イツセー、その話は後っぴいぞ？ やっこさん・・・ようやく出てきたぜ？」

「——ッ！？」

凝縮された殺気がさらに深さを増す。どうやらイツセーも感じ取ったようだ。まあ、ここまで敵意剥き出しにしてるのに気づかない方がおかしいが。そして、何かの気配が近づいてくる。

「不味そうな臭いがするぞ？ でも美味そうな臭いもするぞ？ 甘いのかな？ 苦いのかな？」

・・・なんかイライラする声色だ。今すぐ相手の喉を潰したくなるぐらい嫌な声だよ。

「はぐれ悪魔バイザー。あなたを消滅しにきたわ」

部長が声を高らかに言い放つ。すると——、

ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタ・・・
・・・

とても人間がだすような声じゃないモノが聞こえてくる。・・・さらに腹が立つな。人語を話せ、人語を。

暗がりから姿をゆつくりと何かが現れる。・・・上半身裸の女だ。少し、目を凝らしてみる。するとそこには下半身が獣の体をしていた。上が女で下がバケモノ・・・、とりあえず、整形してこい。んななりしてたらず間違いない男はよってこねえよ。

さらに細かくみてみると、両手には獲物としての槍が一本ずつ、下半身は四本足があり、すべて太く、爪も鋭い。尾には蛇が見える。ん？蛇は独立して動くのか？大きさも五メートルは軽くなる。うん、真正正銘の『見た目バケモノ』だ。よし、見た目バケモノ賞をやるう。てか、ようやく悪魔っぽいのが出て来たな。

「主のもとを逃げ、己の欲求を満たすためだけに暴れまわるのは万死に値するわ。グレモリー公爵の名において、あなたを消し飛ばしてあげるわ！」

「ごさかしいい！小娘ごときがああ！その紅の髪のように、おまえの身を鮮血で染め上げてやるわああああ！」

中2病& a m p ;死亡フラグ乙

「雑魚ほど洒落のきいたセリフを吐くものね。裕斗！」

「はい！」

部長の呼びかけでモヤシが飛び出す。おー、なかなか速い。

「イッセー、進。さっきの話の続きをするわ」

話？特性がどうってやつか？

「裕斗の役割は『騎士』、特性はスピード。『騎士』となったものは速度が増すの」

部長の言うとおり、モヤシの動きは徐々に速くなる。うん、結構速いな。俺といい勝負ができる、か？てか、野良犬の方よ。ただ振り回してるだけじゃねえか。槍の使い方がなっちゃんないぜ？双槍よりまずナイフで刃物の使い方から習い直してこい。んな使い方じゃ、まずあたらねえよ。

「そして、裕斗の最大の武器は剣」

そして、足を止めたモヤシの手には鞘に収まった西洋剣が握られていた。ん？なんかいきなり剣が出てこなかったか？あれも魔法か？モヤシはそのまま剣を鞘から抜く。そして、再び走り出す。そして敵が認識するよりも速く、両腕を切り落とした。

「ギアアアアアアアアアアっ！！」

敵の悲鳴が木霊し、両腕から鮮血が飛び散る。

「これが裕斗の力。目では捉えきれない速力と、達人級の剣さばき。ふたつが合わさること、あの子は最速のナイトとなれるの」

確かに、剣はちとかじったぐらいはあるが、あのモヤシの腕はかなりののだというのはわかる。間違いなく、剣じゃ上手だよ、あのモヤシ。

悲鳴を上げるバケモノの足下にはいつの間にもやらチビスケが立っている。なんかユラユラとでてったが大丈夫か？

「次は小猫。あの子は『戦車』。戦車の特性は――」

「小虫めええええつつ！！」

その言葉と同時に、野良犬はチビスケを踏み潰しにかかる。しかし、バケモノの足は地面につくことはなく、チビスケに全衝撃を受け止められた。え？マジで？あのチビスケがか？

「『戦車』の特性はシンプル。バカげた力。屈強なまでの防御力。無駄よ。あんな悪魔の踏みつけたぐらいでは小猫は沈まない。潰せないわ」

ん？今なんて？バカげた力？屈強なまでの防御力？ま、まさか……俺って……。

グンツ！！

完全にバケモノの足を持ち上げてどかすチビスケ。

「……ふっ飛べ」

チビスケは空高くジャンプし、バケモノの腹に拳を撃ち込む。拳の威力にバケモノの体が後方に吹き飛ぶ。

いーパンチしてるなあ……。みなさん、今日のチビスケのは薄めの水色だぞ。うん、ロリコンなら感激で泣いていたろっな。俺？残念ながらリアルには興味なしだ。

「最後に朱乃ね」

「はい、部長。あらあら、どうしようかしら」

黒ポニーが笑みを浮かべながら、さっきの一撃で倒れこんでいるバケモノのもとへ歩みだす。

「朱乃は『女王』。私の次に強い最強の者。『兵士』、『騎手』、『僧侶』、『戦車』、すべての力を兼ね備えた無敵の副部長よ」

「ぐうううう……」

近づいてきた黒ポニーを睨みつけるバケモノ。それをみてまた笑みを浮かべる。

「あらあら。まだ元気みたいですね？それなら、これはどうでしょうか？」

そういつて黒ポニーが天に向かって手をかざす。すると――

カッ！

文字通り、天からの一撃。バケモノに雷が落ちた。

「ガガガッガガガッガガッ！」

それを受けて苦悩な声をだすバケモノ。うわ、全身黒こげだ。……ロケット団かよ。

「あらあら。まだ元気そうね？まだまたいけそうですね」

カッ！

再び雷がうち下ろされる。いやい、もう瀕死じゃね？元気じゃなくね？

「ギヤアアアアッ！」

それを受け、また声をあげるバケモノ。これで終わったかと思っただけ、三発目が落下する。

「グアアアアアアッ！」

いやいやいや、やりすぎだろ。黒ポニー、ちょっと加減しようよ。ん？あいつ・・・うわあ、メッチャ楽しんでるよ。笑ってるし。

「朱乃は魔力を使った攻撃が得意なの。雷や氷、炎などの自然現象を魔力で起こす力ね。そして何よりも彼女は究極のSよ」

あ・・・なるほど。俺が感じてたのはそこか・・・。黒ポニーはお母様と同じで、DSなのか・・・。。俺、泣いちゃいそうだし・・・。

「普段、あんなにやさしいけれど、一旦戦闘となれば相手が敗北を認めても自分の興奮が収まるまで決して手を止めないわ」

えー・・・まじかよ。なんという自己中・・・。

「・・・うう、朱乃さん。俺、怖いっス」

たぶん、俺と同じでイッセーの頭の中ではお母様がでてるだろうな
あー……。二人してガキの頃、メツチャ怒られたから、もうトラ
ウマもんだよな……。

「怯える必要はないわ、イッセー。朱乃は味方にはとてもやさしい
人だから、問題ないわ。あなたのこともとてもかわいいと言ってい
たわ。今度甘えておあげなさい。きっとやさしく抱きしめてくれる
わよ」

「え？俺は？」

「進は……。まあ、敵とは認識はされてなかったはずよ？」

「いやいやッ！目をそらしてボソツというなよ！！怖いじゃねえかッ！

「うふふふふふ。どこまで私の雷に耐えられるかしらね？ねえ、
バケモノさん。まだ死んではダメよ？トドメは私の主なのですから。
オホホホホッ！」

……。もしかしたら、一歩間違えていたら、あそこでこんがりされ
てたのは俺だったかもしれないのか……

それから数分間、黒ポニーのSMショーが続いた。

黒ポニーが一息ついたのを確認したら部長が完全に戦意がなくなっ
たバケモノのもとへ歩き出す。そして、地面に突っ伏すバケモノに
向かって、部長は手をかざす。

「最後に言い残すことはあるかしら？」

おーう、慈悲深いねえー。

「殺せ」

バケモノの小さく声を発する。

「そう、なら消し飛びなさい」

すると、部長の低い、冷たい声音とともにどす黒い魔力の塊が手のひらから撃ち出される。塊はバケモノの全身を包み込み。そして、魔力が宙に消えたとき、バケモノの姿も完全に無かった。文字通り、塵も残らなかったな。

「終わりね。みんな、ご苦労さま」

やれやれ、全員がその気だったら、あんなの瞬殺できたらうに。わざわざ、わかりやすレクチャーするためになぶるとか、鬼畜すぎる。

しかし、これが悪魔の戦いね……。嬉しいね。コイツらみたいに強いがまだまだいっぱいいるなんてさ。ちょっと、期待したくなるな。

しかし、なんか忘れてる気がするんだが……。ああ、そうだ。

「部長さん、聞きそびれたんだが」

「何かしら？」

「俺やイツセーの駒・・・、下僕としての役割はなんなんだ？」

「あ、そうだったそうだった。部長、どうなんですか？」

思い出したようにイツセーも聞いてくる。しかし、なんとなく、予想はついてるんだが・・・

答えをまつ俺達に『紅髪の超絶美少女、リアス・グレモリー』（↑超棒読み）がハッキリ告げる。

「進。あなたは『戦車』よ。あなたには『戦車』の力をあげたわ」

ですよねえー（涙）ああ、日常生活が著しく困難になった理由が今説明されたよ・・・

「そして、イツセー。あなたは『兵士』よ」

俺の相方は、どうやら一番下っ端らしい。

悪魔（のしもべ）始めました〜駒と特性〜（後書き）

はい、今回はギャグが少なく戦闘しやしたね。まあ次回はクソ神父登場だツ！！・・・コトミじゃないよ？

一応、この小説の大まかな流れは考えているんですが、二巻のライザー編・・・考えついた話がまあひどい……。ライザーが、ね・・・まあ別にいいよね？だってリア充だもん？文字通り、リア充爆発させてやるよ？

アンケートは前から変化なしだ。あとやっぱりヒロインの人数を2人にします。コロコロ変えてすみません。

一巻の半分ぐらいで17話……。もう少し、頑張るか。あ、進の駒は『戦車』ですが、ロスヴァイセファンのみなさん、安心してください。大丈夫、ちゃんと眷属としてだしますから。どうやってかって？それは話が進んだらわかりますよ（笑）

悪魔(のしもべ)ははじめました〜神父とソフア〜 (前書き)

はい、更新です。

ちょっと私事でいそがしくて。

では、どうぞ。

悪魔（のしもべ）はじめました〜神父とソファ〜

「まずいわね・・・」

契約からかえった手前、我らがオカルト研究部の部室に俺、本道進が戻ってきて、ドアを開けて三步進んだときにリアス嬢が言った一言が耳に入る。

部室にはイツセーを除いたメンバーが少しピリピリした雰囲気をつけていた。

「？おい、部長さん。なんかあったのか？」

「ん？ああ、進。帰ったのね。無事でなによりよ」

リアス嬢の言葉に疑問が湧く。無事？なぜに体の心配をされてるんだ？

「そりゃあ、まあな。てか、なんだよ？危ない事でもあったのかよ？」

今回の契約もいつも通り、スーパーボール式移動術、『ハネハネ虫』を使って現地に向かつて、依頼者と契約、そのままスーパーボール式移動術、『跳ねます・・・超跳ねるでござるッ！』を使って帰ってきた。もう何度もしてきたことだから、ケガをするなんてことはないんだが・・・。ちなみに、俺が契約すると、毎回依頼者が泣してるか脱力しきってるかの2つなんだ。・・・なんでだろう？

「ええ、少しマズいことになったのよ。・・・朱乃、とりあえずあつちにいくわよ。魔法陣の準備を」

「はい、部長。小猫ちゃん、手伝ってくれるかしら？」

「・・・はい」

部長の指示で、なにやら準備を始める黒ボニーとチビスケ。ん？なんだなんだ？わけがわからんぞ？

「あのさ、部長さん。いったいなにがあつたんだ？」

「イツセーが襲われてるの」

「はあ？」

え？襲われてるで、誰に？。女にか？それともハードなゲイに？

「『悪魔払い』にだよ。」

と、いつの間にやら剣を携えたモヤシが立っていた。・・・いつ得物をとってきたんだよ・・・

「『悪魔払い』ってのは確か・・・、なんだったけ？」

すまん、スッポリ忘れた。さすがは俺の虹色の脳細胞。ご都合主義だなあ（笑）

「神や堕天使によって強力な力を与えられ、悪魔を滅ぼす存在、だよ」

「ああ、そうだったそうだった。サンキューモヤシ」

えっと、そいつらが今、イッセーを襲ってるわけだから……。

「ヤバイじゃん、イッセー危ないじゃん」

「だから焦ってるのよ」

部長さんが嘆息しながらいう。

「てか、よくわかったな。イッセーが襲われてるって」

エスパーですか？

「前回、前々回と。契約は破談になるけれど何故か依頼者の評価が抜群だったから、どうしてかしらと思って使い魔を使って確認してたの、そしたら——」

「『悪魔払い』が依頼者の家に待ち受けていたんだ」

部長とモヤシの懇切丁寧な説明で、俺とアイツにプライバシーがな
いことが判明した。俺たちに人権はないのか？

「しかしマズいわね。イッセー、大丈夫かしら……」

心配そうな顔をしているリアス嬢。モヤシも同様に、少し顔を強ば
らせる。

「まあ、大丈夫じゃね？イッセーだし」

「え？」俺の一言に意外そうな顔をするリアス嬢。いやいや、何故にんな面をする？」

「イツセーと俺の付き合いってさ、だいたい十年くらいなんだよ、その十年の中で俺が何回イツセーを殴ってると思う？」

「さ、さあ？あなたの事だから、軽く一万くらいは越えてるのじゃないかしら？でも、今それは関係ないんじゃない——」

「それがあるんだよ。俺、人を殴るとき無意識で急所を狙っちゃうんだ。後頭部とか顎とか、喉とかさ」

「とてつもなく迷惑な無意識だね」

そういわないでくれ、モヤシ。全部親父のせいなんだから。俺は悪くねえよ。

「それを十年近く受けてるイツセーはさ、俺と同じで無意識でよける。もしくは急所をはずすように動くようになっちまったんだよ」

「.....」

俺の言葉に絶句する二人。なをともいえない表情をしてるぜ。かまわず俺が続ける。

「おまけに体の耐久度も上がってるから。余程の力の差がなければすぐには殺されないだろ」

「そ、そう。なぜかしら、とてつもない説得力があるわ・・・」

「・・・同感です」

そのお陰で、アイツは良質なサンドバ・・・ゲフンゲフン。打たれ強くなったからよしとしようや。

「部長、準備が整いましたわ」

俺と部長、モヤシが話をしている間に準備が終わったらしい。教室の床にはかなりの大きさの魔法陣。

「ありがとう、朱乃。・・・みんな、あっちには『悪魔払い』がいるわ、戦闘になることは覚悟して。油断しないように！」

「・・・はい！」

俺以外のメンバーが返事をする。と、今度は部長が俺の方を向く。

「進、あなたは・・・」

「『残つとけ』とかいったら、今すぐその髪剃り落として、寺に出家させて尼さんにすっからな」

睨みながら答える。しばしの沈黙が俺と部長の間に流れる。と、先に口を開いたのは部長だ。

「・・・わかったわ。ただし、足手まといには――」

「なめんな、んな中途半端な実力じゃねえよッ!!」

にんまりと、いたずらをするガキのような笑みを作る。それをみた部長や他の連中も薄く笑みを作り、そして――

「――いくわよッ!?!」

「「「はいッ!?!」」」

「あいよッ!?!」

部長のかけ声とともに、全員魔法陣の上に乗った。

魔法陣による転移。一言で感想を述べるとしたら、文字通り『一瞬』だった。青白い光を強くはなっただと思ったら、次の瞬間には真っ暗な空間だぜ?ビックリだわ。うーん、暗がりによくわからんが、どうやらどっかの家の中らしい。

「す、進ッ!?!みんなッ!?!」

声が出た方を向く。そこには、俺達が現れた事に驚いている『ぼろ雑巾』が一枚。

「あん?なんだおまえ、イッセーか。ぼろ雑巾にみえたぜ?」

「兵藤くん、助けにきたよ」

俺とモヤシがイッセーに話しかける。まあ、生きてて何よりだよ。

「あらあら。これは大変ですわね」

「・・・神父」

そのチビスケの一言で周りを見渡す・・・いた。白髪の若い野郎だ。タメぐらいか？格好は神父みたいな格好だ。あと、美少年だ。あと、すぐ近くに金髪の美少女（この場合、清楚なかわいい系）のシスターがいた。

「ひゃっほう！悪魔の団体さんに一撃目！」

神父が斬り込んでくる。

ガキン！

金属音が鳴り響く。神父の一撃にモヤシが対応していた。

「悪いね。彼は僕らの仲間です！こんなところでやられてもらうわけにもいかないんだ！」

「おーおー！悪魔のくせに仲間意識バリバリバリューですか？悪魔戦隊デビルレンジャー！結集ですか？いいねえ。熱いねえ。萌えちゃうねえ！何かあい？キミが攻めで彼が受けとか？そういう感じなの？」

つばぜり合いを繰り広げながら、神父が舌をベロベロと出して、それプラス頭を揺らしていた。野郎・・・、なめやがって！

「・・・下品な口だ。とても神父とは思えない・・・。いや、だからこそ、『はぐれ悪魔払い』をやっているわけか」

「あいあい！下品でございますよ！サーセンね！だって、はぐれちゃったもん！追い出されちゃったもん！ていうか、ヴァチカンなんてクソくらえって気分だぜい！俺的に快樂悪魔狩りさえ気が向いたときにできれば満足満足大満足なんだよ、これがな！」

なおも続く斬り合い。つか、こいつ二チャンネルか？最近の神父はスゴいなあ……。

「一番やつかいなタイプだね、キミは。悪魔を狩ることだけが生き甲斐……僕たちにとって一番の有害だ」

「はあああ！？悪魔さまにはいわれたかないのよおお？俺だって精一杯一生懸命今日をいきてるの！てめえら、糞虫みてえな連中にどうこう言われる筋合いはねえぞんす！」

「悪魔だって、ルールはあります」

「え？あるの？」

微笑みながら言う黒ポニーだが、視線がするどあい。あと、俺の一言が原因かしらんが、チビスケにチョー睨まれてるっす。

「いいよ、その熱視線！お姉さん最ツ高ッ！！俺を殺そうって思いが伝わってくるよお！これは恋？違うねえ……、俺は思うよ。これは殺意！最高！これ最高！殺意は向けるのも向けられるのもたまらんねえッ！！」

あのネラー神父。ドMなのか？

「なら、消し飛ぶがいいわ」

声がした方をむくと我らが部長さんが、そこにツ！！となりにはイツセーがいた。・・・わ、忘れてた訳じゃないからな？

「イツセー、ゴメンなさいね。まさか、この依頼主のもとに『はぐれ悪魔払い』の者が訪れるなんて計算外だったの」

イツセーを謝る部長。俺も近寄り、話し掛ける。

「・・・イツセー、ケガしてないか？血の臭いがオマエからもするぞ？」

「え？ああ・・・足をな。すみません、その撃たれちゃって・・・」

半笑いで誤魔化そうとするイツセー。・・・いまなんつった？撃たれた？誰にだ？・・・アレにか？目の前のクソ神父にか？

「私のかわいい下僕をかわいがってくれたみたいね？」

—— 決まりだ。アイツの未来が決まりだ。いいぜ・・・久々にマジギレだ・・・俺のマジギレの責任をとらせるてやるよ。ああ、もちろん——

「はいはい。かわいがってあげましたよあ。本当は全身くまなくザクザク切り刻む予定でござんしたが、どうにも邪魔が入りまして、それは夢幻に——」

—— 半端な責任じゃねえがなツ！！

「死ね、クソ神父」

奴が話している途中で俺は飛び出す。奴が視認できないほどの速度で、相手に近づく。近づく中、右拳を握る。狙いはあのクソみたいな顔面だ。距離を詰めきる。間違いなく拳が届く距離まできた。そして、いままでの勢いをそのままに相手の左半身の方に左足を奴の足と一直線上になるように踏み込み、奴の顔面に拳を放つッ！！

ドゴンッ！！

自身の右が顔面にめり込む。もちろん、俺が放った拳の威力はその程度で収まるはずもなく。奴は体を後方へと吹き飛ぶ。そして、リビングの家具の一部にあたってとまる。

「おい、たてよクソ神父。手加減したから気絶はしてねえだろ？てめえは、ミジンコに生まれ変わった方が幸せだと思っぐらい殴ってやるよ」

「・・・・・・・・」

神父に反応はない。いまだに、壊れた家具の上で仰向けで倒れている。

「——ッ！！」

「——。」

後ろの方で、みんなが話しているようだ。けど、今の俺の頭の中には全然入ってこないが。

「・・・痛てえ・・・」

むくりと、首だけあげてくる。みると、鼻が変な形をしていて、鼻血がでている。口からも血がでているようだ。

「痛てえよ、痛てえよ！、痛てえよッ！クソッ！、クソクソクソッ！痛てえじゃねえか、クソ悪魔ッ！悪魔になんざに殴られちまうなんてなッ！！」

クソ神父は起き上がり、左側のホルスターみたいなのにしまってた銃を抜き、俺に向けてくる。

「決まりだッ！！オマエ、殺すッ！！俺がッ！！絶対ッ！！オマエを殺すッ！！」

その顔には憤怒の色が見える。いいぜ・・・、第二ラウンドと――

「進ッ！！」

「んだよ、部長ッ！！今からいい感じでやり合っただから邪魔を――」

「今すぐ魔法陣に入りなさいッ！！」

みると、すぐ後ろには青白く光る魔法陣が出現していた。どうやら退却らしい。チッ・・・これからだつてのにッ！！

「・・・わあつたよッ！！」

後方に大きくバックステップする俺。すると、剣を携えて斬り込ん

でくるクソ神父。

「逃がすかって!」

瞬間、俺の隣から大きな質量の物が飛んでいく。・・・ソファーだ。投げたのは・・・間違いなく、チビスケだな。

ソファーが薙ぎ払う頃には、俺たちは部室に転移していた。

なんか、俺。どんどん恨む相手増えてない？

悪魔（のしもべ）はじめました〜神父とソファ〜（後書き）

とまあ、ちょこつと主人公が活躍。書き終わって気づいたが、アシア一言も話してないよ・・・まあいつか。

さて、ようやく一巻の終わりまで近づいてきました。あ、ヒロインアンケートのやつは一応、一巻の終わり頃までを期限にしていますんで、まだの人はお急ぎを。

あと、3〜4話で一巻終わりかな？

さて、セイクリッドセブンみて寝るか。先週、オープニングとエンディングの曲が入れ替わって流れてた。・・・はじめまったく気づかなかったけど・・・

悪魔（のしもべ）始めました（魔力とコート）（前書き）

まじこいSのOP公開中ッ！！やべえ、テンションがあがってきた
ああああああああ——ッ！！！

自分的に、一番好きなヒロインはマルギッテだあああ——
——ッ！！！！！前作で攻略できなくてどれほど絶望したかあッ！！
わかるかッ！？わかる奴はいるかッ！？いたら返事をしてくれええ
えええ——ッ！！

悪魔（のしもべ）始めました。魔力とコート。

「悪魔被い（エクソシスト）は二通りあるわ」

さきほどの神父との一戦で負傷したイツセーの足の治療をしながら部長が話を始める。

「ひとつは神の祝福を受けた者たちが行う正規の悪魔払い。こちらは神や天使の力を借りて、悪魔を滅するの。そして、もうひとつ。

――『はぐれ悪魔払い』よ」

「はぐれ？」

イツセーの問いに部長が頷く。

「またはぐれか？ まったく、どこに行ってもそうだった集団の中で空気が読めない奴がいるもんなんだな」

苦笑混じりで俺が呟く。すると、部長が顔をこちらを向ける。

「ええ、あなたみたいに」

「うわ、辛辣・・・、泣くぞゴラ」

俺のプラスチックハートが割れちまいそうだ。落ち込む俺を放置して部長が続ける。

「悪魔払いは神の名のもとに魔を滅する聖なる儀式。だけれど、悪魔を殺すこと自体を楽しむようになるエクソシストがたまに現れる

の。悪魔を倒すことに生き甲斐や悦楽を覚えてしまった輩のこと。彼らは例外なく神側の教会から追放されるわ。もしくは、有害とみなされて裏で始末される」

「始末、ね。中々グロいことをする」

先ほどのようにまた苦笑がでる。なんか、一種の軍みたいだな。

「でも、生き延びるものもいる。そういう輩はどうなると思う？ 簡単よ。堕天使のもとへ走るの」

「堕天使って黒い翼のすよね？」

「ええ。堕天使も天から追放されたとはいえ、光の力——悪魔を滅する力を有しているわ。堕天使も先の戦争で仲間や部下の大半を失った。そこで彼らも私たちと同じように下僕を集めることにしたの」

そこで、俺もイツセーも気づいた。

「悪魔を殺したいエクソシストと悪魔が邪魔な堕天使は利害が一致したってことですね？」

「そうよ。『はぐれ悪魔払い』とはそういうこと。悪魔狩りにはまり込んだ危険なエクソシストたちが堕天使の加護を受けて悪魔と悪魔を召喚する人間へ牙をむいたのよ。さっきの少年神父はそれ。背後に堕天使がいる組織に属する『はぐれ悪魔払い』の者。正規の悪魔払いではなくても危険極まりないわ。いえ、リミッターがはずれている文、普通の悪魔払いよりも相当危ないわね。関わり合いになるのは私たちにとって得策ではないわ。イツセーの行った教会は神側ではなく、堕天使が支配しているもののような」

なるほどね。確かにあんなネラー神父がたくさんいる堕天使陣営に関わるのは危険だわな。まあ、俺としてはあのクソ神父はぶち殺しときたいがな。

「部長、俺はあのアーシアって子を！」

いきなり声を先ほどの三割増しぐらいであげるイツセー。アーシア？アーシア・・・ああ、あのシスターの事か。というか、知り合いだったのか。

「無理よ。どうやって救うの？あなたは悪魔。彼女は堕天使の下僕。相容れない存在同士よ。彼女を救うことは、堕天使をも敵に回すことになるの。・・・そうなったら、私たちも戦わねばならないわ」

イツセーの態度とは反対に部長は冷静に言い放つ。その言葉には、眷属への配慮が見える。そう言われたイツセーはだまりこくってしまった。

あゝ・・・、コレはかぁーなり、落ち込んでおりますよ、みなさん。・・・大丈夫か？イツセー。

「あ、進は残ってちょうだい」

イツセーの足の治療が終わり、いざうちに帰ろうとしたら部長に止められる。まったく、何だってんだよ。まあ、主の命令だから従うことにした。イツセーの護衛はモヤシに頼んでおいたから、まあ大丈夫

夫だろ。

イツセー、モヤシ、チビスケが家に帰り、教室には俺を含めた三人が残る。

「んで？なんだよ、部長さん。これから熱い告白がまってるのかよ？」

冗談まじりに言う。それを聞いた部長もまた軽く笑い。

「ふふ、安心なさい。間違っても進にはしないから」

「こりやまたひどい返しだな。まあ、んな冗談はやめてだ。・・・
・用件は？俺、やることあるんだが？」

「そのやることっていうのはイツセーのこと？」

・・・驚いた、よくわかりますね。

「まあ、な。アイツとは付き合い長いから。落ち込んだときとかよくわかるんだよ」

昔っから、落ち込んでるのがスッゲーわかりやすかったからな。しかし、あれはちょっと重傷だな。

「・・・その件も大切な事だけど、こちらの用件も大切なことなのよ・・・朱乃」

「はい、部長。進君、神器を出していただけませんか？」

「神器？別に構わないが、いったいなにをするんだ？」

俺の問いに黒ポニーが笑いながら、

「進君の神器を解明しますわ」

といった。

テーブルの上には俺の神器である、黒色のコートが広げられている。ちなみにこれ、ボタンがないから前が止められない。コートとしては欠陥品だな。

「さて……。まず、進？あなた、コレの能力は確認できた？」

「それがまったく。家で取り出したりして調べてみたが、チンプンカンプンだ」

そう。話は数日前に戻るが初めて神器を発動させた日に部長さんに「とりあえず、神器については調べておくから、自分たちでもなるべく調べておいて？」と言われたのだよ。んで、言いつけ通り調べてみたが、何もわからず現在に至るというわけ。

「やはり、なにかのアクションがないと発動しないのかもしれないかもしれせんわ。例えば、持ち主のある感情に反応する、とか」

黒ポニーが意見を述べる。か、感情て？欲望とか（笑）

「……なんとも言えないわね。けど、可能性としてはあると思う

わ。でも、どんな形であれ、今までの神器は所有者の意志で能力の発動が出来ているから、そこに例外はないと思うわ」

口元に手を当てながら言う部長。

「じゃ、神器の発現がまだ不完全なんじゃないか？」

「それはないわ。これはもう完全に発現してるもの」

さいですか。

「となると、本格的にわからないわよ？どうしたら……」

「部長やはりここわ……」

お二人がなにやら専門的な話を始める。いや、俺は放置ですか？……あ、そうですか。放置ですか……

ふんだ……自分一人で考えるもん。いーもんいーもんツ！俺も明日の夕食の献立、考えちゃうもんツ！……ごめん、キャラじゃなかった。

と、とりあえず考えよう。よく考えよう、だ。確か、冷蔵庫の中にキュウリともやしが入ってたから、それをまぜてドレッシングで味付けて、あ、あとサバがあったから味噌煮にしてくれ。そうそうナスがあったから煮干しを入れて煮込むか。お吸い物はやっぱりワカメと豆腐だな、鉄板だ。あやべ、ジャガイモの賞味期限が近かったんだどうしようか……、ガーリックマーガリンで味付けして温ためて食べるか。いやー、材料がいっぱいあるなあー（笑）

………なんだろう。今引つかかるフレーズがあったよ

うな？なんだろう。『ガーリックマーガリンで味付けして』か？いや違うな。『ジャガイモの賞味期限が近い』いやもつと近かったよ。うな。じゃあ、『いやー、材料がいっぱいあるなあー（笑）』そうだ、コレだよ。なんでひかかったんだろ？

・・・てか、なんで俺はご飯の献立考えてんだろ？献立だけなら超健康的な献立が完成してるような・・・だって野菜：肉：ご飯＝5：2：3ぐらいになってるもん。食で一番大事なのは野菜だと思ってるからね。

・・・確か神器の能力について一番はじめに考えてたんだよな？それがなんでこうなるんだよ。神器と料理は関係な

——くもないッ！！——

そうだ、そうだよ、そういうことだよッ！！料理と一緒にだッ！！いやまあ実際は違うけど・・・、仮定が一緒ってただけだけど。つまり、俺がいたいのは神器を『完成された料理』と例える。そしてその『完成された料理』を作るには、なんであっても絶対に必要になるもんがある。そう『材料』だ。『材料』がなければ『料理』は作れない。超単純な事だけど、めっちゃくちや見落としてた。つまり、『材料』となるものは俺の中から生まれるわけだ。

「なあ、リアス嬢。わかったかもしれん」

「？なにがわかったの、進？」

俺の言葉に、さっきまで話をしていた二人がこちらを向く。

「神器の発動条件だよ」

「わかったのッ！？」

部長と黒ポニーが驚く。まあ頭が残念な俺がわかつたらそら驚くだろつが

「ああ、この神器つーのは、所有者の力を媒体に能力を発動させるんだつたな？」

「え、ええ。そうですね。それが絶対条件ですわ」

「じゃあ逆に考えて、神器の発動は絶対に所有者のもっているものに限られるわけだ」

部長が俺の言葉に顔をしかめる。

「そう・・・だけれども。その燃料がわからないから困って――」

「俺さあ・・・、自分で言うのもなんだが、体力や精神力は化物クラスだと思うんだよ」

「・・・進君が人間のデフォルトでしたら三大勢力ではなく四大勢力になってしまいますわ」

苦笑混じりで言う黒ポニー。俺が人間のデフォ・・・こえー。

「そんな関係ない話は――」

「関係があるんだよ。さっきの確認事項からさ。このコートの能力発動には体力や精神力が関わってないわけだ」

そこまでいってようやく俺が言っていることが理解したららしく。驚

愕の顔をするお二人。頭いいなあーこの人ら。

「ま、まさかッ!？」

「そのまさかだろうよ。たぶんこのコートは俺の――」

そう、この真つ黒の布切れは、今まで俺が積み上げてきた体力や精神力物には反応せず。逆に最近になって存在を知ったものが燃料となっている。そして、イツセーにとって決定的に足りない物だ。

「――魔力が燃料なんだろうよ」

といった経緯からコートの燃料を推測したんだが。燃料がわかったから「はい、やってみましょう」とはいかなかった。何でかって？ だって魔力のコントロールができないもん。いやいや、最近になって魔力つてもんを知ったんだから、すぐにコントロールなんてできる訳ないだろ。つーわけで早速魔力コントロールの修行を始めた。

「そう、そのままです。そのまま集中して手のひらに魔力を集めてください」

修行を初めて二時間。黒ポニーと部長による魔力の説明をされたが、始まって四十秒であきらめて『感覚でやってみよう』に切り替えた。いや、今までそんな感じでやってきたから。やっぱりこっちの方がしっくりくる。

「で、できたぜッ!!」

そうこの二時間の格闘の末。ようやく手のひらに集めることに成功した。色は・・・・かなり濃い青だ。ただ、問題が一つ。

「・・・・できては、いますが。そのサイズが・・・・」

そう、手のひらに魔力を集めたら、バスケットボール並みの大きさになってしまった。

「ま、まあ。二時間でここまできたらたいしたものよ。量の調節は今後の課題ね」

「そうですね。今回はこれぐらいでやめて、当初の目的通り、神器の能力の判明に移りましょう」

といって、コートを渡してくる黒ボニー。俺はそれを魔力を集めている手の反対の手で受け取る。しかし、実験する前に一つ。どうしても聞きたいことがあった。

「なあ、能力が発動したら爆発とかしないよな？」

こう、『コート式爆弾』みたいな新しい武器だったりしたらいやじゃない？アフロになる、みたいなギャグ補正がきくとは思えないし・・

「・・・・・・・・・・」

「頼むから黙らないでくれ・・・」

不安になるじゃないかあッ!？・・・・・・・・もし爆発したら・・・・。

ええいままよッ！！爆発がおきても爆発に当たる前に逃げれば問題ないわッ！！

「いくぞおおッ！！」

「——ッ」

そつと、魔力の塊をコートに近づける。そして魔力の塊がコートに当たる。そのまま塊をコートの方へ押していくと、コートに当たっている魔力がどんどんコートに吸われていく。だが、まわりや俺の体に一切変化はない。なにかの変化が起こるかと思っただが、どこにも見当たらず手に集まった魔力が吸われつきても何も変化が生まれなかった。

「失敗、か？」

たまらず呟く。やはり俺の推測は間違い——

「いえ、成功よ」

かと思つたら、部長が声をあげる。成功？今のが？

「どのへんが成功だよ」

「さきほどの魔力。コートに当たった瞬間。コートに吸収されていきましたでしょ？あれはコートが魔力を吸収していったわけですから、魔力が燃料であることがわかったのです」

「コートの能力は目に見えない形で出ていただけよ」

なるほど、魔力が吸われるなんて事が起きたから、推測通りだったわけか。

「そうね・・・、次はコートを着てやってみましょうか。進、コートをきてから腕に魔力を集めてちょうだい」

「ん？ああ、了解」

部長の言葉通りコートに腕を通す。しかし、ピッタリだな。肩幅やら手の長さやらまで完璧だ。

「じゃあ、進君。もう一度集中して、手に魔力を集めてください」

黒ポニーの言葉に従い、集中する。そして、高めた集中をそのままに自身の中にある力を腕に集めるが・・・

「あれ？」

「どうしたの？進」

「いや、手に魔力が集まらないんだ。さっきと同じように、なんかコートの方に吸われて行ってる感じが」

さきほどのように手に魔力を集めようとしているが、魔力が体の外に出ると同時にコートに吸われて行っている。と、俺の言葉に何か気づいたような表情をし、すぐに指示を出す。

「進、そのまま魔力を送り続けてちょうだい。朱乃、ボールペンを持ってきてちょうだい」

「？わかりました、部長」

「別にいいが、なるべく早く頼む。慣れてないし、加減がわからないからすぐにガス欠になっちゃう」

そう。さっきから今の俺では細かいコントロールができないから、ずっと同じ量の魔力を腕に送っているのだ。それも含めて、習いたてであるから、体力の消費もかなりのものとなっているのだ。

「部長、お持ちいたしました」

「ありがとう、朱乃」

と、先程の指示通り、ボールペンを持ってきた黒ポニーはそれを部長に渡す。部長はボールペンの先を出して、なぜかそれを俺の左肩に向ける。

「進、現状維持のまま、ボールペンの感触を感じたら言ってちょうだい、わかった？」

「え？あ、ああ」

まるで状況が読めない中、部長のボールペンを左肩に当たる。だが、
—— まったく、当たっている感触がしなかった。第三者や自分からみたらコートに触れているのにまったく感触がないのだ。

「進、少し力を入れてボールペンをつきだすけど、いいかしら？」

「あ、ああ。続けてくれ」

俺の返事を聞いた部長は頷いてからボールペンを俺の左肩に突き刺そうと力を入れる。しかし、ボールペンは突き刺さらずに停止してしまった。さらに力をいれて部長が押すが――

バキッ

――と音をたてボールの先が割れてしまった。

部長は音をたてて割れてしまったボールペンのさきを確認する。そして、黒ポニーの方へ向き、話を始めた。

「今のみた？朱乃」

「はい。――決まり、ですわね」

「ええ、間違いないわ」

「ちょ、ちよつと待てよ。何が決まったんだよ」

たまらず俺が声をあげる。当たり前だ。ボールペンの先が割れるほど力を入れて突き刺そうとしていたが、最後まで俺はボールペンの感触を感じなかったのだから。ここまでくると、不思議というより不気味だ。

「進、あなた神器の能力が解つたのよ」

「能力が？いまのか？」

「ええ、今ので」

たったあれだけの事で？ いやまあ、俺が頭悪いだけなんだろうけどさ。

「進。あなたの神器は所有者の魔力を吸収している間、コートが強度が飛躍的に上がるの。それはもう、私たちもビククリなくらいだよ」

どうやら、また凄い物を引き当てたらしい。

めに。

悪魔(のしもべ)始めました(能力と名前)(前書き)

遅くなってすみません。いやあー、受験なんでもいろいろとしてまして？

それではどうぞ？

悪魔(のしもべ)始めました(能力と名前)

ガコン

学園内にある自動販売機で炭酸買ってる今日この頃。いやぁ・・・
渴いたのどに炭酸がしみるなぁ・・・

しかし、炭酸は炭酸でもコーラはあまり好きじゃないんだわ。いや
だって、あれメチャ甘いじゃん？甘過ぎじゃね？飲み始めから甘過
ぎるんだが・・・。けど俺はゼロはまだすきなんだよね！。

・・・なんだって俺はこんなどうでもいいことを考えているのだろ
うか。

「ふああああ・・・・・・」

しかし、眠い。ヤバいぐらいに眠い。人を罵声しながら寝れるくら
い眠い。まあ、その気になれば歩きながら寝れるからいいんだが・
・。けど、極力したくないな。だって、前に一回やってみたらとな
りの県までいったし・・・

つか、こんな眠いのって、間違いなく昨日のあれだよな？神器の実
験だよな？どこことなく疲れが溜まってるし・・・。まあそのお陰で
神器についてはかなり解析できたがね。・・・そうだな。ここらで
一つ整理しておくかな。

まず、はじめに俺の神器・・・、ヤベ、今気づいたが神器の名前ま
だ決めてない。どうしようか・・・、まあ今後の課題だな。とりあ
えず話を進めよう。

まず、俺の神器の特徴は『防御力』。それもかなりの耐久力をもった防御力だ。強度についてはまだ見定められていないが、さわった感じかなりのものだとわかる。また折り合いをみて細かく調べておくことにしよう。

逆にこのコートの特徴は2つ。それはコートが、所有者、つまり俺がコートに対して魔力を送ることにより神器が発動するしくみになっていて、俺が魔力を送らない限り決して能力は発動せず、ただの布切れとなるんだわ、コレが。

だからコートの能力発動条件としては直接俺が魔力を注ぎ込むかたちになる。魔力はコートにふれた瞬間吸われていくため、コートを着てでの戦闘では俺は魔力系の攻撃ができないことになる。コートを着た状態で魔力を手に集めようとすると、体外に魔力が出た瞬間、魔力をコートが吸っちゃうからな。いやー、不便だ。

もう一つは魔力の量だ。その後の実験でこのコートはどんなに微弱だろうと俺の魔力なら問答無用で吸っちゃうことがわかった。あ？それがどうしたってか？まあ簡単にいうと、コイツにはどうやら送られてくる魔力に対して量の基準があるらしく、その規定の魔力量以上の魔力を送らない限り能力は発動しない。

おまけにコイツは魔力を送り続けていないとたちまち本のコートに戻っちゃう。つまり、このコートを長時間使い続けようとするなら魔力をある一定以上の量をひたすら送り続けなさいといけないってわけだ。

ちなみに、魔力量を多く送ってもコートの強度に変化はなさそうだ。おくれれば送るほど堅くなる、なんて都合の良いもんじゃなかったよ。

しかし、なんつー燃費の悪さだ。今の俺が持続させて使おうとする
と、二十秒が限界だ。まだ魔力コントロールができていないし、そ
の規定のラインもわかってない。それがわからない限りこのコート
は相当燃費が悪いことになる。まあそこは今後の頑張り次第って事
で。

とまあ、こんなところか？短所についてはゆっくり直しておくとし
て、とりあえず早急に名前を決めないとな。・・・はあ、誰かいい
名前くれないかなあ。

さきほど買った炭酸を片手に持ち、我らがオカルト研究部へと向か
う。昨日は神器について調べていたら朝になり、学校があるからと
いう理由で中止。お二人はそのまま授業を受けるといつていたが、
そのときの俺にはそんな気力はなく、真っ直ぐに下校した。いやあ
ー変な目で見られたよ。登校ピーク時に一人だけ下校してるんだも
ん。これでまた一つ、へんな伝説が生まれちゃった。

家に帰った後はベッド イン。ついさっきまで寝ていて、少し寝過
ごしてしまった。おそらく部室にはもういつもの面子が揃っている
だろう。まあ、今日は見事にすべての授業をサボってしまった。文
字通り部活に学校に来ているようなもんだ。

今日はいつたいなにをするのだろうか、などと考えている。思いの
ほか、自分はある空間が気に入っているのだな。見たことも聞いた
こともない事に対しての単純な好奇心だとすぐにわかるが、それ
でも楽しみなものは楽しみだ。

そんな事を考えながら先ほど我慢できず少し遠回りしてまで手に入れた炭酸を飲み尽くす。すこし冷えているジュースを飲み干し、缶を握りつぶす。そのまま同じ手で違う方向から握りつぶす。それを数回繰り返し返すと、直径一センチ程度の鉄の塊へと変貌する。それをポケットにいれ、部室へと歩いていく。

向かう先は旧校舎、我らがオカルト研究部。今日も楽しい事があることを、少しでも期待しようかな。

「チース・・・」

数分後、何事もなく部室に到着する。しかし、教室の中は昨日と同じくらいピリピリとしていた。ん？なんだ？またイッセーがおそわ・・・れてないな。普通に部長さんと話を――

パンツ！！

と思ったらいきなり部長さんがイッセーに張り手かましましたよ、みなさん。え？なに？なにがあつたの？

「何度いったらわかるの？ダメなものはダメよ。あのシスターの救出は認められないわ」

え？シスター？シスターって、昨日のシスターのことか？そーいや、知り合いっばい雰囲気だしてたような・・・。

とりあえずどういう状況なのかわからないから、教室のソファーに

座っているモヤシとチビスケに聞くことにしよう。

「やあ、本道くん。遅かったね」

「・・・こんにちは、先輩」

俺が近づいていくと、モヤシはイケメンスマイルで、チビスケはあまり表情をかえずにあいさつをしてくる。

「よう、お二人さん。ちょっと寝るのが遅かったな。つい寝過ぎして遅れちゃった」

「・・・何かしてたんですか？」

チビスケがたずねてくる。表情に変化はないがポテチを食べながらという動作が加わっている。

「ちょっとした調べものだ。つかそれより、何あの状況？」

イッセーと部長を視線を向けながら開いているソファーに腰を下ろす。うわぁー・・・ふかふかだぁー・・・

「うん、実はカクカクシカジカなんだ」

「なるほど、四角いムーヴなのか」

「・・・祐斗先輩・・・」

俺たちのやりとりをみていたチビスケが睨んでくる。主にモヤシを。

「う、ごめん。ちょっとした冗談なんだけど」

むしろ、お前が案外絡みやすいことについて驚いたんだが・・・

「んで？今どういう状況？」

とまあ、モヤシから簡単に状況を説明された。なんでも、アーシアっていうシスターの女の子が堕天使に攫われちゃったから助けにいきたくてイッサーがいつているらしい。

けど、部長からしたら自分の眷属がムザムザ死ににいつてしまうのをとめようとしているわけだ。・・・悪魔の主ってみんなこんなに慈悲深いのか？

「そんなことできるわけないでしょう！あなたはどうしてわかってくれないの！？」

それまで冷静にイッサーを諭すようにしていた部長だったが、イッサーの頑固さに痺れをきらしたか声を上げてイッサーを叱咤する。だが、イッサーはなおも食い下がる。

「俺はアーシア・アルジェントと友達になりました。アーシアは大事な友達です。俺は友達を見捨てられません！」

「・・・それはご立派ね。そういうことを面と向かって言えるのはすごいことだと思うわ。それでもこれとは別よ。あなたが考えている以上に悪魔と堕天使の関係は簡単じゃないの。何百年、何千年とにらみ合ってきたのよ。隙を見せれば殺されるわ。彼らは敵

なのだから」

「敵を消し飛ばすのがグレモリー眷属じゃなかったんですか？」

「・・・」

睨み合う両者。まあ、予想はしてたけど、あの状態のイツセーさん止まらないんだよねー。もう諦めて行かせてやれよ部長。なんて心の中で呟くわ・た・し・・・・ごめん、ちょっと疲れてるだけだから気にすんな。

「あの子は元々神側のもの。私たちとは根本から相容れない存在なの。いくら墮天使のもとへ降ったとしても私たち悪魔と敵同士であることは変わらないわ」

「アーシアは敵じゃないです！」

「だとしても私にとっては関係のない存在だわ。イツセー、彼女のこととは忘れなさい」

残念ながらニアス嬢。そういつて素直に聞きたまだったら、俺は今まで苦労してないよ。

と、部長のもとへそそくさと近づく黒ポニー。そのまま耳元で耳打ちをする。その顔にはいつもの笑顔が消えていた。

黒ポニーが耳元から離れると、部長もまた先ほど以上に険しい顔をする。なんかあったみたいだな。

ちらりとイツセーをみたあと次に部室にいる全員を見渡してから言

った。

「大事な用事ができたわ。私と朱乃はこれから少し外へでるわね」
急な話にすかさずイツセーが噛みつく。

「ぶ、部長、まだ話は終わって——」

しかし、イツセーの言葉を遮るように、部長の指がイツセーの口元へと向かった。

「イツセー、あなたにいくつか話しておくことがあるわ。まず、一つ。あなたは『兵士』を弱い駒だと思っているわね？どうなの？」

部長の言葉にイツセーが頷く。

「それは大きな間違いよ。『兵士』には他の駒にはない特殊な力があるの。それが『プロモーション』よ」

『プロモーション』？聞き慣れない言葉だな。

「実際のチェス同様、『兵士』は相手陣地の最深部に赴いたとき、昇格することができるの。『王』以外のすべての駒に変化することが可能なのよ。イツセー、あなたは私が『敵の陣地』と認めた場所の一番重要なところへ足を踏み入れたとき、『王』以外の駒に変ずることができるの」

それ、なんていうチート？それがあれば状況に一番適した状態で有利に戦闘できるじゃん！！

「あなたは悪魔になって日が浅いから最強の駒である『女王』への

プロモーションは負担がかかって、現時点では無理でしょう。けれど、それ以外の駒になら変化できる。心のなかで強く『プロモーション』を願えば、あなたの能力に変化が訪れるわ」

「いーなあー、俺も兵士がよかったなあー。プロモーションしてみたかったなあー。」

「それともうひとつ。神器について。まずイッセー、神器を使う際、これだけは覚えておいて」

「そっついながら、イッセーの頬をなぞる部長。」

「——想いなさい。神器は想いの力で動き出すの。そして、その力も決定するわ。あなたが悪魔でも、想いの力は消えない。その力が強ければ強いほど、神器は応えるわ」

「——想い、ね。何事も最後は強い気持ちだと聞くんが、それはどこにいつても変わらないのだな。」

「そして、進。あなたにも一つあるわ」

「こちらを向いて話してくるリアス嬢。」

「あ？なに？」

「あなたの神器、その防御力はかなり控えめにみても並みの堕天使の攻撃では傷一つつかない強度よ。だから安心して攻撃をくらいなさい」

「いやいや、攻撃に当たる前に攻撃しますから。そんな怖いこと試

しませんから」

いやだって、堕天使や天使の光は弱点だっていったのあなたでしょ？んなバクチをぶつつけ本番にしたいくないですけど・・・

「そう。まあ、それはあなたしだいということだ」

その変な期待、やめてくんないっすか？マジキツイッス。

「最後にイツセー、絶対にこれだけは忘れないこと。『兵士』でも『王』を取れるわ。これは、チエスの基本よ。それは悪魔の駒でも変わらない事実なの。あなたは、強くなれるわ」

それを言い切ると部長と黒ボニーは魔法陣からどこかへジャンプした。教室に残ったのは俺、モヤシ、チビスケ、イツセーの四人。

「イツセー」

俺が声をあげる。呼びかけられたイツセーはこちらを向いてくる。

「一つ、確認したいことがある」

「何を？」

「お前が今日あったっていう堕天使、そいつは天野夕麻か？」

俺の復習の対象。俺の親友の敵。悪魔になったあの日から毎日毎日、アレを殺したいと何度思ったかッ！？

「・・・・・・ああ、そうだ。そこに夕麻ちゃん・・・・レイナーレが必ずいる」

ドツと。どす黒い感情が湧き上がる。止めることができないほどに。際限なく沸き上がってくる感情。

ああ、そうだ。久しぶりだ。コレは、この感情は、純粹なる殺意だ。ああ——やつと、やつとアレを——

「よし、決まりだ。俺もいくぜ」

「なっ！？進ッ！？」

俺の言葉にイツセーが戸惑う。

「止めるなよ、イツセー。お前に譲れないものがあるように俺にも譲れないもんがある。それにな、親友が危険な所に1人で行かせるわけにはいかないんだよ」

「——ッ！！」

俺の言葉にイツセーが驚愕する。いやだって、親友だぞ？さすがにいかせらんねえよ。

「・・・親友だったらそこはさ、止めるのがふつつじゃない？」

イツセーが皮肉気味に言ってくる。みると、少し目が潤んでいる。なんだよ、なきかけか？

「アホ。何年の付き合いだとおもってんだ？止められないからこうするんだよ。そんな事ができるならはじめから苦勞はしねえ」

「ハハ、その通りだな」

「だろ？」

2人して笑みを浮かべる。さて、んじゃまそろそろ行くか。

そうして教室をでようと動いた俺達に対してモヤシが話しかける。

「行くのかい？」

「ああ、行く。行かないといけない。アーシアは友達だからな。俺が助けなくちゃならないんだ」

「俺もちよつとした野暮用でな。いい加減、決着つけないとさ」

「・・・殺されるよ？いくら神器を持っていたても、プロモーションを使っても、エクソシストの集団と堕天使を本道君はともかくイツセー君では相手にならない」

ま、正論だわな。地雷原を走り抜けるようなもんだしな。それはイツセーもよくわかってることだろし。2人だけでいったら俺はともかくイツセーは間違いなく死ぬな。さすがに俺もそんな所でイツセーを庇いながらは戦えない。

「それでも行く。たとえ死んでもアーシアだけは逃がす」

「いい覚悟、と言いたところだけど、やっぱり無謀だ」

「だったら、どうすりゃいいってんだ！」

となるイツセーにモヤシがハッキリ告げる。

「僕も行く」

「なっ……」

「ハッ……」

まさかの一言に2人とも驚く。てっきり止めてくるもんだと思ってたんだが。

「僕はアーシアさんをよく知らないけれど、君達は僕の仲間だ。部長はああおっしゃったけど、僕はイツセー君の意志を尊重したいと思う部分もある。それに個人的に堕天使や神父は好きじゃないんだ。憎いほどにね」

……コイツ、どこかで俺と似ているな、とは思ってたが。そういうことね。俺と同じで復讐鬼ね。

「部長もおっしゃっていたらう？」「私が敵の陣地と認めた場所の一番重要なところへ足を踏み入れたとき、王以外の駒に変ずることができるの』って。これって、遠まわしに『その教会をリアス・グレモリーの敵がいる相手陣地だと認めた』ってことだよな」

「「あっ」」

そついやそんな事いつてたな。ってことは、プロモーションの発動条件が揃うじゃねえか。

「部長はキミにいつでもいいって遠まわしに認めてくれたんだよ。もちろん、それは僕にフォローしろって意味合いだとも思うけど。」

部長に何か考えがあるんだろうね。じゃなければ、キミを閉じ込めてでも止めると思うよ」

「たく、あのお姫様。素直じゃないことこの上ないねえ！。普通にいやいいじゃねえか。」

と、さっきまで傍観していたチビスケが一步前に出る。

「・・・私も行きます」

「って、おいおいチビスケ？」

「・・・三人だけでは不安です」

「・・・まじかよ。なんだよ、単騎特攻するき満々だったのに・・・いや、数が少ないのには変わらないが。つか、このチビスケ。普段なに考えてるか読めないが、本質はかなりのお人好しのようだ。・・・てか、眷属全員そうだな。感動した！俺は猛烈に感動しているよ、小猫ちゃん！」

隣にいたイツセーが文字通り感無量な表情を浮かべ叫ぶ。

「あ、あれ？ぼ、僕も一緒に行くんだけど・・・・・・？」

放置されてなんとも寂しげに笑みを作る我らが『騎士』様。

「あんま気にすんなよ、祐斗。イツセーもああはしてるがちゃんと感謝してるって」

「え？そ、そうなのかな・・・」

「ああ、そっだよ色男」

「そうか………ってえッ!？」

といきなり、こちらを凝視してくる祐斗。な、なんだよ？なんかしたか俺？

「い、今……名前で………」

驚愕の表情を浮かべたまま話かけてくる。名前？ああ、ついさっき覚えたからな。みるとイッセーやはたまたチビスケまでもが驚いている。だから何でだよ。

「あん？なんだよ、名前よんじゃダメなのか？」

「いや、そうじゃないけど………」

「だったらいいだろ、祐斗。呼び方ぐらい自由にさせてくれよ。変わりに俺の事も、好きに呼んでいいから」

俺の言葉を聞いて、少しずつ表情が変わる。驚愕から笑顔へとかわっていく。

「わかったよ、進君」

と、まさしくイケメンスマイルでいつてきた。いや、野郎にその笑顔を向けてどうするんだよ。

と、そんな事を思っていたらいつの間にもやら目の前にチビスケが立

つていた。なんとな・・・いや、確実に不機嫌なのが凄くわかる。

「なんだよ、どうかしたのか？チビス——ゲエツ！？」

名前を呼びかけた瞬間、足のすねに有り得ない激痛が走る。たまらず俺がすねを抑えながらうずくまる。なんだこれ？なんだこれッ！？俺なんで蹴られたんだッ！？蹴られるような要素が一つも見当たらないのだけれどッ！？マジでわかんないんだけどッ！？それに蹴ったのに未だにご立腹なチビスケさんがいるんだけどッ！？かなり怖いんだけどッ！？そこでかなり痛いんだけどッ！？

「な、なに、すんだ、チビ——スガアッ！？」さらに反対のすねも蹴られる。いやだから何で蹴るんだよッ！！いてえ・・・メツチヤいてえよッ！！もう戦えねえよッ！！俺にとっての敵はコイツなのかッ！？

「だ、大丈夫か進ッ！？」

「進君、気をしっかり持ってッ！！」

男二人が寄ってくる。心配してくれるのはありがたいが、とりあえず目の前の悪魔を倒してくれ・・・

「こ、小猫ちゃん。どうして蹴ったりしたんだい？」

「そうだよ、なんか進が悪い事したか？」

そう、それだよ。あまりの痛みで言葉がでない俺のかわりに魔王にチビスケ聞いてくれ。

「・・・名前」

「「はい?」「」」

ボソツと零した言葉にイツセーと祐斗がハモる。え?今なんと?

「・・・名前、ちゃんとよんでほしいです」

・・・野郎全員目が点状態だよ。え?そんだけ?俺が名前呼ばなかったかだけで二回もすね蹴られたの?

と、それから「なるほどね」なんて声を出す祐斗。いやだからなにが?

「ゆ、祐斗?とういうこと?まったく解らないんだけど?」

1人納得している祐斗に俺が訪ねる。ようやく痛みがひいてきて、なんとか立てるぐらいになっただぜ。

「ああ・・・、僕が言ったら殺されそうだからやめておくよ」

「いや、それだとなんの解決にもならないからッ!?!」

が、俺の叫びも虚しく、祐斗はあらぬ方向を向く。次にイツセーに視線を向けるがコイツも『?』状態だッ!!

「進先輩」

「——ッ!?!」

名前を呼ばれ硬直する俺。マズいッ！マズいッ！マズいッ！！！ど、どうすればいいんだよッ！？ねえ、だれか答えてくれッ！？

「名前、ちゃんとよんでください」

といいながら何故けるフォームをとるんですか？またけるんですかね？今度こそ蹴られたらすねが折れそうなんですが・・・

マズい。それは回避しないと。何故か戦う前からピンチなのはこの際も正しいや。よくないが正しいや。状況からして、俺に原因があるようなのはわかるが、名前ってなんだよ。普通によんでるじゃねえか。どこに問題があるんだよ。普通にあだ・・・名、で・・・。。。。。

それだよッ！あだ名が原因だよッ！？そういやさっきからチビスケって呼ぶ度に蹴られてたよッ！！え？マジでッ！？名前呼ばなかったかだけで俺すね蹴られたのッ！？

「名前を・・・」

といつて一步步み寄る魔王。けどあつてんのかッ！？なんか名前間違えたらまた蹴られそうだよ。こ、今度はどこだッ！？またすね・・・じゃないよな？二回とも違う足だし。だとしたら、一体・・・。ま、まさかッ！？股間かッ！？股間蹴られんのかッ！？あの怪力娘のッ！？全力の蹴りがッ！？俺の股間にめり込むのッ！？間違いないく再起不能になりますねッ！？

ヤバイ・・・本格的にヤバイ・・・。下手しなくとも死ぬ。人として男として死ぬ。それだけは・・・それだけはッ！！

「早くしないと蹴りますよ・・・？」

「わかった、わかったッ！！わかったからやめてくれ、小猫ッ！！」

・・・ハッ！？

い、いつてしまったああああ——ッ！？ヤバイよッ！？あ
つてるよねッ！？あつてるよねッ！？名前、あつてるよねッ！？あ
つてなかったら、間違いなく死んじまうよッ！？ホントに死んじま
うよッ！？

「・・・わかりました、もうしません、進さん」

！？

えッ

「今、なんと？」

今、我が耳を疑うような天使の囁きが聞こえたんだが、鼓膜が腐つ
てんのかな？

「・・・だから、もうしません。ちゃんと名前をよんでくれました
から」

幻聴ではなかったようです。

「今後から、ちゃんと名前ですんでください、進さん」

・・・もう、訳がわからねえ。あと、祐斗。テメエニヤニヤ
してないで助けるや。

悪魔（のしもべ）始めました（能力と名前）（後書き）

とまあ、危機一髪的な感じでしたね、進。なんか小猫、ちょう書き
やすくって……

アンケートの状況は……

オフィス 朱乃 ゼノヴィア 七票

小猫 六票

黒歌 五票

ロスヴァイセ イリナ 九重 二票

ソーナ レイヴェル 一票

予想以上に上位がデットヒート。いやあーまさかここまでとは……。アンケートなのですが、締め切りを次回の更新までとします。まだ票を入れてない方はお早めに。アーシアとリアス以外でお願いします。複数の違うキャラにいれても良いですよ。

最近考えてるんだけど、まじこいに進を放り込んだらどうなるだろうって……。どうなるだろう？

悪魔（のしもべ）始めました〜足止めと同種〜（前書き）

今週はなんてワンダフルな一週間なんだッ！！テイルズの新作がでたよッ！！ヤベエよ、早くしたいよッ！！けど暇がないよッ！！さらにFate/EXTRA CCCが発売されるううう——
——ッ！！ヤベエ、EXTRAの続編だよッ！！テンションがあがってきたああああ——ッ！！赤セイバーがいるだけで1ヶ月戦えるッ！！キヤス狐がいるだけで3ヶ月は戦えるッ！！両方いれば一年は戦えるぜえええ——ッ！！キヤス狐がかわいくて死ねる……。けど、赤セイバーもかわいくて死ねるよ……

けど、どんどん魔法使いの夜が遠ざかる気がする……。type I moonさん、DDDや月姫2や月姫リメイクも出してほしいが、まず魔法使いの夜を出してください？早くしたいよおおお——

——ッ！！

悪魔（のしもべ）始めました〜足止めと同種〜

とまあ、様々な謎を残したまま俺達は目的地へと向かう。本当になんで俺は蹴られたのだろ〜、と何回も自問自答したが答えはでなかった……。でも、恐怖だけは心に刻み込まれた。もうあまり、小猫の事怒らさないようにしよ……

そんな思考を巡らせながら、目的地へと向かう。あたりはもう暗い。道にある街頭が光を発している。現在、俺とイッセー、祐斗や小猫の四人は教会の見える位置で様子を窺っている。

人の出入りは見当たらないが、教会に近づけば近づくほどに悪寒が体中を駆け巡る。アレと初めてあったときと同じように感覚がする。祐斗が言うには、気配からして、堕天使が中に必ずいるそうだ。

「これ、図面」

祐斗が路面に建物の見取り図らしきものを広げる。へえ、見取り図なんて用意してたのか。

「まあ、相手陣地に攻め込むときのセオリーだよな」

・・・ごめん。俺や親父のセオリーは、壁をぶち抜いて突撃なんだけど。いや、文字通り壁をぶち抜いてそこから攻める。・・・よく考えたら親父にセオリーなんてなかったな。あの人、気分で作戦決めるし。けど全部似たような感じだし。それに付き合わされる俺の身になってくれ……

「聖堂の他に宿舎。怪しいのは聖堂だろうね」

祐斗が地図を見ながら言う。

「宿舎は無視するのか？」

「おそろくね。この手の『はぐれ悪魔払い』の組織は決まって聖堂に細工を施しているんだ。聖堂の地下で怪しげな儀式を行うものなんだよ」

「どうして？」

イツセーの疑問を口にする。それを聞いて祐斗が苦笑を浮かべる。

「今まで敬っていた聖なる場所、そこで神を否定する行為をすることで、自己満足、神への冒瀆に酔いしれるのさ。愛していたからこそ、捨てられたからこそ、憎悪の意味を込めてわざと聖堂の地下で邪悪な呪いをするんだよ」

うわぁー、そらまた一段と頭がおかしいことで。はぐれ悪魔払いはみんなそうなのか？でも、あのネラー神父が神なんて敬ってるようには見えなかったんだが・・・

「入り口から聖堂までは目と鼻の位置。一気に行けると思う。問題は聖堂の中に入り、地下への入り口を探すことと、待ち受けているであろう刺客を倒せるかどうか」

刺客、ね……。これさ、間違いなく神父フラグだよな？

月明かりに照らされながら、俺たちは教会の入り口で顔を見合わせ、頷きあつた。さて、行きますかッ!!

ダッ!!

入り口を潜り、一気に走り抜ける。教会に入った時点で、敵は俺たちの侵入を察知するらしい。これでもう後戻りはなしだ。栄光が死か、その2択のみだッ!!

ドンッ!!

俺の蹴りで扉を蹴破り、聖堂に足を踏み入れる。中は長椅子と祭壇。オーソドックスな聖堂だ。いや、聖堂とかきたことないけど、イメージ的に……。

ただ、一つだけイメージと異なる点があつた。十字架に磔となつている聖人の彫刻。その頭が消し飛んでいた。

パチパチパチ……

鳴り響く拍手の音。音の方を向くと、柱の物陰からネラー神父が現れる。

「ご対面！再会だねえ！感動的だねえ！」

「ご対面。再会だねえ、屈辱的だねえ」

あいつかわらず、ふざけた野郎だ。腹立つわぁー。

「俺としてはぁー、二度会つ悪魔はいないってことになってんだけ

どさッ！ほら、俺、メチャクチャ強いんで悪魔なんて初見でチョンパなわけですヨッ！！一度会ったらその場で解体！死体にキスして Good-byeッ！！それが俺の生きる道でしたッ！！でも、おまえらが邪魔したから俺のスタンスがハチャメチャ街道まっしぐらダメだよねえ。俺の人生設計を邪魔しちゃダメ！だからさ！ムカつくわけで！死ねと思うわけよ！特にそのクソ黒髪悪魔ッ！！光速で死ねっのッ！！このクソ悪魔がよおおおおおおおッッ！！」

といって、一回のセリフで喜怒哀楽をすべて表現し、一気に激昂するネラー神父。っか、メツチャ目の敵にされてるじゃん、私。

ブイーン

懷から拳銃と柄だけの剣を取り出し、光の刃を出現させる。確か、あれに斬られるとマズいらしい。なんでも光の力で大ダメージをくらうんだと。拳銃も同様だ。

「てめえら、アーシアたんを助けにきたんだろう？ハハハ！あんな悪魔も助けちゃうビッチな子を救うなんて悪魔様はなんて心が広いんでしょか！てか、悪魔に魅入られてる時点であのクソシスターは死んだ方がいいよね！」

そら、無関係な人間をいきなり殺そうとする奴よりはまだ良心もってるっつーの。

「おい！アーシアはどこだ！」

「んー？その祭壇の下に地下への階段が隠されてございますヨ。そこから儀式が行われている祭壇場へと行けますぞい！」

祭壇をゆびさしながら、割と簡単に場所を吐きやがった。よし、もうコイツに用はないよな？

「セイクリッド——」

「おまえら、先に行け」

ほかのメンツが臨戦態勢に入る直前に俺が告げる。すると、イッセーが囁みついてくる。

「な、なにいつてんだよ進ッ！！ここは全員で——」

「全員がコイツにかまう必要はねえ。俺が相手してる間に、さきに進むのが得策だ」

「け、けど……ッ!!」

俺の提案にイッセーが渋る。みると、祐斗や小猫も迷っていた。

「大丈夫なのかい？相手ははぐれとはいえ悪魔払いだ。それもかなりの手練れだ。進君ひとりでは、——」

「大丈夫だっつーの。俺はそのネラー神父より八次元ぐらい飛び越えた実力の奴と毎日戦ってたんだぜ？問題ねえって」

「しかし……」

祐斗もまた黙る。まあ悩むとこなのはわかるが、今は時間が惜しいところだ。

「それにだ。俺たちが侵入してかなり時間がたったが、刺客として現れたのはコイツのみ。普通なら、もう一人二人はきても不思議じゃないが、現れていない。つまり、俺達の侵入より優先して何かしているって事じゃないか？」

「ごめいさあーつ、その通りだぜ、腐れ悪魔。なんかあー、今アシアたん使って事を起こそうとしてるっぽいデスヨ？」

俺たちの会話に割り込んでくるネラー神父。てか、んな教えていいのか？刺客としてはダメじゃね？

「だそうだぜ？アシアって助けるんなら、急いの方がよくないか？俺なら大丈夫だ。仮に敵が増えても、死なないように専念して戦えば、あと4、5人増えても問題ねえよ」

「・・・・・・・・」

俺の発言に考え込む祐斗。まったく、とつとと行けっつーの。時間の無駄だ。

「・・・・わかった。ここはまかせるよ、進君」

答えはどうやらYESか。よっしゃ。やる気出てきたぜ。

「ああ、まかされた。おまえらもしっかりな」

と、俺たちのやりとりにイツセーが割り込む。

「木場ツ！？本気かよツ！？進一人にまかせるだなんて・・・」

・・・たく、相変わらず人に優しいやつだこと。少しは自分の心配をしろつての。

「本気だよ。敵の話を信じるのはどうかと思うけど、確か今の状況はおかしい。あの神父は間違いなく足止めだ。それがわかっていて、戦闘で時間をかけてる暇はないからね」

「けど・・・」

未だに迷うイッセーに、俺よりさきにネラー神父が痺れを切らした。

「いつまで待たせるんだっつーのッ!!」

そう言い放つと、鋭く踏み込んでくる。距離にして十メートル前後。それがみるみる縮まっていく。

それと同じように俺も飛び出す。かなりのスピードで飛び出す、奴は俺を目でとらえていた。たく、大した胴体視力だ——ッ
!!

ガキンッ!!

俺と神父が激突する。俺が放った拳を奴は銃身でうけとめ、奴の剣は塚の先端を抑えて剣身を振り下ろさせないようにしている。

「ハッ、やるねえッ!!」

神父が笑みを交えながら言ってくる。その間、剣や銃にこもる力が

増す。俺も対抗して力をさらに込める。

「進ッ！！」

後ろからイツセーが叫ぶ。まったく、なにしてんだよッ！！

「まだんな所にいるのかッ！！早く行けッ！！先にお前からぶっ殺すぞッ！！」

顔だけ向きながら俺が叫ぶ。その叫びが届いたか、イツセーが拳を握り締め、そして――

「わかったッ！！行こうッ！！木場ッ！！小猫ちゃんッ！！」

三人が祭壇に走り出す。すると、途端に前方からの力が消える。慌ててむき直すと、神父はバックステップで距離をとっていた。そして、銃を三人の方へ向けるッ！！

「行かせるかクソ悪魔ッ！！」

「どアホがッ！！素直に行かせとけッ！！」

すかさず俺も神器を発動させながら、奴の銃の進路の前に向かう。クソ、間に合うかッ！？

引き金がかかれ音がでない光の弾丸が撃たれるッ！！それと同時に俺も神器に魔力を送る。信じるぜ、部長。頼むぜ、俺の神器ッ！！
セイクリッド・ギア

弾丸の進行方向に割り込むが弾丸が胸に当たる。ニヤリと笑みを浮かべた神父だが、すぐにかき消えた。当たり前だ。俺は無傷なのだから。

「コート？コイツ・・・神器所有者かッ！！」

目の前の光景の原因を知り毒づく神父。こっちは内心ビビりまくってんだよッ！！マジで、防げてよかったぁーッ！！

「進さんッ！？」

と、今度は小猫が振り向いてくる。だから、いちいち振り向くなっつーのッ！！

「問題ねえッ！！とつと行けッ！！」

「小猫ちゃん、早くッ！！」

祐斗の声に反応して走り出す。んじゃま、こっちは悪魔払いならぬ神父払いをしますかッ！！

ダッ！！

先ほどの速さより速く敵に近づぐが、コレも目でとらえられてる。コイツ、ホントに人間かよッ！？

「バツサリ死んじまえよッ！！」

神父が完璧なタイミングで剣を横に薙ぐ。このままのスピードなら間違いなく真つ二つになる。だが、残念だったな。このスピードでならそのタイミングは完璧だが、俺はまだ速くなれるッ！！

剣身が迫り来る前に、

さら地面を蹴りもう二段階スピードを上げる。

「なっ——！！？」

スピードの変化に驚く神父。だが、もう遅い。おまえは剣をもう振り出してる。どんな達人であろうと、繰り出し始めた攻撃を突然止めるのは無理だッ！！

そして、剣身よりもはやく俺が奴の懐に入る。この距離じゃ、銃も使えないぜッ！？

右拳を握り締める。狙うは溝。一撃で沈める——ッ！！

「フッ——！！」

そして、一撃でゾウをも沈める拳を放つ。しかし——

「くっ——！！」

銃をもった手を使い、銃身で防ぐ。でも、それだけでは威力は殺せないぜ。このまま無理やりこじ開けてやるッ！！

だが、すぐに奴は後ろに体重移動をし、足に力を入れていた。

バックステップだ。後方に自分から飛んで威力をかき消すつもりだ。クソ、ここで距離を離されたらマズい。今度は俺が技後硬直で隙ができちまう。

コートの力で防げるが、このあとの戦闘も考えると連発はしたくない。それに超至近距離タイプの俺じゃ、オールレンジの奴に近づく

だけで苦勞しちまう。ここは無理矢理でもアイツに一撃与えるッ！！

奴の体が後方に飛び退く。そして、見事に俺の拳は振り抜かれる。だが、奴にダメージはない。拳を振り抜くと同時に自分から引いてダメージをゼロにしがった。コイツ、ホントにつよいな。

俺とアイツの距離がはなされていく。奴はニヤリと意地の悪い笑みを浮かべガードに使った銃をこちらに向けようと動かす。そんな中、俺は足に力を込める。拳を放ちきった今の状況では連撃は無理だ。一撃で決めようとして大ぶりになったのが仇となっちまった。

仮に今から足を使って距離を詰めても上半身からの攻撃は2テンポ遅れてからしか放てない。それでは威力もなく、カウンターも決められやすい。だから、拳を撃つのはやめだ。

ダッ！！

足に込めた力（爆弾）を爆発させる。奴のバックステップよりも格段に速い速度で距離をまたつめる。だが、詰めた所で技は出せない。だから――

「オオオオオオオオ――ッ！！」

――体ごと、ぶつけるしかねえッ！！

「なっ――」

ドゴンッ！！

奴に体当たりをかまし。そのまま2人とも壁を突き破って外でてい

った。

体当たりした時の勢いが殺されることもなく。神父と俺は教会の壁を突き破って外にでる。このまま神父と一緒に転がり回るのはゴメンだ。そう思い、神父を突き飛ばす。

突き飛ばした反動で体が離れるが、それでも勢いは止まることはなく。無様に地面を転がり回る。頭と頭を両腕でガードしながら、勢いが衰えるまで待つ。

が、その考えをすぐに捨てる。なぜなら、進行方向に何か鉄の棒があるからだ。やべえ、直撃コースだッ！！このスピードで当たったら内臓がグロい事になっちまうッ！！

だが、そう思った時にはもう遅く。俺の頭は鉄の棒に直撃する。ヤベエ・・・意識が・・・。

「ん・・・、痛ッ・・・。」

目を覚ますと同時に頭に激痛が走る。たまらずおさえると頭がかち割れていて、血が出ていた。

「はぁー・・・つれえ・・・。」

・・・どうやら気を失っていたようだ。体を起こす。もう絶対体当

たりなんかしない。

口の中に血の味が広がる。さっきの体当たりで口の中を切ったみたいだ。

「ペッペッ。クソ、口の中、砂が入ってて気持ち悪い……」

口の中ジャリジャリする。ああー、うがいしてえー……。てか、よく生きてたな俺。気を失ってる間にあの神父によく殺されなかったよ。

「つーか、さっきの鉄の棒なに？」むっくりと起き上がる。所々痛みが、まあこれぐらいなら問題ないな。すぐにひくだろ。

頭をおさえながら立ち上がる。するとすぐに鉄の棒を見つける。だが、鉄の棒は鉄の棒でもただの鉄の棒じゃなかった。

「ウツ……………」

また、鋭い頭痛が襲う。痛みで頭を抑える。なるほど、そら確かに頭痛がおきるわな。

自分が鉄の棒だと思っていたものには先端が十字架となっていた。そう、西洋の墓だ。名前は……、霞んでいてよくわからないな。よく見ると、あっちこっちにあるな。けど、大体は折れてたり崩れたりしてる。それに錆びてるし。原型を残してるのはコレだけか。……ん？あれは……ネラーか？ああ、俺と同じように墓に頭強打して気絶してる。なるほど、だから助かったのね。

「……………罰当たりだが、壊しとくか。すまん、また今度建ててもらおう頼むから勘弁してくれよ」

といっってから、軽くパンチ。十字架はいとも容易く砕けた。十字架による頭痛は消えたが、頭が割れて起きた頭痛は止まらない。

「いつつ……。さて、とりあえずあのネラー神父を――」

「俺を、どうするってッ!？」

声がしたほうに振り向く。そこには、気絶していたと思っていた神父がたっていた。頭や口からは血が出ているが、目はちゃんと座っている。

「……………驚いたな。気絶していたのじゃないのか？」

「ちげえよ、バアカ。さっきの体当たりのダメージが今の今まで抜け切らなくて立てなかったただけだっつーの」

なるほど、けどその割にはしっかりたってるじゃねえか。

「すらまたごめんなさいと。んで?どうするんだ?続けるのか?」

「当たり前ッ!!悪魔は斬って殺して撃って殺すもんだっつーのッ!?!ファッ。ン悪魔ッ!!」

そういつて銃口をこちらに向けてくる。銃は持ってたか……。剣は……………ラッキー、だいぶ奴から離れてやがる。

「そうか、まあ戦わないと言っているけど、殺していたがな」

「悪魔でえすねえー、悪魔でえすねえーッ！！根っからの悪魔でえすねえーッ！！」

ケタケタと愉快そうに笑う神父。直感でわかる。コイツとは気が合わないな。

「おまえさあー、今までの悪魔の中でダントツにム力つく悪魔なんだけどさー。ほら、あのイッサー？だっけ？を殺す時も邪魔するし、さつきも邪魔されたし、極めつけは体当たりデスヨ？ム力つきますよあー。けどさあー、なんかあんたの事、直感で嫌いなよ。はじめてあつた時から嫌いなよ。なんでかわかるかよ？」

「・・・さあな」

「たぶんあんたと俺は、似たもの同士なんだよ。んで、お互いがお互いを嫌いなのはさあー、同族嫌悪してるからなわけよ。おわかりですかい！？」

神父の告白を受けて、俺は驚いた。スッキリしたのだ。同族嫌悪という言葉を聞き、自分の中にあつた理由がわからなかったやつに対する嫌悪感が、スッキリするほど無くなった。

それと同時に、無くなった嫌悪感より、もっと強い嫌悪感が生まれる。ああ、理由がハッキリしたから、もっとお前の事が嫌いになったよ。

「アンタも俺も本質は一緒だッ！！戦いしか存在意義がないんだよッ！！戦いしか自分を計れないんだよッ！！生と死をかけてるとき

しか興奮しねえ、この世で一番たちの悪い性病だッ！」

なおもさえずる神父にさらに心がかき乱される。黙れよ、その霞んだ声でさえずるなよ。

「だから一つ言つとくぜえッ！？アンタは遅かれ早かれ壊れるッ！間違ひなく壊れるッ！俺と同じようになるか、俺より歪になるか、2つに1つだッ！」

「・・・言いたいことは、それだけか？」

拳を握り、腰を落とす。臨戦態勢だ。こちらの殺氣にあちらも反応する。

「ハッ！！そうですか！そうですかッ！！今すぐやり合いたいですかッ！！クハッ！！確定だッ！！間違ひなくアンタは俺と同種だよッ！」

こちらに向けていた銃の引き金に指をかけている。いいぜ、今すぐ黙らせてやるよ。

「んなわけないだろッ！！クソ神父ううう——ッ！」

そして、同族同種の延長戦が始まった。

悪魔（のしもべ）始めました〜足止めと同種〜（後書き）

とまあ、今回はシリアス気味だったね。シリアスだよな？割と戦闘も書けてたと思う。どうだろう、大丈夫かな？なんかあればいつてください。感想やら意見があればご自由にどうぞ。ただ批判だけはやめて、書く気失せるから。

アンケートですが、今日一杯までとします。変更や追加をしたいならお早めに。

最近、プリンセスラバーってゲームを出した会社の新作をみて、かなり欲しくなった。プリラバはPCをしたが、かなり自分のツボだったんだよ……。特に作画がねッ！優ルートとシルヴィはよかったなあ……。でも、あの作品、エロシーンスゲー生々しいんだよね……。わかる人いるかな？

下からは、今日作者にあつた不幸話です。興味なければみなくていいです。

今日、晩飯を食べていたら。食卓に動き回る黒い影をみた。それは素早く動き回る直径六センチの生物『GOKIBURI』通称G。

Gは突然現れて、食卓を蹂躪する。俺や母は悲鳴をあげながら机から飛び退く。いやもホント無理なんですアレ。もう見ただけで鬱ります。

母と私の死闘の末、なんとか床に落とし、キンチョールを発射。（この時、キンチョールをみて進を思い出して笑ってしまった）見事に直撃したが、そこから悲劇が始まるッ！！

ヤツは最後の力と言わんばかりに壁を駆け上がる。だが、ヤツはキンチョールをくらい、もはや瀕死だ。そうもう死にかけた。無論、壁を上っている最中に動けなくなって落ちるのは予想できた。そして、予想通り、壁を上っているさなか、事切れてしまった。そして重力に従い落下。すると――

ポチャン

さっきまで俺が食べていたら味噌汁にホールインした。

ドリフかよッ！！リアルドリフかよッ！！なんでピンポイントに俺の味噌汁の中に入るんだよッ！！完璧すぎるだろッ！！あまりの完璧さに愕然としたからなッ！？プカーって浮いてるのみて、絶句してたからなッ！？誰が頼んだんだよッ！！味噌汁＋ゴキブリなんて誰が頼んだんだよッ！！求めてねえよッ！！あと、速攻で味噌汁捨てたわッ！！食材やら貧しい人等にあやまりながら捨てたわッ！！食えよー、とかいうなよッ！！おまえ食えるかッ！？おまえ食えるかッ！？プカーってゴキブリが浮いてる味噌汁くうか？無理だろッ！？生理的に無理だろッ！？わかってくれよ、頼むからッ！！

最後に1つだけ、食材を無駄にしたのは俺のせいじゃない。

悪魔（のしもべ）始めました〜チップと死激〜（前書き）

更新が遅れた理由は一つッ！！忙しいッ！！以上ッ！！

すみません、ゴミ投げないで・・・

理由は後書きに書きますから。それではどうぞ。あと、後書きに重大報告があります。

悪魔（のしもべ）始めました！チップと死激！

「シッ！！」

神父の胴体に拳を放つ。それを後方に一步引いてよけられ、それと同時に銃口をこちらに向けて、光の銃弾が撃ちだされる。

「死・ねッ！！」

撃ち出された光弾は俺の顔面を捉えて向かってくる。それを身を屈めてよける。だが、屈めた所に神父の蹴りが顔に迫ってくる。それを手で受け止め足を掴む。つかんだ足を引っ張る。

「うおッ！？」

すると、奴の体がこちらに引っ張られる。引っ張られてきた腹に拳を撃ち出す。

ドンッ！！

鈍い音になり、奴の体が後方へと飛ぶ。だが、奴は俺のうつた所をしっかりと防いでおり、ダメージは無いに等しいだろう。神父は空中で体の重心移動をし数メートル離れた所に着地した。

「フイー・・・、あつぶねえーなあーッ！！」

ガードに使った手をひらひらとふる動作をする神父。その顔には、笑顔が満ちている。

間違いない。コイツ、楽しんでやがる。殺し合いを楽しんでやがる。まるで、自分と相手の命をチップに変えて、ルーレットをしているように感じる。

・・・ますます、氣にくわねえ。

戦闘が再開して数分。何回目かになる衝突がすべて似たような感じだ。ギリギリの所でお互い引いてまた仕切り直す。これが繰り返されている。

お互いの実力が均衡しているのか、互いに攻撃が当たらない。拳を放つとよけられ、銃を撃たれるとこちらも避ける。こうも力が同じだと、決着に時間がかかりそうだ。

いや、それは間違いだ。実力が均衡などしているわけがない。間違はなく、俺が圧倒的に強いはずだ。スピード、パワー、技術、スタミナ・・・どれをとっても、俺が本調子なら瞬殺できる。

けど現状は違う。その原因は自身の身体能力の高さがだ。この高い身体能力をコントロール仕切れていないのが、原因なんだよ。

例えば、普通の人間が悪魔に転生したとする。するとその人間はそれだけで身体能力が跳ね上がる。例をあげるならイツセーだな。アイツは普通の人間から悪魔になったから何段階か能力が跳ね上がっている。そういったタイプなら戦闘の時に困らないだろう。自身の全力を出す以外、戦う方法がないからな。それに元々にかしていたわけでもないから、自身の身体能力の時の戦闘方法もあんがいスルリと覚えられるだろう。

けど、俺は違う。俺は悪魔に転生する前から、土台となる自身のス

タイル、つまり戦い方がある。本道進が積み上げてきた数年間の努力が作り上げた本道進だけのスタイルだ。それをもう今さらかえるきもないし、変えることもできないだろう。このスタイルを持って戦っていくしかないのだろう。

だが、ここで問題になるのが悪魔となったときに上がった身体能力だ。人間だった頃の俺の身体能力を普通の乗用車の性能としよう。その車は段階を踏んで能力を上げていく物だったのだ。長い時間をかけて、エンジンやブレーキやギアの回転数を徐々に引き上げていき、最終的にF1カーになるものとしよう。だがそれがある日突然、エンジンだけF1カーになり、それ以外が普通の乗用車のままになったらどうなるだろうか。エンジンは空回りし、ほかのシステムはるくに機能しないだろう。

つまり、悪魔になった俺が引き出せるパワーをF1カーのエンジンであり、そのパワーを使い切る技術、経験をほかのシステムなのである。動力源だけが突飛しすぎて、ほかのシステムが機能できないでいるのが、今の俺の状況だ。

出せる力は絶大だが、それをコントロール仕切れていないのだ。踏み込みは入りすぎてしまう。拳には力が入りすぎてしまう。攻撃は見えずぎてしまう。今までに作り上げた技術があまりにもデカい力について行っていない。

だから、力を抑えて戦うしかないのだ。コントロール仕切れないでいれば隙ができ、命とりになりかねないかならな。幸いにも、今までの訓練のお陰で人間だったところと同じくらいには制御できている。つまり、デカい力を抑えて、人間の頃と同じ出力で今戦ってるってわけ。

「マジでままならねえよ・・・」

「・・・？なにがだよ、クソ悪魔」

神父が銃口をこちらに向けながら聞いてくる。

「別に、もういい加減飽きたなっっていっただよ」

「同感でえーすッ！！俺も同じ悪魔と長く戦いたくなんてありませんッ！！より多くの悪魔をチョンパするのが夢なのッ！！だ・か・ら・・・死ぬよ」

いきなり引き金が引かれる。音はでないが、弾は撃ち出される。てか、一発でも当たればアウトってどんなクソゲだよ。難易度たかすぎじゃね？

光弾を右に移動してよける。だが、よけたさきに俺の頭めがけて俺の顔の大きさぐらいの石が飛んでくる。

パンツ！！

飛んできた石を左ジャブで打ち砕く。石は粉々に砕かれ破片は地面に落ちる。次の攻撃を確認しようと思いを向くと、そこに神父の姿はない。すると――

・・・ヒュ・・・

風を切り裂く音が微かに俺の後方から聞こえた。慌てて魔力をコートにおくり能力を発動する。同時に腰を捻って背後に回し蹴りをかますッ！！

ガキンッ！！

足が物体とあたり音をだす。剣だ。さきほどまでヤツが使っていた光の剣。それがそこにあつた。

なるほど、石を投げた瞬間、落ちてた剣を拾ってそのまま切りかかったってわけね。

「ビンゴッ！！」

残忍な笑みを浮かべながら、銃が握られたもう片方の手を前にだし、引き金をひく。撃ち出される光弾。完璧に俺の顔を捕らえている。

「クッ——」

それを後方に引いてやり過ごす。コートの能力を使ってもいいが、あとの事を考えると使いたくない。それにあと2回ぐらいしか使用できない。

俺が引いたのを見送る神父。おかしいな、ヤツなら食らいついてくると思つてたんだが。いや、それ以上に気になるのが神父の表情だ。

——怒っている。

今までのイライラするような顔はどこにいったかと思うほどにその表情は憤怒に染まっている。まったく、なんつー面で睨んでくるんだよ。

「——」

互いが互いを睨む。どれくらいこうしていたのだろうか。数秒かもしくは数十秒か。その睨み合いを終わらせたのは神父だった。

「——んだよ。なんなんだよ、おまえッ！！悪魔だろッ！！悪魔なんだろッ！！なんで銃にあたって死なねえんだよ。剣できられないんだよッ！！ファ。クッ！！ファ。クッ！！ファ。クッ！！死ねよ。死ねよ！死ねよッ！！いいかげん死ねっのッ！！うぜえんだよッ！！悪魔は殺すものだッ！！きたねえ汚物（悪魔）は素直に殺されときゃあいいいんだっのッ！！俺の快樂の糧になつときゃあいーんだよッ！！」

ヒステリックな声をあげながら神父が狂言する。慟哭と思うほどの叫びだ。ホント、喜怒哀樂が明確なヤツだな。

緩みかけた思考をさらに引き締め直す。腰を落とし、構えをとる。臨戦態勢だ。刮目せよ。これより目の前にいる敵は——

「悪魔は殺すッ！悪魔は殺すッ！！悪魔は殺すッ！！絶対に殺すんだよッ！！だからおまえはころされときゃあいいいんだよッ！！だけど、なんだよこりゃあ・・・、なんなんだよオマエッ！！オマエが・・・、オマエさえいなきゃ・・・ッ！！——もった悪魔を殺せたのによおお——ッ！！」

——まぎれもない狂戦士（強敵）だ。

「うづめッ！！」

頭上から振り下ろされる狂剣。太刀筋もなにもかもムチャクチャだ。だが、コレに切れ味など必要ないのdarou。悪魔の弱点は光。光でできた剣はかすっただけで致命傷となる。

シュツ！ホオツ！！シャツ！！スシャアツ！！

そのすべてをかわす。あたりさえすれば終わるが当たらない限り問題は無い。オマエの振り、払い、切り上げの速さは一回みただけでもう見切った。

「ッ！——クッ！！」

ブオウツ！！

カウンター狙いでヤツのレバーに拳を放つ。だが、奴は体を捻って無理矢理よけ、距離をとるためバックステップする。放たれた拳が空を穿つ。

「ならコレでッ！！」

これならばと言わんばかり銃を放つ。その銃ももう見飽きた。

「その銃。撃ち出される銃弾の速さは大きく変化しないから、一度感覚がつかめると——」

シュ・・・

頭を狙って撃たれた銃弾をスレスレで首をズラしてかわす。

「なッ!？」

「簡単によけられる」

銃弾が避けられたことに驚愕する神父。おいおい神父よ――

「氣い緩みすぎだろッ!！」

ダンッ!!

「グゴハッ!？」

距離を一秒でつめ、油断した神父の溝に一撃いれる。体は数メートル先まで転がり、先ほど頭をぶつけたのと同じぐらい痛んだお墓にぶつかり止まった。

「グッ・・・ゴッ・・・グヘエ・・・」

神父が吐瀉物を吐き出す。いや、血も混じってるから吐血になるのか?よくわからん。

「あのさあ、神父・・・。もう止めにしないか?実力差がクジラとミジンコぐらい違う。普通の悪魔ならきく武器も、俺には効かないみたいだし。もう手札がないだろ?悪いことは言わないから引けよ。もうお前に興味ないからよ」

そう。もう俺の中では、コイツとの戦いにケリがついてる。殺そうと思えば、奴がまばたきする間にだって殺せる。何十回と奴を殺すチャンスをつつてきたのだ。

俺の提案が耳に入ったようで、神父がノロノロと起き上がる。ほほ
おゝ、まだたてるかぁー。手加減はしたが、並みの人間なら余裕で
死ぬくらいの一撃だったんだが。

「ふざ、けんなッ！俺が、俺がいつから悪魔を殺してると思ってた
やがるッ！？14だッ！14の頃からテメエの同族殺してんだよ
ッ！その俺がッ！悪魔に見逃してもらったあッ！？ふざけんじ
やねえよッ！殺し合いてんだよッ！どっちかが死ななきゃッ
！！終わりじゃねえんだよッ！！」

神父が激昂する。まあ、俺もんなこと言われたら怒るわ。ん？じゃ
あなんでいったかつて？単純に、ヤツのプライドを粉々にしたいか
らだ。戦いの決着はついてるが。俺の楽し・・・、怒りがおさまっ
たわけじゃないからな。

「そうか。ちなみに俺は物心ついたときから内乱の一番激しい所を
鎮圧するのにわずか一時間ですむ奴と毎日殺されながら殺し合いし
たぜ？年期がちがうんだよアホが」

いや、マジだつて。親父、いつも見てる番組が内乱の特集で潰れた
からっていう理由でいきやがったからな。敵味方問わず、とりあえ
ず銃とか刃物もった奴らだけ半殺しにしたっていった。コイツこ
そ悪魔だろ。

「まあいいや。んでどうするんだ？俺はお前を殺す気はない。アレ
を殺すまで、それ以外の敵を殺す気はないからな。けど、おまえは
どっちかが死ぬまで殺り合いたいんだな？」

「・・・当たり前だろ、クソ悪魔」

「だったら、お前がやることは一つだろ？その一つに、全部かけるよ」

――瞬間、世界が凍える。

殺気だ。凄まじいほどの殺気。世界が凍ってしまいかとおまうほどの、冷たくそれでいて鋭利な殺気。その全てが俺に向かってくる。

「――ハッ！！なんだよ、この殺気（良いもの）だせるんじゃねえかッ！！いいぜ、いいぜッ！！また、盛り上がったきたあッ！！」

冷めていた闘志にマグマが降りかかる。心臓の鼓動が跳ね上がる。ドクンドクンと音を上げていく。今はその音がたまらなく愛しい。自分が、生きている感じが、自分がいまここで存在していることを実感する。

そんな中、ヤツの言葉を思い出す。なるほど、確かにたちの悪い性病だな、コレッ！！認めてやるよ、神父。俺とお前は同種だ。確かに、戦いしか興奮できないわ。だが、構うものか。俺が俺であるのに、この麻薬は必要だッ！！

神父の方をむき直す。すると、神父はさっきまで持っていた銃を横へと放る。そして、光剣をゆらりと肩まであげ、そこで止める。間違いない。突きの構えだ。なるほど、確かに払いや切り上げは見たがまだ突きは見てなかったな。

だが、突きは一撃必殺であり、爆弾だ。一番切り方で速さも威力もあるが外せば最後。決定的な隙ができる。それをアイツがわかってないとは思えない。この状況でそれをする度胸。なかなか出来るものじゃない。こちら、多少は覚悟はしなくてはな。

ヤツは決死だ。決死の攻撃は、よけることは不可能としれッ!!

「神父・・・名は？」

腰を落とし、左足と左手を前にだし右腕と右足を後ろにひく。体重は右足に、左手は掌に、右手は拳に。この構えから放たれるは、死激と知れッ!!

「・・・・・・・・フリード。フリードだ。あんたは？」

短く答えるフリード。剣をより一層強く握りしめる。満ち足りていた殺気がより一層濃くなる。その殺気が心地いいのか自然と笑みができる。

「・・・本道進だ。運が良くても悪くても、もう一度くらいはあうかもな」

「ならねえよ・・・俺が、殺してやるよ・・・」

「できるのなら」

睨み合う両者。今日で二回目になる睨み合い。だが、一回目とは決定的に違うのは、一撃にかけるチップの重さ。文字通り、命を賭けている。

「いくぞ、本道進うう——ッ!」

「こい、フリードッ!」

弾丸を思わせるような速さで突っ込んでくるフリード。その体は一本の矢のように見える。なるほど、空気抵抗をなくすため体を一直線上にしてるわけね。

——射程圏まで3メートル

最高速度に迫ろうとするフリード。あの状態からの突きは途轍もない威力となりそうだ。普通なら避けるべきだが、そうはいかない。これほどの戦い、味あわなきゃ損だろッ!?

——射程圏まで2メートル

依然として構えをとかない。一見すれば、この構えはまさしく拳をうつ為だけに思えるが、そうじゃない。そう思わせることに、この構えの特性だ。

——射程圏まで1メートル

コレは、先の先をとるように見えるがそれは違う。この構えは後の先も同時にとっている。その理由を今から教えてやるよッ!!

——射程範囲内

フリードが剣を突き出すッ!!全速力で踏み込み、全力を乗せた、決死の一撃。よけるのは不可能、コートで防ぐのは無粋。やることは一つだけだ。

突き出される絶殺の突き。剣先はもう俺の頭の近くまで迫っている。
それを――

ザッ！！

――左手でそらすッ！！

避けるのも防ぐのも出来ないのなら、攻撃の起動を変える。つまり、
攻撃をそらす。力を加えるのは剣身の中央あたり。そこに左手で軌
道を変える

瞬間、左手から激痛。当たり前だ。フリードの持つ剣は光の剣。光
は悪魔にとって弱点そのもの。素手で触ろうとすれば、たちまち激
痛が走るに決まっている。だが、コレほどまでとは予想していなか
ったよ。

反射的に引きそうになる左手にさらに力を加える。激痛によりでき
た叫びを喉で押し返す。ふざけんなッ！！ここで引いたら、この先
のどんな相手にも負けることになるッ！！

奴の剣が頬をかする。予想以上の痛みと、自分の度胸のなさで予定
より少しそらしきれなかった。頬をきつた事で、そこからも激痛が
生まれる。だが、それで止まってはられないッ！！

右足に入っていた体重を左足にシフトする。そして、左足を中心に
右足を半回転する。フリードと俺の体が平行に並ぶ。俺の背中には
奴の突き出した剣がある。だが、それに当たることはない。

右足をちょうど半回転し終わるとまた再び体重を右足にシフトする。

そして、右足に送った時に生まれた力と腰を回転させて生まれた力を混ぜ合わせた一撃（肘）を、やつの頭に当てるッ！！
パンッ！！

一撃が完璧に奴の頭の横に入る。そのあまりの威力で奴の体は横に吹き飛ぶ。だが、受けた本人はなぜ吹き飛んでいるのかはわかるまい。

ズシャアア・・・

勢いが死にきるまで数メートルかったようだ。奴は人形のように転がっていった。恐らく、もう意識がないのだろう。今の一撃は下手すれば頭を破裂させる一撃だからな。まあ意識があってもしばらくは脳震盪で動けないがな。

仰向けに倒れ伏せるフリードを横目に、傷を確認する。・・・うん、グロい。なんか皮がデロンデロンになってる。あと、血が止まんない。ヤバいな、止血、止血と。

キュ。

「これで、よし」

持っていたハンカチでしばり止血をする。てか、治るよね？この傷・・・

「さて、と・・・」

一応、フリードの生死を確認してからイッサーたちの方に向かうかな。確認するために、フリードのもとへ向かう。意識は・・・、ま

じかよ。まだあるよ。氣い失いかけだが。

「よお、フリード。まさか今のくらって意識があるとは思わなかったぞ。しゃべれ……るわけないか。じゃあな、俺は行くわ。中々、楽しかったよ」

それだけ言っつて背中を向ける。一歩踏み出そうとしたところで、言葉をかけられる。

「……ヘッ……、同、種（化物）……が……」

それだけいうと事切れたようにフリードは氣を失う。その言葉を聞いて、俺は奴に振り向かず歩み始める。

「ああ。……いまさら、氣づいたよ」

悪魔（のしもべ）始めました！チップと死激（後書き）

なんか、書いてて主人公が途中神父にみえた。進鬼畜すぎだし・・・。
。つか、神父のキャラ崩壊しちゃったような・・・。まあいつか。
あと数えるほどしかでないしね。

遅れた理由は色々なんです。まず一つ。日曜日、模試。これの為に割と勉強してた。あと、話がね。今回、三回くらい書き直しました。いやあー、うまく戦闘が書けなくて。ゆるしてください。

ヒロインアンケートの集計は終了し決定しましたッ！！ヒロインはなんとッ！！小猫ちゃんッ！！それとゼノヴィアですッ！！おめでとーパチパチ

アンケートに協力してくださったみなさん。ありがとうございます。これからも不肖、アンサラー。頑張っていくます。どうかこれからもよろしくッ！！

と、最後に一つ。突然ですが、三週間ほど休載しようと考えています。実は来週は学校のテストがあり、再来週には大学の試験、つまり受験があるんです。さすがに、この小説をかきながら行うのは難しく、ましてや欠点や不合格を取ってはならないので、休載しようと考えています。この小説を楽しみにしている方がどれほどいるかはわかりませんが、休載します。本当にごめんなさい。

それでは、また次回。次は十月の中頃になりますが、どうかよろしく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1928u/>

ハイスクールD×D～道を貫き抜きし者～

2011年9月22日20時33分発行